平成３０年３月ＮＨＫ四国地方放送番組審議会

３月のＮＨＫ四国地方放送番組審議会は、１９日(月)、ＮＨＫ松山放送局において、１０人の委員が出席して開かれた。

会議ではまず、前回の審議会での答申を受け「平成３０年度四国地方向け地域放送番組編集計画」を決定したこと、およびこれに基づいて策定した「平成３０年度四国地方向け地域放送番組編成計画」について説明があった。続いて、事前に視聴してもらった四国羅針盤スペシャル「南海トラフ巨大地震　“その時”命を守るために」を含め、放送番組一般について活発に意見の交換を行った後、４月の番組編成、放送番組モニター報告および視聴者意向についてそれぞれ説明があり、会議を終了した。

（出席委員）

委員長	髙橋　祐二	（三浦工業代表取締役会長）
副委員長	松島　裕彦	（四国旅客鉄道監査役）
委　　員	神田　優	（ＮＰＯ法人黒潮実感センター センター長）
	黒笹　慈幾	（南国生活技術研究所代表）
	柴田　智恵	（有限会社大豊陸送代表取締役社長）
	田坂　實	（愛媛県農業協同組合中央会会長）
	床桜　英二	（徳島文理大学総合政策学部教授）
	土佐　礼子	（三井住友海上火災保険 陸上競技部 プレーイングアドバイザー）
	滑川　里香	（一般社団法人マチのコトバ徳島 代表理事）
	西本　佳代	（香川大学 大学教育基盤センター 講師）

（主な発言）

＜ 四国羅針盤スペシャル
「南海トラフ巨大地震“その時”命を守るために」（松山）
（総合　３月２日(金)）について＞

○　四国共通の地域課題である南海トラフ巨大地震のリスクが、今後３０年間で７０～８０％に引き上げられた。このリスクに対し、地震発生前、発生時、避難生活という３つの段階での適切な対応があって初めて命を救うことができるということを伝えていた。東日本大震災から７年たち、災害の風化が問題となっている今、意味のあ

る番組だった。４つの自治体を取りあげ、地震への対応と課題を明らかにしていた。これらは四国の多くの自治体で共通課題として指摘されており、改めて南海トラフへの対応の難しさを示していた。また、実効性の高い対応策を早急に検討し、着実に実行に移していくことの重要性も伝えていたと思う。昨年１１月に開始した地震情報の仕組みの転換について取りあげたのはタイムリーだが、短時間の紹介で、意図した内容が正確に伝わったのかは疑問だった。震災の風化についてだが、公共放送として３月や９月など過去の震災の節目には四国共通の番組で防災減災を取りあげてほしい。その際は、課題と対策をセットに紹介することを意識してほしい。また、自分や家族の命を守るのは自助であることを分かりやすく伝え、視聴者が震災を自分事と捉えてもらえるような番組を期待している。

○　私自身、震災や防災に対して意識が低いと自覚しており、昭和南海地震の映像から始まった今回の番組を、身が引き締まる思いで視聴した。臨時情報の精度について、「情報が繰り返されると危機感が無くなる」という発言があったが、同感だ。東日本大震災など大地震の直後は防災意識が高くなるが、年月がたつと次第に意識が低くなる。風化させないことは大切だが、専門家などが危機感をあおりすぎるのも違和感がある。地震とまちづくりを絡めた紹介があったが、ナンセンスだと思った。それよりも、防災減災に意識の低い人たちの意識を高めることが重要だ。防災士の木藤容子さんが「行政は頼りになりません」という発言をしていたが、まさにその通りだと思う。被害が拡大するのは行政の責任では無いし、自分や家族の命を守るのは自分自身だと思う。ゲストの井上晴美さんの発言は説得力があって印象に残った。巨大地震を少し遠い存在に感じてしまった部分もあったため、個人の意識をもっと高めてくれるような番組も期待している。

○　南海トラフ巨大地震に向けた防災の最前線と課題について検証し、命を守るために何をすべきか、考えることをねらいにした番組だった。防災の現状と課題が分かりやすくまとめられていたと思う。特に、高齢化の問題と絡めて紹介したことで、四国ならではの困難な状況が伝わってきた。谷地健吾キャスターの進行はスムーズでよかった。ただ、スタジオが、出演者の衣装も含めて暗色で統一され、ものものしい雰囲気があり、防災が「非日常」として扱われていたのは気になった。確かに、南海トラフの被害は大きく、軽く扱われる内容ではない。一方で、私たちはいつか来る「その時」のためだけに生きているわけではないため、防災が日常の中に存在していることが薄れてしまう演出だったと思う。南海トラフを視聴者に身近に考えてもらうのであれば、防災と日常を核にした番組にしてもよかったと思う。また、香川県など被害が比較的少ないと見込まれている地域だからできる対策なども知りたかった。

○　四国のほぼすべてが甚大な被害を受ける南海トラフ巨大地震は喫緊の課題であるが、「その時」がいつやってくるのか分からないことに対策の難しさを感じた。地震発生前、発生時、避難生活という３段階での課題について、各地域の事例が紹介されていた。課題解決の難しさは伝わってきたものの、何をどう行うべきなのか、という点はあまり触れられていなかったのが気になった。実際に被災された方の経験談などから、取るべき行動を伝えてほしかった。井上さんの「自分の身は自分で守る」ということばが印象に残った。南海トラフにつながる異常を観測した場合、専門家がそれを評価し、地震発生の可能性が高まったときには臨時情報が出されることは初めて知った。地域として防災力を高めたうえでそれぞれの地域が連携し、各家庭での情報共有も密にする必要があると感じた。災害はいつ起こるか分からず、災害への備えに正解もないことから、日頃の防災教育や訓練の積み重ねこそが「その時」に命を守ることにつながることを、番組を通して痛感した。

○　南海トラフ巨大地震が３０年以内に起こる確率は高く、危機感を持っている。こうした状況で、南海トラフで大きな被害が予想される自治体の現状を取り上げ、実際に巨大地震が起こった「その時」にテーマを絞り、現時点での課題を提起していたことは意義があったと思う。高齢化が進んだ地域の紹介では、地震に対して高齢者たちが半ば覚悟し、諦めている現状に、じくじたる思いを持った。愛媛県愛南町のグループホームでも「その時」に備えて避難訓練を行っているが、高台の避難所へは車いすの移動で１０数分もかかるなど、各地で適切に避難できるのかという不安を抱えている。南海トラフの危機が迫る中、防災対策はまだまだ課題が多く、今抱える問題に一つずつ確実に対応しなければならないと感じた。今後も、定期的に同様のテーマで発信を続けてほしい。また、瀬戸内海側の自治体の取り組みと課題についても取り上げてほしい。出演者を下方から撮影する演出は違和感を持った。

○　昭和南海地震の映像から番組が始まり、引き込まれた。番組の構成が冒頭で示されていたため、見やすい作りになっていた。高知県室戸市の例では、地震の臨時情報への対応が問題提起されていた。臨時情報が出された場合の対応の難しさは大きな課題で、考えさせられた。高知県黒潮町の例では、高齢化が進んだ地域のため、住民たちから諦めの声が聞かれたが、こういった声を現実として率直に伝えたのは意味があったと思う。木藤さんの「行政は頼りになりません」ということばは、印象に残った。ふだんから自分でできることは何かを考え、準備をしていることが重要で、行政が何とかしてくれるというスタンスではいけないということが伝わってきた。今回の番組は、ありのままの現状を示して問題提起をしたところに意義があったと感じている。今後は、その問題に対して深く掘り下げるような続編を期待している。

○　南海トラフ巨大地震が３０年以内に起こる確率が引き上げられたが、四国に住む人たちの危機感は全体的に足りていないと感じた。日常生活で防災減災の対策をしておくことの重要性がしっかり伝わってきた。ただ、高齢者の避難に少し重点を置きすぎているように感じた。井上さんの熊本地震の体験談は説得力があった。家具や本棚を固定していても壁や天井ごと崩れた話など、とても参考になった。臨時情報が出されることになった戸惑いが伝えられていたが、この情報をどう生かすかということをもっと掘り下げてほしかった。自分や家族をどう守るかは自己責任であることをもっと伝えるべきだと思う。木藤さんの話は分かりやすくてよく、「行政は頼りにならない」などの発言は明快だった。高齢者には昭和南海地震を経験した人もいるはずで、その方々の意見を聞いてみたかった。昭和南海地震や東日本大震災の映像が効果的に使われていたと思う。

○　四国の中でも、特に高知県は南海トラフ地震対策が喫緊の課題。今すぐにでも対処しなければならないことを、再認識させる番組だった。地震から命を守るため、３つのテーマに分けてそれぞれの問題点を示し、どう向き合うべきかを詳しく展開しており、分かりやすい構成だったと思う。南海トラフ巨大地震の脅威について、被害の想定を具体的な数字で伝えていたが、その数字が大きすぎてあまり現実感が伝わらなかったため、東日本大震災と対比するなど工夫があるとよかったと思う。臨時情報やタイムライン防災の話題は勉強になった。臨時情報が出されたときの現場の対応について問題提起されていた。臨時情報が出た際にどうすべきかという指針はまだ示されておらず、困惑する自治体の現状が紹介されていたが、事前情報を出すことによる混乱のほうが危険だと感じた。気象庁が臨時情報を出すことにした背景をもっと詳しく解説してほしかった。課題の数々は理解できたが、もの足りなさがあったため、次回は具体的な解決策まで踏みこんだ番組を期待している。

○　東日本大震災から７年たった今、次は南海トラフ巨大地震だと毎日のように言われていても、「その時」に向けて真剣に取り組んでいる地域とそうでない地域には大きな格差があると感じた。臨時情報の精度とその取り扱いに対する課題が紹介されていた。臨時情報が出た際にどのように行動するかを検討するきっかけにするだけでも意味がある、という意見はすばらしい。木藤さんが発言していた自助共助や地域コミュニティーの大切さはまさにそのとおりだと思う。避難所不足に関して、民間の施設を避難所として使うという動きはいいことだと思う。防災リーダーの人材育成に関して、意識改革が鍵であることは間違いないが、問題は意識をどう変えていくかで、掘り下げ不足だった。南海トラフに関してはこれまでもさまざまな番組が放送されてきたが、今後は全国での先進事例など、住民や行政が実行できるような具体例を紹介しながら、視聴者に訴える番組を作ってほしい。被害者ゼロを目指し、公共放送の役割

を果たしてほしい。

○　地域ごとにどういった防災対策が進んでいるのかという視点から、興味深く視聴した。昭和南海地震のニュース映像から始まり、南海トラフ巨大地震の３０年以内の発生確率が引き上げられたことを伝えていた。ＣＧを使った効果的な映像もあり、命を守るための対策が待ったなしであることが伝わるインパクトのある導入だったと思う。巨大地震発生の可能性が高まっているときに気象庁から出される臨時情報は、発表されても自治体や住民がどのように対応するかが定められていないため、住民たちが戸惑う様子が見て取れた。特に、高齢者や体の弱い人たちの避難対策に課題が多いと感じた。住宅の耐震化率が低いことも大きな課題で、命を守るためには津波避難タワーの建設よりも別の方策が効果的ではないかと感じた。ゲストの方々の発言はどれも分かりやすかったと思う。自分たちの命は自分たちで守るという「自助公助」の重要性を感じた。こういった番組をきっかけに、防災組織に参加する人や防災士が増え、人材育成が進むことを期待している。

（ＮＨＫ側）

指摘があったカメラワークについては、ライブ感を伝えるねらいがあった。防災を身近に考えてもらうという視点から企画がスタートしたが、取材を重ねる中で、命に関わる深刻な問題が山積していることが分かった。これらの問題を真剣に考えてほしいという思いから、非日常感の強い演出になってしまった。防災への意識の高い人ばかりが防災訓練に参加し、本来参加すべき人が参加していないという状況は、防災番組も同じだと考えている。見てほしい人にどうやって届けるのかは、大きな課題だと感じている。東日本大震災から７年がたち、風化が始まっている中、身近な情報としてどのように伝えていくかは難しい。問題提起をするだけではなく、具体的な対策をどう伝えていくかが課題だと考えている。臨時情報については、今後も動きを取材して伝えていきたい。取材する中で、特に四国は高齢化や人口減少の問題が防災と結びついていると感じた。対策への道筋が見えにくいのが現実だが、適切に機会を捉えながら防災について伝えることは重要だと思っており、引き続き力を入れて取り組んでいきたい。

＜放送番組一般について＞

○　２月から３月にかけて放送された「シリーズ　欲望の経済史～日本戦後編～」（Ｅテレ 後 10:30～10:59)を視聴した。圧倒的な資料映像や当時を象徴する人物のインタビューが盛り込まれており、引き込まれた。こうした番組の制作は、公共放送の重要な役割の一つだと感じたし、公共放送が扱う「教養」にふさわしい内容だったと思う。やや内容を盛り込みすぎの感もあったが、多くの人に知ってほしい情報が散りばめられていた。テーマ音楽や構成も洗練されていてよかった。今後もこうした番組を作り続けてほしい。

○　３月２日(金)のシリーズ　瀬戸内宝石箱「白き竜よ舞え～愛媛　長浜・肱川あらし～」（総合 後 8:15～8:44 四国ﾌﾞﾛｯｸ)を視聴した。ドローンでしか撮影できない映像や番組タイトルがよく、すばらしい番組だった。瀬戸内に特化した自然番組は魅力的で、地方局ならではのいいシリーズだと思う。番組冒頭の砂絵の演出や音楽もよかった。見事な映像の数々で、見入ってしまった。また、人々の暮らしぶりも生き生きと描かれており、見事な仕上がりだった。

○　３月２日(金)のシリーズ　瀬戸内宝石箱「白き竜よ舞え～愛媛　長浜・肱川あらし～」を視聴した。委員が発言したように、すばらしい番組だった。圧倒的な美しい映像からは、撮影や取材の大変さも想像できた。特に、上空からの映像がすばらしかった。

○　３月７日(水)のねほりんぱほりん「介護士」（Ｅテレ後 11:00～11:30)を視聴した。介護に対する本音を赤裸々に表現しており、インパクトのある番組だった。なかなか本音で表現しづらいことを、人形が語ることで率直に伝えており、思い切ったすばらしい番組だと思う。今後の放送も期待している。また、Ｅテレは最近「欲望の経済史」などいい番組が多く、よく見ている。

○　３月１１日(日)のＮＨＫスペシャル 東日本大震災「めざした“復興”はいま…～震災７年　被災地からの問いかけ～」（総合 後 9:00～10:13)を視聴した。大越健介キャスターがとてもすばらしかった。番組の最後に復興大臣にインタビューする場面では、復興庁が被災者に向き合う姿勢をしっかり伝えていた。復興庁は 2021 年３月末までに廃止される予定で、危機感を覚えた。こういった番組でもっと現実を伝えていってほしい。

○　３月１４日(水)の「ひめポン！」を視聴した。「前園真聖の自転車遍路旅」というコーナーでは、前園さんが自転車で遍路をしている。とても見やすく、前園さんのよさがよく出ており、遍路という題材を気軽に見ることができた。前園さんはおもしろ

く、これならば若い人たちにも遍路に興味を持ってもらえるという印象を受けた。また次回も視聴したい。

○　３月１７日(土)に再放送されたＮＨＫスペシャル「原発メルトダウン　危機の８８時間」(総合 前 0:50～2:19)を視聴した。人の強さと弱さがリアルに伝わってくるいい番組だった。四国の各放送局も連携し、南海トラフ巨大地震について防災の人間ドラマを作ってもいいと思う。防災への意識も高まると思うので、チャレンジしてほしい。

○　３月１７日(土)のＮＨＫスペシャル メルトダウンＦｉｌｅ．７「そして冷却水は絞られた～原発事故　迷走の２日間～」を視聴した。吉田所長を演じる徳島出身の俳優、大杉漣さんの演技がよく、見応えがある番組だった。ただ、番組開始後にこの番組が放送されていることを知った。番組のＰＲについてだが、例えばＳＮＳで出演者の名前を検索すると、出演している番組が分かるようにするなど、もっと工夫してほしい。

○　３月１７日(土)のニッポン印象派「水の峰　雲の山」(ＢＳプレミアム 後 11:00～11:29)を視聴した。石鎚山の四季を取り上げたとても美しい番組だった。ダイナミックなすばらしい映像の数々で、ドローンを用いて頂上の様子などが美しく撮影されていた。この番組で初めて知った知識も多く、映像美に心が洗われるいい番組だった。

ＮＨＫ松山放送局
番組審議会事務局

平成３０年２月ＮＨＫ四国地方放送番組審議会

２月のＮＨＫ四国地方放送番組審議会は、１９日(月)、ＮＨＫ松山放送局において、１１人の委員が出席して開かれた。

会議では、「ＮＨＫ経営計画 2015-2017 年度」の概要についての説明、「平成３０年度国内放送番組編集の基本計画」および「編成計画」についての報告があった。引き続き、「平成３０年度四国地方向け地域放送番組編集計画（案)」の諮問にあたって説明があり、審議の結果、番組審議会として原案を可とする旨、答申することを決定した。続いて、事前に視聴してもらったＤｉｓｃｏｖｅｒ四国「“リノベーション”でまちが変わる」について活発に意見の交換を行った。

最後に、３月の番組編成、放送番組モニター報告および視聴者意向についてそれぞれ説明があり、会議を終了した。

（出席委員）

委員長	髙橋　祐二	（三浦工業代表取締役会長）
副委員長	松島　裕彦	（四国旅客鉄道監査役）
委　　員	神田　優	（ＮＰＯ法人黒潮実感センター センター長）
	黒笹　慈幾	（南国生活技術研究所代表）
	柴田　智恵	（有限会社大豊陸送代表取締役社長）
	田坂　實	（愛媛県農業協同組合中央会会長）
	床桜　英二	（徳島文理大学総合政策学部教授）
	土佐　礼子	（三井住友海上火災保険 陸上競技部 プレーイングアドバイザー）
	長井　基裕	（愛媛新聞社執行役員編集局長）
	滑川　里香	（一般社団法人マチのコトバ徳島 代表理事）
	西本　佳代	（香川大学 大学教育基盤センター 講師）

（主な発言）

＜「平成３０年度国内放送番組編集の基本計画」および「編成計画」について＞

○　Ｅテレは大好きでよく見ている。ニッチなテーマを扱った番組も多いため、視聴率を取るのは難しい。視聴率だけにとらわれず、正当に番組を評価してほしい。ＮＨＫは放送している番組数が多いため、見たい番組を知らないうちに見逃してしまう。視聴者のライフスタイルに合わせて、好みの番組を教えてくれるような仕組みを検討

してほしい。

（ＮＨＫ側）

視聴率だけで番組を評価していることはなく、年齢層別の見られ方など、きめ細かく分析している。また、ＳＮＳでの話題性なども勘案している。今後も新しい指標の開発などを行い、それぞれの番組が必要な役割を果たしているかをしっかり評価できるようにしたい。また、視聴者それぞれの趣向に合った番組を紹介する手法については、課題として考えていきたいと思う。

○　2020 年に東京オリンピック・パラリンピックがあり、かなりの時間放送することになると思うが、それによって相対的に知らされない情報が出てくることを危惧している。４Ｋと２Ｋとの一体制作によって限られた経営資源を効率的に活用するとあったが、どの程度効率的になるのだろうか。ラジオとインターネットの連動とはどういったものなのか。番組のタイトルについて、カタカナのものが多すぎると思う。

（ＮＨＫ側）

４Ｋと２Ｋの一体制作について、２年ほど前から少しずつ始めており、これからも増えていく予定。特に、ＢＳプレミアムではかなりの数の番組を一体制作する。経営資源の効率的な活用については、経験値はまだ少ないが、結果をしっかり検証していきたい。ラジオとインターネットの連動についてだが、アプリを利用してスマートフォンでラジオを聞くという時代になっている。スマートフォンはラジオを聞きながら視覚からも関連情報を得ることができるため、それを利用した取り組みを行っている。番組のタイトルはそれぞれの担当が決めていて、全体を一覧にするとカタカナが多く、指摘をしっかり受け止めたい。

○　ＮＨＫは正しい日本語の使い方などをしっかり受け継いでいく役目もあると思う。ニュースの正確性や美しいことばの使い方を考慮した放送をしっかり考えてほしい。

＜「平成３０年度四国地方向け地域放送番組編集計画（案）」について＞

○　四国は人口減少などの共通の課題がある一方、特筆すべきは豊かな自然があることだと思う。四国の自然に特化した番組をシリーズで放送するなど、自然を取り上げた番組枠を検討してほしい。

（ＮＨＫ側）

４Ｋ機材を使って四国の自然を撮影し、その素材を元にした自然番組を地上波でも放送する予定。「肱川あらし」や、石鎚山の豊かな自然を取り上げた番組を今後放送する。シリーズというわけではないが、新しい技術も使いながら四国の自然の魅力を伝えていきたい。

○　南海トラフ巨大地震については関心が非常に高い。災害に関するさまざまな情報がホームページに掲載されており、豊富なコンテンツがある。こういったコンテンツを生かす工夫をもっとしてほしい。高知県域のニュース内で放送されている「南海地震ひとくちメモ」を刷新し、より注意を促してはどうか。

また、何かに熱中している小学生を紹介するような番組や、生誕 150 年を迎えた俳人の柳原極堂を取り上げた番組も放送してほしい。高松放送局の重点事項に「岡山局との連携」とあったが、こうした取り組みは期待している。

（ＮＨＫ側）

「南海地震ひとくちメモ」について、指摘のとおりだと考えており、対応したい。また、県民に寄り添うことをテーマにした番組展開なども考えたい。

○　四国地方向け地域放送番組編集計画案について、「地域の人々が自慢できる」とあるが具体的にどういうことか。また、平成という時代が終わるため、「平成」にスポットを当てた番組を放送してほしい。

（ＮＨＫ側）

地域の人々が自慢できる放送内容を目指すということ。四国は課題先進地と言われており、これまで課題解決型の番組を多く作ってきた。一方で、今後は四国の人々が元気になるような番組も制作したいという思いを、こうした言い回しで表現した。「平成にスポットを当てた番組を」という指摘はまさにそのとおりで、今後そういったテーマの番組やニュースも制作したい。

○　各局が重点事項の冒頭で防災減災を掲げているのはとてもよいと思う。ただ、例えば徳島放送局や高知放送局は津波で浸水することも考えられる。その場合、どういう形でバックアップをしていくのか、基本方針の中で触れたらいいのではないか。

（ＮＨＫ側）

非常時に備えてさまざまなケースを想定し、バックアップ体制も進化させている。南海トラフ巨大地震などの際は、拠点の松山放送局から通信衛星を使って、各県の山の上にある放送所に四国向けのプログラムを配信し、地上波の放送が途切れないようにするための設備整備を進めている。

○　防災減災にしっかり取り組んでいることがよく分かった。今後、子ども向けに分かりやすい防災番組を作ってみてはどうか。子どもの時に見たテレビの情報は長く意識に残るため、防災教育の観点からも有効だと思う。

（ＮＨＫ側）

意見については、真摯（しんし）に検討したい。

○　四国が一つになって活動している四国新幹線の構想など、四国内の交流人口を増やすことについては触れられていないが、どういったスタンスなのか。

（ＮＨＫ側）

新幹線に関する動きは、各県のニュースなどでそのつど丁寧に扱っている。今後も、各方面の動きをしっかり見極めながらお伝えしていきたい。

○　諮問された「平成３０年度四国地方向け地域放送番組編集計画（案）」については、委員から出された意見の趣旨が具体的な番組編成のうえで生かされることを前提に、番組審議会として原案を可とする答申をしたい。

○　異議なし。

（ＮＨＫ側）

答申を受け、このあと具体的な地域放送番組編成計画について決定し、３月の審議会で編成計画についてご説明したい。

＜Ｄｉｓｃｏｖｅｒ四国「“リノベーション”でまちが変わる」（松山）
（総合　１月２６日（金））について＞

○　高知県椿原町の、移住者を呼び込むための住宅支援などの施策は家庭を持つ人にとってありがたい。交流人口の拡大よりも定住人口の拡大の方が財政的にもコミュニティーとしても安定する。行政は限られた予算に対し、重点の置きどころを問われていると思う。一方で、移住支援制度が乱立し、自治体間の過剰サービスが問題にもなっていることは課題だと感じた。

香川県の男木島の例は、古民家のリノベーションにとどまらない、コミュニティーのリノベーションまで取り上げられていた。共同作業によって地元の人と移住者との間に共感が生まれ、それが島の再生につながったという点が重要だ。古い建物をリノベーションするのは効果的だが、耐震性などのリスクもある。コミュニティーのリノベーションでは、衰退に慣れてしまった地元の人たちが、移住者の存在によって新たな価値を見いだし、活性化につながることがよく示されていた。さまざまな事例の紹介とそれに対する日本総合研究所藤波匠上席主任研究員さんのコメントは的確で、いい番組だった。

○　急速な人口減少による地域コミュニティーの衰退は、地方が直面している共通課題だ。この課題に対しては移住という対策が掲げられることが多いが、リノベーションという視点から取り上げたのがよかった。建物などのリノベーションが起爆剤となって人々のつながりも強化されることが伝わってきて、地域の人たちにヒントを与える番組だった。愛媛県三津浜の事例は内容が乏しく、もう少し丁寧に伝えてほしかった。リノベーションの本質は「革新」で、それは痛みを伴う。椿原町の事例では、小学校などの再編で財源を確保して子育て支援に充当しており、それをよいことと捉えるような内容になっていたが、伴って生じた痛みをどう克服しているのかについても説明してほしかった。徳島の事例が紹介されなかったが、四国各県に例があるテーマだったため、各県から一つずつ取り上げたほうがよかった。事例を絞って深掘りした内容を視聴者に提供するか、各県からバランスよく事例を取りあげたほうがいいと思う。

○　子育て支援に力を注ぐ椿原町の取り組みは考えさせられた。椿原町の支援施策は、移住人口の増加を目的にとても充実していると感じたが、過剰になっている側面があると思う。育児に関することを無料にしたり、中学生の寮が格安すぎたりと、本来の目的とずれていて違和感があった。藤波さんが指摘していた、「移住支援の制度が乱立し、過剰になっている」といった指摘はまさにそのとおりだと感じた。地域の活性化は、その地域の人口が増えることが成功の指標ではない。その地域で経済を生み出し、それが回るということが本当の意味での地域活性化だと思う。リノベーションの例をいくつか挙げ、それによる地域活性化を示そうとしたのなら、やや中途半端だった。ビジュアルの変化を伴うリノベーションだけを深掘りしたほうがよかったと思う。

藤波さんの解説は的を射ており、もっと見解を聞きたかった。一方、ゲストの女性タレントはなぜキャスティングされたのか理解できず、コメントも薄かったため残念だった。

○　リノベーションをキーワードに、過疎が進む四国のまちづくりを紹介していた。人口減少は各地共通の課題だが、そこにリノベーションという手法を紹介し、解決策を示唆していたと思う。また、商店街、子育て環境、コミュニティーという三つのテーマを取り上げることで、幅広い世代が興味を持てる番組になっていた。藤波さんから、「移住支援の制度が乱立している状態」という解説があった。各地方単位でみると、移住支援の制度が充実することは望ましいことだが、日本全体で考えると単なる移住者の取り合いとなる。事例とともに、移住支援の限界も伝えていたところに、誠実さを感じた。一方で、地域活性化を題材にする難しさも感じた。地方のおかれた現状の厳しさやそこに至った経緯、地方に生きる人たちが抱えるジレンマなどを伝えることで初めて、若い世代が地域で生きるということを身近な問題として考えられると思う。視聴者は人口減少時代の四国に生きる人たちで、この問題が一筋縄ではいかないことを痛感しているため、もう少し問題の本質に踏み込んだ構成にしてもよかったと思う。

○　リノベーションをキーワードに、商店街、子育て環境、コミュニティーという切り口からそれぞれの事例が紹介され、単なる住宅の再生だけではなく、新たな付加価値を生み出している構造がよく理解できた。四国は最も人口減少が進んでいる地域であるため、人と人とのつながりがより重要になると感じた。椿原町の子育て支援策の充実ぶりには驚いた。老朽化した集会所のリノベーションは、費用を抑えられることに加え、地域の交流の場になるという意味でよい例だと思う。各自治体で移住支援が乱立し、移住希望者を奪い合っているという問題点がある一方、生活者に寄り添った取り組みは重要だ。地域の特性を生かし、東京一極集中という流れが変われば日本全体の活性化につながることを感じさせてくれる番組だった。ただ、中心市街地でのマンション販売に勢いがあるという紹介は必要性が感じられなかった。また、徳島県神山町の古民家オフィスの例など、全国的に有名なリノベーション事例について紹介があると、もっと四国らしさが伝わる番組になったと思う。

○　身近な話題が取り上げられており、親近感を持って視聴した。愛媛県松山市の柳井町商店街については、今まで何度も活性化対策が取られたものの、効果的な改善策がなかったと聞いていた。既存の建物をリノベーションして活用し、商店街とも連携してまち全体のリノベーションにつなげるという取り組みが効果を挙げている、との紹介に期待感を持った。子育て環境のパートについて、椿原町の手厚い子育て支援策には驚き、強い意気込みを感じた。移住を考えている人にとって、有益な情報になった

と思う。コミュニティーのパートでは、男木島の古民家を改装して図書館をつくり、そこが地元の人たちにとって欠かせない場所になっているとのことだった。地域の交流の積み重ねが、コミュニティーの形成につながったことが丁寧に紹介されていた。藤波さんのコメントから、地域活性化には地道な地域活動が大切だということが伝わってきた。丁寧な取材で、今後の地域活性化に期待を感じさせてくれる番組だった。

○　地域の事例が三つ紹介されていた。柳井町商店街の例と男木島の例は民間の知恵と活力をベースにしたものだったが、椿原町の例は行政が受け皿を準備して進めている事例だ。椿原町の例について、よい面を中心に取り上げていたが、その裏にはさまざまな負の部分があり、施策の実施に向けてう余曲折があったと思う。将来への希望が感じられる番組になっていたのはよいと思うが、だからこそ、負の部分も扱ってほしかった。過度な支援制度で移住希望者を奪いあっているという指摘もされていたため、やや深掘りが足りなかったと思う。ゲストが熊本在住の女性タレントだったのはがっかりした。発言も示唆に富むようなものはなかったため、四国在住のもっとふさわしい方を選ぶべきだった。また、松山在住の女性タレントも、進行役に終始してしまっていたのが残念だった。一方で、藤波さんのコメントは的確でよかった。

○　リノベーションについて解説し、建物に限ったことではないと説明したうえで三つの事例を紹介、そして最後に専門家がまとめるという構成は分かりやすく、地域活性化のヒントが散りばめられていた。徳島県の事例が取り上げられなかったが、テーマに沿うものがなかったのだろうか。柳井町商店街の事例が紹介されたが、ほかの商店街と比較して家賃相場はどうなのかなど、疑問が残った。また、南海トラフ巨大地震が発生する恐れがあるが、古い建物を改築する際は、耐震性を確保するための工事も行っているのだろうか。椿原町の例では、学校の統合などによって手厚い子育て支援が可能になったと説明されていたが、廃校となった学校がある地域の住民は快く思っていない部分もあると思うので、表現に配慮がほしかった。シングルファーザーとして子どもを育てている男性のことばからは、地域住民の支援のありがたさがひしひしと伝わってきた。藤波さんは「自然減は問題視しなくていい。人口減少を前提に経済規模をどう維持していくか。まちのファンを増やすことが大切」という考え方を明確にし、発言にも説得力があってよかった。

○　収録に使われた三津浜のリノベーションされた建物について、以前と比べてどのぐらい変わったのかを紹介してほしかった。柳井町商店街の事例では開店予定のレストランなど、供給側の視点で伝えていたが、利用者側の期待や評価も知りたかった。移住を希望している人たちが望んでいる制度が、住宅、子育て、移住支援、仕事の順であることには驚いた。椿原町の子育て支援は手厚く、過疎化の進む地域ではいいモデ

ルになると思う。男木島の図書館を拠点にした地域おこしの事例も、いい紹介だった。空き家をリノベーションする過程で島民の理解と協力を得られたことや、図書館を通じて移住者が増えたこと、クラウドファンディングで資金集めをしていることなど、どれも参考になる紹介だった。熊本在住の女性タレントの起用については、疑問が残った。一方、藤波さんの解説は的確で、どれも説得力があったため、適切な人選だった。藤波さんが「関係人口を増やし地域の経済を維持していく」と言っていたが、いいまとめだったと思う。

○　リノベーションについて三つの例を紹介しながら、分かりやすく伝えていたと思う。それぞれのリノベーションの例から、きっかけを作る火付け役の存在が重要だということが伝わってきた。火付け役がいるからこそリノベーションができるという本質的な部分をもう少し深掘りしてほしかった。リノベーションという手法で価値を生み出し、失われていたコミュニティーを取り戻せることが納得できた。リノベーションに関わりそこで成果を生み出した人たちのコメントを分析してみると、「豊かさ」に対して今までと違う新しい価値観を発見していることが分かる。この部分にもう少し焦点を当ててほしかった。商店街のリノベーションの紹介は、情報不足だと感じた。椿原町の事例についても、もっと詳細に伝えてほしかった。藤波さんは番組の趣旨に合った適切な人選で、コメントにも説得力があり勉強になった。「人口減少に立ち向かうより、その事実を受け入れ、どう地域の経済を回すかという方向で取り組むべき」との指摘は、まさにそのとおりだと思う。熊本在住の女性タレントの起用は意図がよく分からず、コメントも平凡だった。

○　四国の人口減少問題に対する番組で、興味深く視聴した。三津浜の古民家での収録もよかった。リノベーションと商店街、子育て環境、コミュニティー、という三つのテーマでそれぞれ分かりやすく伝えていたと思う。商店街の例では、地域と不動産業者などとの早期の合意形成が地域を活性化させ価値を生み出すことがよく理解できた。子育て環境の例では、椿原町の充実した子育て支援制度が紹介されたが、今後過疎化が進む地域での教育リノベーションのモデルになりうると感じた。ただ、各種制度の財源や自治体の補助金などについても触れてほしかった。コミュニティーの例では、男木島の図書館をきっかけに支援の輪が広がり、好循環が生まれていた。この例も有効なモデルケースになりうると感じた。交流人口を増やし、共感するファンを増やすことが重要で、それこそがコミュニティー・リノベーションだと確信した。出演者についてだが、四国出身者以外のゲストを起用する場合はどういった理由で選んだのかを説明してほしい。

（ＮＨＫ側）

ここ数年、四国のＮＨＫは人口減少や少子高齢化にどう向き合い、地域振興に向けて何が必要なのかというテーマを取り上げてきた。今回の番組は、リノベーションを課題解決のヒントと位置づけ、地域の再生に向けた動きを伝えることを目指した。前向きな動きを捉えることに狙いを絞り、人口減少という出口が見えない課題に対して四国各地で取り組みが始まっていることを伝えたいという思いだった。椿原町の例では、紹介した形の移住支援が本当に適切であるのかという点や、そこに至る過程で学校の統廃合が行われたということに､制作側も考えさせられた。番組では､取り組みのよい部分に焦点が合ってしまったきらいがあるが、悪い部分にもしっかり向き合う必要がある。よい点と悪い点をそれぞれ深く取材し、番組を通して発信するのが大切だと思っている。徳島県の話題を紹介しなかったことについてだが、四国全域かなり手広く取材した。さまざまな事例の中からどういった形で紹介するのがよいか試行錯誤した結果、今回の三つの例を取り上げた。商店街、子育て、コミュニティーの三つは四国で共通する課題ではないかと考えた。ただ、一部の地域の話題が取り上げられていないことは違和感や不満につながる可能性があるとも感じている。あらゆる地域をまんべんなく均等に取り上げるのは難しいが、そういったケースでもどうやって満足度の高い番組にするかを考えていきたい。熊本在住の女性タレントをゲストとしたねらいは、地域を拠点に子育てと仕事を両立している方だったため、思い入れのある地域に暮らす意義を、親しみやすいことばで発信してくれると考えたから。出演者の人選は極めて重要なので、引き続き番組に合う人を慎重に検討したい。

（ＮＨＫ側）

前回の審議会で、委員から番組タイトル決定のプロセスについて知りたいという質疑があった。まず、番組の企画立案段階で、番組のテーマを表現するタイトル案を設ける。その後、番組制作の過程において番組のテーマがより鮮明になったり、軌道修正をすることがある。こういったプロセスを踏み、編集が最終段階になるころ、番組の責任者である担当プロデューサーが番組のタイトルを決定している。

ＮＨＫ松山放送局
番組審議会事務局

平成３０年１月ＮＨＫ四国地方放送番組審議会

１月のＮＨＫ四国地方放送番組審議会は、１５日(月)、ＮＨＫ松山放送局において、１０人の委員が出席して開かれた。

会議では、まず事前に視聴してもらったインタビューここから「演歌歌手　三山ひろし」を含め、放送番組一般について活発に意見の交換を行った後、２月の番組編成、放送番組モニター報告および視聴者意向についてそれぞれ説明があり、会議を終了した。

（出席委員）

副委員長	松島　裕彦	（四国旅客鉄道監査役）
委　　員	神田　優	（ＮＰＯ法人黒潮実感センター センター長）
	黒笹　慈幾	（南国生活技術研究所代表）
	柴田　智恵	（有限会社大豊陸送代表取締役社長）
	田坂　實	（愛媛県農業協同組合中央会会長）
	床桜　英二	（徳島文理大学総合政策学部教授）
	土佐　礼子	（三井住友海上火災保険 陸上競技部 プレーイングアドバイザー）
	長井　基裕	（愛媛新聞社執行役員編集局長）
	滑川　里香	（一般社団法人マチのコトバ徳島 代表理事）
	真弓　絵里子	（高松紺屋町クリニック健診センター センター長）

（主な発言）

＜ インタビューここから「演歌歌手　三山ひろし」（高知）
（総合　１２月２３日(土)）について＞

○　「演歌歌手三山ひろし」誕生の軌跡がしっかり描かれていた。三山さんの誠実な人柄や、プロの歌手として成功するまでの挫折や努力がよくまとまっていた。祖母の清子さんの存在、詩吟との出会い、青山のライブレストランでの下積み生活、どの一つが欠けても今の三山さんは存在しないと感じた。三山さんが紅白に初出場したときの清子さんのインタビューからは、万感の思いが伝わってきた。過去に出場した「のど自慢」の映像が紹介されたのがとてもよかった。初出場で挫折したものの、その後詩吟と出会い、地元の海で地道に練習を重ねたことが、６年後ののど自慢チャンピオンにつながったと思う。才能よりも努力で夢をつかんだことが伝わってきて、勇気を

もらった。歌手として売れる売れないは紙一重で、曲や人との出会いも大きな要素だろう。その部分をもっと紹介してほしかった。２５歳で上京したきっかけや、デビューしてから紅白に出場するまでの活動も知りたかった。

○　インタビュー場所は三山さんが修行時代に通ったという海岸で、この場所が「ここから」であるという構成になっていた。しかし、一度諦めた演歌歌手を再び目指すに当たっては清子さんが果たした役割のほうが圧倒的に大きい。三山さんの「ここから」は海岸ではなく清子さんであると感じた。２度の「のど自慢」出場映像からは、三山さんの心の動きがよく伝わってきた。この映像があることで、三山さんの人生の選択が説得力を持って伝わってきた思う。一方で、下積み時代の苦労感はあまり感じられなかった。三山さんが修行時代のことも明るく語っていたためだが、それが逆に見終わったあとの心地よい余韻につながったと思う。つまり、苦労を苦労と感じさせない三山さんの明るい性格の向こうに、三山さんを育てた清子さんたちの立派な教育が透けて見えてきたからだと思う。

○　三山さんは飾らない人柄と伸びやかな歌声で地元高知でも人気がある。演歌歌手を夢見て１７歳でのど自慢に出場するも挫折。清子さんが挫折した三山さんの心情を考えながら詩吟に誘い、夢を後押ししたことがよく伝わってきた。南国市の海岸で練習を繰り返したことが今の歌声につながっていることは初めて知った。成長した三山さんを、再度「のど自慢」に申し込んだ清子さんの英断は感心した。紅白に初出場したとき、清子さんの声援を受けて感極まる場面ははではもらい泣きしてしまった。番組を通じ、改めて三山ひろしという歌手に思いを寄せることができた。人生模様を紹介することで、その人の新たな一面を知ることができ、親近感が湧く。三山さんの人となりと人生の浮き沈みを知り、それは正に演歌の世界で、感情移入できた。今後も多くの人を紹介してほしい。

○　私自身は演歌の世界とは縁遠いが、興味深い番組だった。２３分という限られた時間の中で、人生の転換点に焦点を当て、「ここから」を映像化するのは難しいことで、評価したい。三山さんの「ここから」はふるさとの海。挫折した最初の「のど自慢」から、雪辱を果たした２度目の「のど自慢」までの間にふるさとの海と向き合った時間が鍵を握っていた。それならば、上京後の青山での物語は歌手として成長するために大切な場所、時間ではあるが、「ここから」ではなかったと思う。青山のストーリーを割愛し、どういう思いで海と向き合ったのかや、清子さんが三山さんをどう見守っていたのかなどを、もっと丁寧に映像化したほうがよかった。それを通じて「歌詞を理解することが大切」という三山さんのことばを引き出し、演歌の神髄に近づく扉が実はふるさとの海であったことを伝えれば、より感動的な番組になったと思う。

○　三山さんはここ数年紅白に出場されている演歌歌手という程度の知識で番組を視聴した。この番組は、三山さんのファンだけではなく、三山さんについてあまり知らない視聴者も見ている。番組冒頭で三山さんについてもう少し詳しく紹介してもらえると、番組が理解しやすかったと思う。三山さんの経験や、清子さんと二人三脚で夢を追う様子には考えさせられた。１７歳のとき、「のど自慢」で挫折した三山さん。一度は夢を諦めながらも、清子さんが詩吟教室へ誘導するなど三山さんを全力で後押ししたことが伝わってきた。一方で、今の清子さんの声も聞かせてほしかった。当時の三山さんをどういった気持ちで見ていたのかなど、清子さんの率直な思いを聞きたかった。インタビューしていた海岸はとても寒そうで気になってしまった。服装も地味だったため、室内で話を聞いてもよかったと思う。

（ＮＨＫ側）

高知の情報を全国に発信することで、高知に少しでも活力を与えられればという思いで番組を制作した。放送日が「紅白歌合戦」の前だったため、出場する三山さんが高知出身の演歌歌手だと知ってほしいという思いもあった。番組のポイントは「のど自慢」に２回出場した映像と、「紅白歌合戦」での清子さんの映像だ。ただ、そのシーンを強調しすぎると感動を押しつけるような番組になってしまうため、なるべく抑揚をつけないように伝えることを心がけた。

（ＮＨＫ側）

高知出身で勢いがある人を全国に発信したいという思いと、三山さんが支持を得ている背景を伝えたいという思いから番組を企画した。番組で見ていただきたかったのは、のど自慢で合格の鐘が鳴った直後、三山さんが思わず「マジで」と言ってしまったシーン。愚直な努力は裏切らないことを伝えたかった。場所ではなく清子さんの役割が大きかったというのはご指摘通り。三山さんのインタビューを何度も見返す中で、清子さんの役割にもっと焦点を当てるべきだと考え、こういった構成にしたが、時間の関係からカットしたシーンもあり、結果的に疑問が残る構成となってしまった所は反省点だ。

○　オープニングはこれぞ三山さんという映像でよかった。限られた時間の中で三山さんの経歴がよくまとめられており、人となりがうまく引き出されていた。歌番組での着物姿とは違い、三山さんの新たな一面が見られてよかった。「ここから」である

高知の海でのインタビューもよく、映像もすばらしかった。三山さんが海に向かって歌うシーンは、海に通って練習していた頃の苦悩や葛藤が想像できた。インタビュアーの千野秀和アナウンサーはとても聞き上手で、三山さんの魅力をうまく引き出しており好感を持った。２回目の「のど自慢」でチャンピオンになったあと、どのようにデビューに至ったのかをもっと詳しく知りたかった。清子さんが２度目の「のど自慢」に応募し、三山さんのチャンスを引き寄せたエピソードは感動した。背中を押してくれる周囲の存在への感謝を再認識させてくれる番組だった。

○　三山さんが高知出身であることや、どういった経験を経て演歌の道に進んだのかを初めて知った。高校時代に初出場した「のど自慢」で挫折を味わい、一度は諦めた夢をかなえるために困難を乗り越えた過程がよく理解できた。支えてくれた人に成長した姿を見せることが大きなパワーを持つことは、「紅白歌合戦」に初出場したときの清子さんの表情が物語っていた。高知の海に向き合って歌う姿から、くすぶっていた時代を乗り越えた先に光があることや、その時代があるからこそ気持ちが籠もった歌になっていることが伝わってきた。番組の初めに青山での下積み時代の話があり、その後高知で人生を振り返る流れだったが、人生で欠かせないスタート地点を訪ねるという趣旨を鑑みると、時系列で紹介したほうが分かりやすかったと思う。清子さんにも、現在の心境や三山さんの幼少期の話を聞いてほしかった。

○　三山さんが「のど自慢」のチャンピオンだということは知っていたが、実は１７歳のときにも出場しており、そこで挫折を味わっていたことを初めて知った。当時の三山さんは少し歌がうまい程度で、今の三山さんの表現力や歌唱力には遠く及ばず、努力で現在のレベルまで芸を磨いてきたことがよく伝わってきた。清子さんは詩吟をきっかけにして、演歌をやめると決めた三山さんを歌の道へ引き戻したという。高知の海岸で必死に練習したことなど、並外れた努力が今の三山さんにつながっていることが伝わってきた。ふるさとの海や周囲の人たち、そして歌の力によって支えられてきたと強く語る三山さん。今後の活躍を期待している。

○　三山さんが挫折を乗り越え、歌手として成功するまでの半生は感動的だった。「のど自慢」や「紅白歌合戦」の映像を紹介したタイミングも構成にマッチしており好感を持った。すがすがしい余韻が残る番組になっていた。青山にあるライブレストランで下積みしたというが、２３分という限られた時間の番組で必要な要素だったのか疑問だった。家族に支えられた高知時代をもっと深掘りしたほうがよかったと思う。清子さんは三山さんが子どものころから演歌を教え、最初の「のど自慢」で挫折したあとも詩吟に誘い、２度目の出場に導くなど、要所要所で背中を押してきた。なぜそこまで強い思いを抱き続けたのか、清子さんに話を聞いてほしかった。ふるさとの海の

存在の大きさは、しっかり描かれていたと思う。番組タイトルの色使いや出演者の服装が地味で、高知の海も鉛色だったため、画面のトーンが暗かったのが気になった。

○　三山さんの人となりが分かるという意味ではいい番組だった。ただ、三山さんが１人で多くを語る構成になっており、インタビュアーの影が薄くなってしまっていた。三山さんの話を引き出したり、切り込んでいくという場面が少なかった。ナレーションのみかテロップで番組を進めたほうが、三山さんをより深く紹介できたと思う。気付けば３時間も海に向かって練習していたエピソードなど、内容は見応えがあっただけにもったいなく感じた。三山さんと清子さんの関わりの紹介は、２度目の「のど自慢」出場の経緯などが番組内で効果的に散りばめられておりよかった。初出場と２回目の「のど自慢」での歌唱力の差からも、三山さんの努力と清子さんの温かさを感じた。

（ＮＨＫ側）

三山さんに関するエピソードは、高知では紹介され尽くしている感があった。そこで今回、新しい話題を探して取材する中で、夜に１人で海に行き練習をしていたというエピソードを知り、その海を「ここから」に選んだ。出演者の衣装についてだが、収録日がとても寒い日であったため、防寒対策であのような衣装になってしまった。アナウンサーの印象が薄くなってしまったのはそのとおりで、反省点だと思う。三山さんは若手演歌歌手の中で歌唱力は随一だが、その三山さんの口から「歌はメロディーとか音程ではなく世界観を伝えることが大事」と聞けたことに驚いた。伝えたい情報をしっかり伝える難しさを今回の番組制作で改めて勉強させてもらった。

＜放送番組一般について＞

○　１２月２２日(金)の新日本風土記「丸亀」を視聴した。初めて知ったこともことも多かったし、どじょう汁の紹介など地元のよさも再認識できた。丸亀市全体の映像は圧巻ですばらしく、貴重なものを見せてもらった。カメラワークも工夫されておりいい番組だった。

○　１２月２５日(月)のプロフェッショナル　仕事の流儀「野球の神様に、愛されるほどに　プロ野球スカウト・苑田聡彦」を視聴した。広島の名物スカウト苑田聡彦さんに半年にわたって密着して人物像に迫っており、非常に見応えがあった。キーワードを軸に編集され、視聴者を引き付ける構成だった。数多くの名選手を発掘してきた苑

田さんの視点には驚かされ、ここまで話を引き出したことに感心した。苑田さんは現場で選手を見ることにこだわっており、信念がひしひしと伝わってきた。苑田さんのことばは胸に響いた。

○　１２月２６日(日)の梅沢富美男と東野幸治のまんぷく農家メシ！「秋の総集編」を視聴した。地域で受け継がれる伝統料理やオリジナルレシピが紹介されるため、毎回楽しみにしている。１０月から１２月までのエピソードを振り返るという内容だったが、どの話題もおもしろかった。

また、1月４日(木)の人名探究バラエティー　日本人のおなまえっ！「幸福・出世・金持【めでたい名字】」も視聴した。「出世」さん、などのおめでたい名字について紹介されていた。特に、「鯛」さんの紹介では、鯛がおめでたいのは日本だけとのことで、長いときを経ておめでたい魚になったという歴史がおもしろかった。１月１１日(木)の「西郷どん　スペシャル」の回では、鹿児島県での名字の由来について初めて知る内容が多かった。勉強になるいい番組だと思う。

○　１２月３１日(日)の第６８回ＮＨＫ紅白歌合戦「夢を歌おう」を視聴した。毎年楽しみにしており、今年も楽しく視聴した。一曲一曲をじっくり聞きくためには出場組数が多いと感じる。司会者は進行を気にするあまり目線が定まっておらず、気になった。

また、１月１日(月)に再放送された「皇室“奇跡の秘宝”　日本美の最高峰をもとめて」(総合 前 4:30～5:00)も視聴した。昭和天皇のご成婚に際して献上された「御飾棚」と「御屏風」について、職人たちの熱意が伝わってきてよかった。

また、1月１２日(金)に放送されたシリーズ　瀬戸内宝石箱「うみの色　しまの色」(総合 後 7:30～7:59 四国ブロック)も視聴した。瀬戸内のさまざまな地域を映像とナレーションだけでとても鮮明に伝えておりよかった。今後のシリーズも楽しみにしている。これらの番組のほか、年末年始で数多くの番組を楽しませてもらった。

○　１２月３１日(日)の第６８回ＮＨＫ紅白歌合戦「夢を歌おう」を視聴した。ライフスタイルの変化から、家族全員でお茶の間で「紅白」を見るということはなくなったものの、毎年楽しみにしている。特に、安室奈美恵さんと桑田佳祐さんの歌唱シーンは食い入るように視聴した。

また、1月５日(金)の四国羅針盤「めざせ日本一！～知られざるふるさとの底力～」も視聴した。四国各県のさまざまな日本一を紹介するということで、楽しみにしていた。高知のブランド米の話題と愛媛の農業用モノレールの紹介は興味深かった。一方で、徳島の「イクメン」の話題は残念だった。この話題で女性の社会進出を後押しするとか、少子化を改善させるという意味合いもあるのだろうが、あえて「イクメン」

を紹介したところに違和感を覚えた。徳島で頑張っている職人や地域活性化に取り組む人たちの話題を期待していただけに拍子抜けだった。香川県の話題が全く紹介されなかったのも残念だった。地域の番組が地域活性化につながっていることをもっと意識して番組を制作してほしい。

○　１月５日(金)の四国羅針盤「めざせ日本一！～知られざるふるさとの底力～」を視聴した。徳島県が男性の育児参加に取り組んでいるとのことで、新たな知識を得ることができた。一方で、疑問点も残ったため、背景についてもう少し丁寧に説明してほしかった。今の学生たちはテレビをほとんど見ていない。テレビの力は大きいが、若い世代がそれを認識していないこともある。テレビ離れが進んでいるため、学生たちと一緒に作る番組を企画するとよいと思う。「四国羅針盤」でも、若者や学生を巻き込むような取り組みを期待したい。

○　１月５日(金)の四国羅針盤「めざせ日本一！～知られざるふるさとの底力～」を視聴した。番組冒頭で視聴者の興味をそそるナレーションが続き、期待が高まった。「知られざる日本一」とは何かというところに好奇心を刺激され、企画のねらいはよかったと思う。しかし、タイトルにふさわしい内容だったかというと、やや羊頭く肉だと感じた。新春のおめでたい番組にするために、無理やりタイトルに「日本一」と付けたとしか思えなかった。番組のタイトルワークについてだが、もう少し誠実に、かつ知恵を絞ってほしいと思う。どういった内容の番組で、何をどう伝えたいのかということを、的確な言葉に表して情報化し、視聴者に誠意を持って伝えるべきだろう。番組のタイトルはどういったプロセスで決まっていくのかを教えてほしい。四国を元気にする番組のはずが、香川県の日本一が紹介されなかったのも残念だった。

○　１月７日(日)のにっぽん紀行「“二十四の瞳”大石先生に憧れて～小豆島・岬の分教場～」(総合　後 6:05～6:38)を視聴した。小学校の先生である竹林霞さんの人柄やプロフィールが詳しく紹介されており、生徒たち１人１人の性格をノートにまとめるシーンもよかった。竹林先生のプライベートのような映像も紹介されており、楽しませてもらった。

○　１月７日(日)のにっぽん紀行「“二十四の瞳”大石先生に憧れて～小豆島・岬の分教場～」を視聴した。１２月に四国で放送された「ドキュメントしこく」の再編集だったが、構成が異なっていて番組から受ける印象が違っており興味深かった。小学校教師の竹林さんと大石祐梨香さんの２人がバランスよく紹介されており、全国放送にするために手堅い仕上がりになっていたと思う。

○　１月１４日(日)の「第３６回全国都道府県対抗女子駅伝」(総合 後0:15～3:12)を視聴した。区間ごとに詳しいデータが紹介され、とても見やすく工夫されていた。各県のユニフォームや、開会式の様子も紹介されておりよかった。自県のチームが紹介されると地元の人たちはうれしく、引き続き見たいという気持ちになる。選手の様子もよく分かり、見入ってしまった。

　また、１月１２日(金)のあさイチ「プレミアムトーク　小澤征爾」も視聴した。小澤さんのトークは素の部分を知ることができ、とても楽しかった。また、小澤さんの活動紹介は感心しながら拝見した。

○　１月１４日(日)のＮＨＫスペシャル　シリーズ　人体　神秘の巨大ネットワーク第４集「万病撃退！“腸”が免疫の鍵だった」を視聴した。腸がテーマとなっており、最先端の電子顕微鏡の映像やＣＧが駆使されていた。腸が全身の免疫をつかさどっているという最新の研究を紹介しており、興味深かった。伝え方も大変分かりやすく、ＮＨＫらしい番組でよかった。腸内の非常に細かい映像には驚かされた。ＮＨＫオンデマンドは放送された番組を見ることができるため、活用している。

ＮＨＫ松山放送局
番組審議会事務局

平成２９年１２月ＮＨＫ四国地方放送番組審議会

１２月のＮＨＫ四国地方放送番組審議会は、１８日（月）、ＮＨＫ松山放送局において、９人の委員が出席して開かれた。

会議では、まず事前に視聴してもらったドキュメントしこく「大石先生に憧れて～小豆島・岬の分教場～」を含め、放送番組一般について活発に意見の交換を行った後、１月の番組編成、放送番組モニター報告および視聴者意向についてそれぞれ説明があり、会議を終了した。

（出席委員）

委 員 長	髙橋　祐二	（三浦工業代表取締役会長）
副委員長	松島　裕彦	（四国旅客鉄道監査役）
委　　員	神田　優	（ＮＰＯ法人黒潮実感センター センター長）
	黒笹　慈幾	（南国生活技術研究所代表）
	佐伯　美香	（松山東雲女子大学・短期大学バレー部コーチ）
	柴田　智恵	（有限会社大豊陸送代表取締役社長）
	長井　基裕	（愛媛新聞社執行役員編集局長）
	滑川　里香	（一般社団法人マチのコトバ徳島 代表理事）
	村田　明広	（徳島大学大学院社会産業理工学研究部教授）

（主な発言）

＜ ドキュメントしこく「大石先生に憧れて～小豆島・岬の分教場～」（高松）
（総合 １２月８日（金））について＞

○　映画「二十四の瞳」の時代から大きく変わって殺伐としているものの、どこか牧歌的な香川の教育現場に引き込まれた。竹林霞先生と大石祐梨香先生のコメントから、２人が思う理想の先生像が「二十四の瞳」の「大石先生」なのだと伝わってきた。竹林先生と子どもたちの日常や、そこで得る小さな達成感がよく描かれていた。友達と素直なコミュニケーションがとれないそういち君と必死に向き合い、熱いことばを投げかけるシーンは思わず涙した。竹林先生はそういち君との関わりで手応えを得ていたが、大石先生が生徒との交流の中で達成感を得る場面もほしかった。この番組を見て教師を志す学生もいると思うので、２人が教師になるまでの簡単な経歴も紹介してほしかった。岬の分教場のノートから始まり、ノートで終わった構成は美しかった。

○　低学年を受け持つ竹林先生と高学年を受け持つ大石先生がそれぞれの立場で「二十四の瞳」の「大石先生」を目標にしながら、理想と現実のギャップに悩み葛藤する様子がよく描かれていた。教師の多忙が社会問題となっているため、その日常に密着し、現実を伝えることは意義がある。大石先生の紹介は教師の多忙が全面に出ており、この状況下では理想とする教師像を実現できないという現実がよく分かったが、やや中途半端だった。分教場のノートに「定年まであと５年」と記していたベテランの先生について番組で紹介があると、若い先生との対比ができてよかったと思う。５年後や１０年後に、この２人の先生の成長ぶりを紹介してほしい。

○　「二十四の瞳」の「大石先生」に憧れて小学校の先生になった女性教師２人が、理想と現実のギャップに苦悩しながら日々奮闘する様がよく描かれていた。教師を目指す学生が、岬の分教場を訪れることが多いということを初めて知った。竹林先生が受け持つクラスの子どもたちの表情がとてもよく、竹林先生の心の動きもしっかり伝わってきた。生徒の男の子が「竹林先生は優しいが９％だったら、怖いは１５％」という表現をしており、子どもならではの感性がよかった。大石先生のコメントは、教育現場の多忙さと理想の教育ができないという本心を表したものだが、子どもたちの親はこの発言で不安を覚えたと思う。竹林先生について、分教場で偶然出会って取材が始まったのだろうか。また、大石先生について、「大石」という名字だから取材したのだろうか。

○　私自身も小さな小学校に子どもを通わせていた経験があり、保護者の目線で番組を見たが、感動で号泣してしまった。分教場の紹介は適度に簡潔で、２人の若い女性教師に焦点を絞ったこともシンプルで見やすかった。竹林先生の葛藤と熱い思いには共感したし、大石先生の「子供たちに向き合いたくても向き合えない」という悩みも分かりやすく描かれていた。竹林先生について、教師になりたての４月時点から現在の姿までがしっかり取材されており、引き込まれた。熱い指導や、生徒の字が乱れていることに気づいてメッセージを書く場面は胸を打たれた。そういち君に熱い思いを伝え、それによってそういち君がクラスメートに謝るシーンは、涙なしでは見られなかった。一方、大石先生が勤務する小学校の様子は、厳しい現実を見せられショックだった。現代の教育現場は生徒たちと向き合うことが全くできておらず、時代の変化にも対応できていないと感じた。

○　理想と現実の厳しさに立ち向かう２人の教師の奮闘を、原点に戻れる分教場という場所があることのすばらしさを感じながら視聴した。低学年を担当する竹林先生を半年以上取材していたが、どれくらいの期間で番組を制作したのだろうか。低学年の自由な子どもたちに振り回されながらも、一生懸命向き合い奮闘する竹林先生の姿か

ら、教師の大変さが伝わってきた。そういち君に熱意をもって本気でぶつかり、それによってそういち君が変わっていく姿は感動した。業務に追われて子供たちとじっくり向き合えずに苦悩する大石先生の姿からは、教育現場の現状が伝わってきた。理想と現実が違う状況に悩みながらも、心に理想の教師像を描きながら奮闘する２人の姿には勇気や感動をもらった。

（ＮＨＫ側）

今回の番組は教育がテーマ。先生は私たちにとって身近な存在である一方、教育現場が多忙だということも社会問題になっている。こうした世の中の課題を描くといった側面も含め､番組を制作した。竹林先生がそういち君に心を込めたことばを投げかけるシーンは、先生が子どもたちのことを真剣に考えていることが伝わる場面。その裏には頑張っている先生が困難な状況に立たされているという問題があることを透けて見せられると、もっと深みのあるシーンになったと思う。番組は掘り下げが足りない部分もあったが、心に響くシーンもところどころ見せられたと思う。

（ＮＨＫ側）

教育現場の先生たちが置かれている現状は厳しいものがある。こうした状況の中、現代の先生たちの大変さや苦しさを描きたいという思いから番組を制作した。今年、原作者の壺井栄さんが没後５０年であったことがきっかけで、「二十四の瞳」に関連したこの番組を企画した。大石先生は、「大石」という名前だから取り上げたわけではなく､分教場のノートを取材している中での偶然の出会いだった。竹林先生は今年の４月から少し撮影をしていた。取材を進める中で、竹林先生が目指す理想の教育と「二十四の瞳」の「大石先生」が体現していたものに共通点があると感じ、番組のタイトルとした。

○　現代の小学校教師はさまざまな業務に追われて非常に忙しく、現場の先生たちは子どもたちと関わる時間が取れないという。竹林先生と大石先生も、理想と現実のギャップに苦しみながら、仕事に追われる日常が紹介されていた。竹林先生は子どもたちとの関わり方がまだ未熟である一方、字の乱れなどのささいな変化に気づける豊かな感性が強みだと感じた。そういち君との関わりでは、距離の取り方に危うさを感じたが、一生懸命向き合ったことで結果的に奏功したことは忘れられない経験になっただろう。大石先生は教師になったときの理想と現実がほど遠く、子どもたちと関わる時間が持てていなかった。「みんなと一緒に遊びたいけどごめんね」と生徒に伝える

場面や、けなげな笑顔には切なさを感じた。竹林先生に比べて大石先生の紹介がかなり短かったため、竹林先生だけを取り上げ、内容をもう少し深掘りしてもよかったと思う。

○　「大石先生」に憧れて教職に就いた２人の若い女性教師の姿を追った番組。竹林先生と大石先生の２人が登場するが、大石先生のパートが短かったので、竹林先生だけをじっくり追いかけて紹介したほうがよかったと思う。竹林先生がそういち君とやりとりするシーンは番組のポイントだったが、放送時間の関係か窮屈に押し込められた印象だった。竹林先生が教師になったばかりの春には「新米教師」、そして７か月後には「小学校教師」と、分教場のノートに記したシーンはこの間の成長を感じさせる場面だった。クラスの男の子が竹林先生について、「優しいが９％で怖いは１５％」と言っていたが、とても子どもらしい表現で思わず笑ってしまった。

○　２人の女性教師の本音を引き出しており、リアルな教師の姿を浮かび上がらせていた。教育現場の環境は５０年前とは大きく異なっているため、「二十四の瞳」の「大石先生」を理想の教師像としたことは疑問だった。教育理念は現代でも通用するかもしれないが、それを実現する方法は当時と異なるはずで、そこを深掘りすべきだった。「理想と現実にギャップがある」といったコメントをただ流すのではなく、その苦悩の背景に焦点をあてるべきだった。竹林先生の、「一人一人が自分らしく輝ける場を作りたい」という理想を目指すための支えは「二十四の瞳」だけではないはずで、「大石先生」に偏った番組となっていた。竹林先生のそういち君と向き合い方は迫力があり、強い信念が伝わってきた。大石先生が「現実は甘くない」と発言しており、現代の教育現場が理想を実現することが困難な状況であることも理解できた。教師の労務負担について、今後も取り上げてほしい。

○　２人の女性教師の奮闘ぶりを紹介していたが、現代の教師像を知るうえでとても興味深かった。子どもたち一人一人と向き合いたいがその時間がないという実情に迫り、問題提起していたと思う。竹林先生が岬の分教場で不安や緊張をノートにつづってからの７か月間、悩みながらも成長した姿に共感した。そういち君と真剣に向き合い、その結果そういち君が泣きながらみんなに謝り、その勇気を褒める場面は感動した。７か月後、ノートに「新米教師」ではなく「小学校教師」と書いたところに竹林先生の自信を感じた。大石先生は仕事に追われて理想と現実がかい離する現状に悩んでおり、現実は甘くないという本音を語っていた。子どもと向き合う時間は昔と今では大きく異なっている。成熟した日本社会で、子どもたちに合う教育改革が必要だと感じた。分教場のノートに「定年まであと５年、今でも教育の原点は二十四の瞳」と書いていたベテラン教師に、昔と今の教育現場の違いや課題を聞いてほしかった。

（ＮＨＫ側）

２８分という限られた放送時間の中で、盛り込めなかった内容も数多くあった。学校の教師があまりに多忙であるというのは香川県だけの問題ではない。ＮＨＫとして、今後もこの問題を取り上げていきたいと思う。

（ＮＨＫ側）

現代の教師たちがここまで厳しい状況に追い込まれているということを、番組を作って改めて認識した。学校の教師たちがより働きやすい環境を整えることは重要で、そういったテーマも今後取り上げたい。

＜放送番組一般について＞

○　１０月１２日(木)の「こうちいちばん」（総合 後 6:10～6:58.55 高知県域)を視聴した。「二段階移住」という高知市の新しい移住促進策を取り上げていた。第一段階で移住を希望する人にまず高知市に住んでもらい、第二段階で高知県内の他の市町村に住んでもらうという試みだが、この政策は地方移住促進の決定打になると思う。「ＮＨＫニュース　おはよう日本」でもこの話題が取り上げられており、全国的に関心を引いたということも評価したい。

○　１１月１４日(火)のアナザーストーリーズ　運命の分岐点「オードリーとローマの休日～秘めた野心　貫いた思い～」(ＢＳプレミアム 後 9:00～9:59)を視聴した。1952年に撮影された映画について、オードリー・ヘップバーンの当時の逸話が数多く紹介され、盛りだくさんの内容だった。オードリーのオーディション時のインタビュー映像を盛り込めると、よりよかったと思う。映画について知らなかったことがたくさん紹介されており、興味深かった。今後もこういった番組を作ってほしい。

○　１１月２３日(木)のモーガン・フリーマン　時空を超えて・選「海は思考するのか？」を視聴した。これまで人類は人間以外の知的生命体を宇宙に探し求めてきたが、地球上に存在する広大な海が生命体として意思を持つという可能性を探る番組で、非常に興味深かった。さまざまな論理から海そのものを巨大な生命体と考える生物学者もいるとのことで、考えさせられる内容だった。

また、１２月１１日(月)の「南極大潜航　幻の巨大イカと氷の楽園」（ＢＳプレミアム 後 8:00～8:59)も視聴した。ダイオウホオズキイカという地球で最も重い深海の

イカを取り上げており、最新の潜水艇で撮影した映像がすばらしかった。圧倒的な映像や技術力など、ＮＨＫならではの番組で感動的だった。今後もこういった番組を期待している。

○　１２月１４日(木)の「ひめポン！」(総合 後 6:10～6:59.55 愛媛県域)を視聴した。写真家の松本紀生さんのインタビューコーナーでは松本さんが撮影した写真や映像を紹介していたが、どれもアーティスティクで迫力があり、すばらしかった。
　また、１２月１８日(月)のひるブラ「誰でも楽しめる！常識破りの美術館～徳島県・鳴門市～」も視聴した。展示されている陶板複製の絵や、美術館の特徴が丁寧に紹介されておりよかった。「ひるブラ」は身近な話題が多く、いつも楽しく見ている。

○　１２月１５日(金)のドキュメントしこく「ふたりで見つける幸せ～高知　四万十町～」を視聴した。神奈川県から四万十町に移住した菊池祐さん未来さん夫婦のドキュメントだった。祐さんが厳しい鍛冶職人の師匠のもとで毎日修行するが思うようにいかず、悩む姿が描かれていた。夢を応援しながら祐さんを支え、地域の人たちに溶け込む未来さんの強さがよく伝わってきた。思うように技術を習得できず、「四万十を離れることを考えだしていた」というナレーションのシーンは、気付くと感情移入していた。ふだんは厳しい師匠の心の温かさや懐の深さもしっかり伝わってきた。祐さんが作った「なた」を地元の人が買ってくれ、師匠が褒めるシーンは感動した。未来さんの支えと、地元の人たちの期待から祐さんが前を向く場面は勇気をもらった。祐さんがなぜ鍛冶職人という道を選んだのかもう少し詳しく知りたかった。祐さんの心の動きがよく映像に出ており、感動的ですばらしい番組だった。

○　ドキュメントしこく「ふたりで見つける幸せ～高知　四万十町～」を視聴した。菊池さん夫婦は神奈川県での安定した生活を捨て、四万十町に移住した。祐さんはそこで鍛冶職人の見習いになったということだが、四万十町という場所や鍛冶職人という職業を選んだ理由をもっと詳しく知りたかった。妻の未来さんが新しい仕事に取り組みながらも夫を支える様子はすばらしく、いい番組だった。

○　ドキュメントしこく「ふたりで見つける幸せ～高知　四万十町～」を視聴した。祐さんが鍛冶職人の弟子として修行する場面は、その過酷さが伝わってきた。未来さんはけなげですばらしく、懐の深さが伝わってきた。地域おこし協力隊という制度を地元の人たちが冷ややかに見ているということだが、移住して３年経過したら都会に帰ってしまう人がある程度いるのだと思う。そういった事例もあれば教えてほしかった。

○　１２月１６日(土)の北海道スペシャル「拓銀破綻から２０年～あれから、私たちは

～」(総合 後 3:05～3:49)を視聴した。丁寧に作られた番組で、興味深かった。北海道拓殖銀行の破綻が地域に与えた影響などがしっかり取材されており、当時の映像も交えられていて迫力があった。美深町の雇用を支えてきた木材会社も連鎖倒産したとのことだが、倒産の責任が拓銀だけにあったのだろうか。経営陣が会社の行く末をどう考えていたのかを知りたかった。元拓銀の方が別な銀行の頭取を務めていたが、どのような経緯で就任したのかを説明すべきだったと思う。

○　私自身、北海道出身ということもあって拓銀の破綻という大変な事態が身近で起こったことを思い出した。このような番組が放送されたことを知らなかった。最近は、新聞のテレビ欄を見なくなった。再放送やオンデマンドで見られる仕組みを充実してほしい。ＮＨＫのドキュメンタリーは秀逸だと感じているので、魂の籠もったドキュメンタリーを制作してほしい。

ＮＨＫ松山放送局
番組審議会事務局

平成２９年１１月ＮＨＫ四国地方放送番組審議会

１１月のＮＨＫ四国地方放送番組審議会は、２０日（月）、ＮＨＫ松山放送局において、９人の委員が出席して開かれた。

会議では、まず事前に視聴してもらった「ここは“世界の吉野川” ～日本初のラフティング世界選手権～」を含め、放送番組一般について活発に意見の交換を行った後、１２月の番組編成、放送番組モニター報告および視聴者意向についてそれぞれ説明があり、会議を終了した。

（出席委員）

委 員 長	髙橋　祐二	（三浦工業代表取締役会長）
副委員長	松島　裕彦	（四国旅客鉄道監査役）
委　　員	神田　優	（ＮＰＯ法人黒潮実感センター センター長）
	黒笹　慈幾	（南国生活技術研究所代表）
	柴田　智恵	（有限会社大豊陸送代表取締役社長）
	田坂　實	（愛媛県農業協同組合中央会会長）
	長井　基裕	（愛媛新聞社執行役員編集局長）
	滑川　里香	（一般社団法人マチのコトバ徳島 代表理事）
	村田　明広	（徳島大学大学院社会産業理工学研究部教授）

（主な発言）

＜ ここは“世界の吉野川”～日本初のラフティング世界選手権～（徳島）
（総合 １１月３日（金））について＞

○　ラフティング世界選手権の運営に関わった住民や、三好市に移住し日本代表として大会に出場した選手を通して、豊かな自然の再認識や今後の地域の在り方に焦点を当てた、示唆に富む番組であった。世界選手権開催のためには乗り越えた多くの課題があったはずで、それらを示してほしかった。言葉や習慣が全く異なる外国人選手への対応は苦労があったと思うので、受け入れる側でどういった議論があり、行政がどう関わったのかも知りたかった。世界選手権の誘致に尽力した西村洋子さんの熱意はすばらしく、地域活性化のためにふるさとへの思いをどう持ち続けるかについて考えさせられた。女子の日本代表チーム「ＴＨＥ ＲＩＶＥＲ ＦＡＣＥ」の選手たちが仕事と競技を両立し続けるためには、地域や職場の理解が必要だと感じた。また、選手

の生き方に心を動かされた住民もおり、人は人によって生かされるという気付きを与えてくれた。日本代表の男子チームの結果はどうだったのであろうか。

○　世界選手権開催を呼びかけた西村さんを中心に、関わった人たちの高い意識が大会の成功につながったことがよく伝わってきた。企画から運営まで地元住民による大会ということで、どのように資金やスタッフを集めたのかをもう少し詳しく伝えてほしかった。ＴＨＥ　ＲＩＶＥＲ　ＦＡＣＥが、優勝を懸けた最後のレースで接戦を制したシーンは感動的だった。週６日、早朝練習をしているという紹介があったが、その映像がなくやや拍子抜けだった。また、浅井裕美さん以外のメンバーも紹介してほしかった。多くの借用映像が使われていたが、ＮＨＫの取材だけではカバーできなかったのか。世界選手権が吉野川で開催されたことは地元や関係者にとってとても大きな出来事で、これをきっかけに地域の人たちも吉野川の魅力を再評価したと思う。

○　番組冒頭の９０秒ほどの映像が、番組全体をテンポよく伝えており期待が膨らんだ。単なるダイジェストではなく、商店街のにぎわいや年配の女性の「長生きしててよかった」という素直なコメントなど、冒頭だけで使われたシーンもあり、取材の底力が感じられた。視聴後に満足感と爽快感が残ったのは、地元チームのＴＨＥ　ＲＩＶＥＲ　ＦＡＣＥが優勝したことだけでなく、移住者と地元の人々の深い共感が地域を活性化させるということが、自然に伝わってきたからだ。競技のシーンを中心に借用映像のクレジットがしばしば入っていたのは興ざめで、独自の映像を撮る努力をしてほしかった。スプリントやダウンリバーなど、競技種目やルールの解説ももっとほしかった。また、ＴＨＥ　ＲＩＶＥＲ　ＦＡＣＥのメンバー全員の紹介があれば、視聴者も彼女たちにもっと感情移入できたと思う。

○　ラフティングを通してＩターン者とＵターン者、そして地元住民が打ち解け、一体となって地域づくりをしていくという趣旨の番組で、それぞれの価値観がシナジーをもたらすことがよく理解できた。Ｉターン者が結婚などを契機に次第に地域に根づくことで、過疎や人口減少を身近な問題と考え、地域と関わっていこうとする心情の変化がうまく描かれていた。「お盆でもこんなに人がいることはない」「こんな田舎に外国の人がいっぱいでびっくり、でもうれしい」といったことばからは、この大会が、地元の人たちが地域の良さを認識する契機となったことが伝わってきた。選手を思いやって、急きょみそ汁を作って振る舞うシーンは、地元の人たちのおもてなしの心がよく現れており、これこそが地域の強みだと感じた。他者から認められることによって人や地域は変わる。「ここは世界の吉野川」というタイトルもそれを表現しておりよかった。

○　ラフティング世界選手権を吉野川に誘致して成功に導いた地域住民の奮闘ぶりと、ＴＨＥ　ＲＩＶＥＲ　ＦＡＣＥの活躍を紹介した番組で感動的だった。大会の準備を中心になって進めた西村さんを始めとする地元の方々からは、この大会を地域発展の起爆剤にしたいという気持ちがよく伝わってきた。海外からもたくさんの選手たちが訪れたため、宿泊施設やことばの問題が心配だったが、それぞれの宿が誠意を持って対応し、選手たちの様子を見ながら食事のメニューを考えるなど、その活躍ぶりがよく紹介されていた。運営に関わったスタッフは海外からも来ていると思うが、その紹介が無かったのは気になった。また、過去の世界選手権での日本チームの結果や、男子の競技についても紹介してほしかった。借用映像が散見されたが、当初からその予定だったのか。「とてもきれいな川で最高の時間を過ごせた」「見たことないぐらい水が透明でびっくりした」という海外選手の感想からは吉野川の水のきれいさが伝わってきた。吉野川の魅力を発信する良質な番組だった。

○　ラフティングの迫力や三好市の景観、そして地域の人たちの姿に圧倒され、見入ってしまった。ラフティングのことはあまり知らなかったが、その魅力がしっかり伝わってきた。最も感動したのは、西村さんを中心とした地元の人たちの熱い思いと頑張りで、情熱と行動力に大変驚いた。大会を誘致し成功に導いた西村さんの人間性が見事に表現されていたし、ＴＨＥ　ＲＩＶＥＲ　ＦＡＣＥが優勝したシーンで思わず涙してしまった。世界選手権が徳島県で行われることは知っていたが、一般的にラフティングの認知度は低いため、メディアの役割はとても大きいと思う。テレビ離れが話題になっているがいまも影響は絶大で、地元の情報を得るためにＮＨＫのローカルニュースを視聴している人は非常に多い。こういった大会の盛り上げ役を担うのは地元のメディアだと思うが、そこはあまり出来ていなかったように思う。地元メディアはとても大きな存在なので、地域に密着した番組が増えることを期待している。

○　吉野川で世界選手権が開催され、日本の女子チームが優勝したことは知っていたが、その裏側で地元の人たちがこの大会を企画し、成功に導いていたという熱いドラマがあったことは新しい情報だった。過疎が進む三好市周辺が、年間約４万人が訪れる日本屈指のラフティングスポットであることに驚いた。吉野川に魅せられて三好市へ移住者した人たちの熱い思いが、地元の人たちにうまく伝ぱし、西村さんを中心とした地元の人たちを巻き込んでいったという紹介があった。当たり前にある自然に価値を見い出しておらず、資源を生かすことができないでいたが、外からの評価によってその価値の大きさに気づかされるという現実を見た思いだ。競技を応援する人たちの盛り上がりや、地元応援団の興奮ぶりもよく伝わってきた。大会初日の荒天に、地元スタッフが選手たちに急きょ温かいみそ汁をふるまう様子は、おもてなしの習慣があるこの土地ならではで、再び吉野川に来たいと感じた選手も多かったと思う。この

番組をきっかけに、地元の人たちが地域の良さにもっと気づけるようになることを期待したい。

○　世界選手権という舞台を、小細工せずに記録した好感の持てる感動的な番組であった。地元で頑張る選手たちを応援し、大会運営に尽力する地元の人たちと、都会から移住しラフティングに情熱を傾ける若者や参加者たちとの人間模様が描かれ、引きつけられた。大会の概要やラフティングのルールは音声を中心に説明されていたが、あまり一般的ではない競技だけに、字幕情報も含めて詳しい解説があれば、より視聴しやすくなったと思う。世界選手権の誘致に成功するまでにもさまざまなドラマがあったと思うので、そこについてはもっと知りたかった。また、浅井さん以外の選手たちの生活基盤がどうなっているのかも気になった。閉店して久しい商店のテントが破れて風に揺れているシーンは、この地域の過疎を象徴しているように感じ、印象に残った。

○　ラフティングのだいご味や、吉野川の透明な水と景観の素晴らしさが伝わってきて、ラフティングのファンが増えるような番組だった。ＴＨＥ　ＲＩＶＥＲ　ＦＡＣＥの存在は地元の誇りで、地域の活性化につながっていることが確信できた。選手団のパレードを見た地元のお年寄りが、「長生きして良かった」と喜ぶ姿で始まり、「ここは世界の吉野川」で終わったところに、徳島局の手応えを感じた。世界選手権に関わった人たちのつながりをうまく表現しており、取材力やカメラワークもすばらしかった。また、庭木櫻子アナウンサーのナレーションもよかった。ＴＨＥ　ＲＩＶＥＲ　ＦＡＣＥのメンバーに焦点を当てたのもよく、ＴＨＥ　ＲＩＶＥＲ　ＦＡＣＥが僅差で勝利し総合優勝した瞬間はとても感動したし、女性の力が過疎地域の活性化につながることを教えてくれた。男子の日本代表チームについて一度も触れられていなかったのは残念だった。

（ＮＨＫ側）

番組を担当したのは３年目のディレクターで、初めて４３分の番組にチャレンジした。主人公を誰にするのか、作り方はさまざまあったと思うが、それぞれが大会と深く関わり、思いを持った人たちだったため、この人のことをもっと詳しく知りたかったなど、どこか物足りなさを感じた視聴者もいたかもしれない。限られた４３分という時間のため、競技者のＴＨＥ　ＲＩＶＥＲ　ＦＡＣＥのメンバーではなく、大会を運営する地元の人たちを中心に取り上げたのはよかったと思っている。借用映像の多さは、人とお金が限られてい

る中での制作のため、ご理解いただけたらありがたい。海外の選手がなんとか箸を使いながら魚を残さずきれいに食べるシーンは微笑ましく、大会運営が成功している様子を伝えられたと思う。ＴＨＥ ＲＩＶＥＲ ＦＡＣＥが金メダルに輝くというすばらしい結果で、メンバーは徳島県の県民栄誉賞を受賞した。今回の世界選手権をきっかけに、この地域がどう変わるのか、そして県外からの移住者がさらに増えてくれるのかといった視点で、今後も取り上げていきたい。

（ＮＨＫ側）

ラフティング世界選手権の男子に出場したのは長良川を拠点に活動する実業団チームで、２位になった。ＴＨＥ ＲＩＶＥＲ ＦＡＣＥに注目したのは、三好市の象徴的なチームだったから。大会運営についてだが、最終的には三好市も協力し、主催は三好市と国際ラフティング連盟、主管がラフティング世界選手権実行委員会という形になった。そのため、開催資金も西村さんたちが県内外の企業や団体にスポンサー協力を求めて集めたことに加え、一部市の資金も入っていると聞いている。三好市は国内大会の実績はあったものの、世界選手権という大規模な大会運営は初めてだったため、地域全体で宿泊施設なども含めて協力を求めたようだ。また、言葉の問題は、通訳ボランティアを地元から募るなどして乗り越えたと聞いている。借用映像についてだが、池田ケーブルネットワークはラフティング世界選手権 2017 のオフィシャル映像の撮影を実行委員会から委託されており、また安全の観点から、撮影の難しい映像については池田ケーブルネットワークの映像を使用してほしいという実行委員会からの要請もあり、こういった形となった。ただ、クレジットが入っていない映像はすべてＮＨＫが撮ったもので、借用映像は一部分となっている。

＜放送番組一般について＞

○　１０月２９日(日)のＮＨＫスペシャル　「“血圧サージ”が危ない～命を縮める「血圧の高波」～」(総合 後 9:00～9:59)をタイトルにひかれて視聴した。視聴者参加型生放送ということだったが、その時間に１５万人もが参加しているということで、健康への関心の高さがうかがえた。データ放送と連動し、情報豊富な番組だった。

また、１１月５日(日)のＮＨＫスペシャル　シリーズ　人体　神秘の巨大ネットワ

ーク　第２集「驚きのパワー！“脂肪と筋肉”が命を守る」も視聴した。いわゆる脂と思われていた脂肪が、実は脂肪細胞という一つの新たな臓器であることや、脳に指令まで出すということに大変驚いた。脂肪が増えすぎると免疫細胞が脂肪そのものを敵とみなして攻撃し、それによって人体がむしばまれるという、免疫暴走が起こるということは衝撃的だった。最新の学説なので、必ずしも正しいと言い切れるかは分からないものの参考になったし、とても分かりやすく伝えられており感心した。

○　１１月３日(金)のチコちゃんに叱られる「第二弾」(総合 前8:15～9:00)を視聴した。とてもためになる内容が多く、おもしろかった。チコちゃんの表情が豊かで、ナレーションにも毒があり、変わったテイストの番組で楽しめた。チコちゃんの発言には、ＮＨＫらしからぬ表現もあり驚いたが、質問に対する回答には明快な解説と裏付けがあり、的確さに感心した。チコちゃんと財前直見さんの掛け合いは細かな工夫がなされており、大変おもしろかった。レギュラー化を検討してもおもしろい番組だと思う。

○　１１月３日(金)のにっぽん紀行「いごっそう鍛冶屋とひよっこ弟子～高知　四万十町～」(総合 後7:30～8:00)を視聴した。都会から移住してきた若い弟子と鍛冶職人の師匠の心の交流を描いており、心地よい余韻が残る良質な番組だった。テーマ曲もとてもよく、ついつい見入ってしまった。師匠や弟子がそれぞれ抱える悩みの深さを淡々と描き出し、ようやく打てた一本の包丁を地元の人に買ってもらえたときの弟子と妻、そして師匠の喜びの表情には感動した。本当の幸せとは何であるのかが、３人の登場人物の日常から自然に伝わってきた。

○　１１月７日(火)のグッと！スポーツ「フットサル　日本の怪物ストライカー　森岡薫」を視聴した。フットサルがメインで取り上げられており、嬉しかった。横浜ＦＣの三浦知良選手が、森岡選手に対して言ったことばはぐっと来るものがあり、フットサルがもっとメジャーになればいいと思う。少しマニアックな分野で活躍している人たちを地上波で紹介する機会をもっと増やしてほしいと思うし、地元のローカル番組が地域で頑張っている人たちの応援団になってほしいと思う。

○　１１月１２日(日)の、あの日　あのとき　あの番組「浮世絵ミステリー　写楽の正体に迫る」を視聴した。謎の浮世絵師である東洲斎写楽の正体を追って取材を重ねた質の高い番組だった。希望的観測を排除し、筆遣いなどの得られる手がかりから、納得できる論理で構成していた。３０年以上前の番組にも関わらず全く色あせておらず、興味深く視聴した。

　また、「バラエティー生活笑百科」を毎週楽しみに視聴している。暮らしの中のト

ラブルを取り上げ、笑いを交えながらも適用される法律を分かりやすく説明している。弁護士のワンポイント解説がよい。テーマも身近で、視聴者を引きつけていると思う。

○　１１月１２日(日)のダーウィンが来た！生きもの新伝説「ネコ大特集！（１）男はつらいよ」を視聴した。福岡県相島の 100 匹のネコの集団の中で暮らす、若いオスネコの行動を観察した番組で、そのようすが分かりやすく紹介されていた。野良のオスは争いが過酷なこともあり、５年程度しか生きられないということを初めて知ったが、この５年というのが相島のようなネコの密度が高い場所での研究結果なのか、一般的なデータなのかがよく分からなかった。子を育てているメスを発情させるため、オスによる子殺しがあることも紹介されており、ネコも野生に近い状態に置かれると同じネコ科のライオンのような行動を取るということも知ることができた。

○　１１月１３日(月)の「ＮＨＫニュース　おはよう日本」を視聴した。けさのクローズアップのコーナーで、若者とＳＮＳの関係について実態を取り上げていた。ショッキングな座間の事件は、先進国が抱える大きな問題を提起していると感じる。若者とＳＮＳの関係は深刻な社会問題になっており、政府もさまざまな対策をすると思うが、悩みを持った若者に寄り添える仕組みや相談しやすい窓口がもっと増えるとよいと思うので、このテーマを引き続き報道してほしいと思う。

○　１１月１７日(金)の四国羅針盤「この先どうなる？わたしたちの歯～不足する歯科技工士～」を視聴した。不足する歯科技工士の話であったが、ふだん何気なく歯医者で次回のスケジュールを決めている背景に、こういった事情があることを初めて知って驚いた。診療報酬が３０年前と比較してもあまり変わっておらず、材料費の高騰もあって就業者がどんどん辞めてしまうという現実を伝える、啓もう的要素もある番組で、放送に感謝したい。デジタル化やＩＴ化の流れに伴って歯科技工士が希望を持てるような展開も紹介され、とてもよかった。

○　１１月１９日(日)のＮＨＫスペシャル「ドラマ　龍馬　最後の３０日」(総合 後 9:00～10:00)を視聴した。坂本龍馬役が新井浩文さんというのは少し残念だったが、新たな切り口もあり、大変おもしろかった。史実に基づいていながらも、新しい発見もあり、龍馬が多くの人を巻き込めたのは人間的な魅力と、詐欺まがいの策略だったのかなと感じた。そういった意味では、新井さんの演技はよかったと思う。

　また、１１月１９日(日)に再放送された、ブレイブ　勇敢なる者「えん罪弁護士」(総合 前 1:20～2:09)および、ブレイブ　勇敢なる者「Ｍｒ．トルネード～気象学で世界を救った男～」(総合 前 2:10～2:59)も視聴した。ドキュメンタリーにシンプルなアニメを交えた構成で、踏み込んだ内容に引き込まれた。新しい切り口のドキュメ

ンタリーや人物紹介はＮＨＫならではで感心した。

ＮＨＫ松山放送局
番組審議会事務局

平成２９年１０月ＮＨＫ四国地方放送番組審議会

１０月のＮＨＫ四国地方放送番組審議会は、１６日(月)、ＮＨＫ松山放送局において、９人の委員が出席して開かれた。

会議では、まず事前に視聴してもらった四国羅針盤「この先どうなる！？ふるさと納税」を含め、放送番組一般について活発に意見の交換を行った後、１１月の番組編成、放送番組モニター報告および視聴者意向についてそれぞれ説明があり、会議を終了した。

（出席委員）

委 員 長	髙橋　祐二	（三浦工業代表取締役会長）
副委員長	松島　裕彦	（四国旅客鉄道監査役）
委　　員	神田　優	（ＮＰＯ法人黒潮実感センター センター長）
	黒笹　慈幾	（南国生活技術研究所代表）
	佐伯　美香	（松山東雲女子大学・短期大学バレー部コーチ）
	坂田　千代子	（（株）あわわ会長）
	柴田　智恵	（有限会社大豊陸送代表取締役社長）
	田坂　實	（愛媛県農業協同組合中央会会長）
	村田　明広	（徳島大学大学院社会産業理工学研究部教授）

（主な発言）

＜ 四国羅針盤「この先どうなる！？ふるさと納税」（松山）
（総合　９月１５日(金)）について＞

○　地方がふるさと納税の制度の中でどう苦闘し、どう変わろうとしているのかがよく分かる番組だった。ふるさと納税の制度開始から１０年目を迎えたが、本来の制度の目的とは違い、現状は実質2,000円の豪華なふるさと宅配便になってしまっている。高知県奈半利町の取り組みは、今ある制度を活用して地域振興に努力している様子がよく伝わってきた。「ふるさと納税にしがみついて」ということばが印象的だったが、各地域が置かれている厳しい実情がその背景にあると感じた。高知県室戸市の“おやまの学校を守るため”という使い道を明示した方策は、本来の望ましいふるさと納税の姿だと感じた。なかなか伸びない納税額から、目標額を達成するために知恵を絞る姿は頭が下がる思いだ。この２つの取り組みから、現在の税制度の問題点も見えてくるが、番組はそこまでは踏み込んでいなかった。冒頭の街頭インタビューはどこで収

録されたのだろうか。

○　ふるさと納税の制度を利用した自治体の取り組みに関心を持ったが、商品券や家電など、地域の応援とは思えない返礼品が当たり前に行われていることに驚いた。制度開始からさまざまなアイデアを生み出し、税収の７倍にあたる２０億円を集めた奈半利町の取り組みや、地元の職人が作ったバイオリンを扱う四万十町など、まさに国が進める地方創生の好例だと思う。地域の特産品をＰＲし、施設の整備や雇用の創出につなげている取り組みは、全国に広まるといいと思う。室戸市の、返礼品に頼らない地域活性化策「おやまの学校を守りたい」は、制度の本来の目的である地域の応援を捉えており、よい紹介だった。ゲストが言う、お得度合戦から工夫合戦への移行は、今後全国からどのようなアイデアが出てくるのか注目したい。

○　ふるさと納税がここまでブレイクしたのは、利用者をひきつける節税と物欲をインセンティブにした巧妙な構造にあるからだろうが、現状は国が税金を原資に運営する通販と化している。２０億円を集めた奈半利町を例に、この財源なしでは町政が立ち行かないというコメントまで紹介されたが、これは異常な事態だ。ふるさと納税制度の当初の趣旨に鑑みて、現況はこれでいいのか。総務省が“高額な返礼品の禁止”や“返礼品の割合は３割まで”と通知した背景や、今後はどうあるべきか、といった視点で取材を行い、批判精神を持って番組を作ってほしかった。ゲストの「返礼品のお得度合戦から工夫合戦への移行が必要」というコメントは大学教授らしからぬ発想で残念だった。どうあるべきかという視点も含めた意見を言える人を起用すべきだった。ふるさと納税のシステムの分かりやすい解説と、ふるさと納税に関する一般視聴者の疑問に答えるコーナーがほしかった。また、クラウドファンディングとふるさと納税の違いを説明するなどもう少し深堀りし、ふるさと納税未経験の視聴者にも届く構成にすべきだった。

○　奈半利町の取り組みは、過疎や高齢化が進む町でふるさと納税を町の発展の契機と捉え、成果を出した例だと思う。現在は制度見直しの荒波にさらされているが、これまでの納税者とのつながりを生かして特産品の販売へとつなげようとしている点はすばらしい。お得度合戦から工夫合戦へ、自治体の知恵と行動力が試されるときだと思う。室戸市で廃校の危機にさらされている学校を残すためのクラウドファンディングは、行政と地域が思いを一つにしたからこそ成功したと思う。ふるさと納税が始まって１０年目、返礼品競争が激化したことは問題だが、地方の特産品に光があたった点では一定の効果はあったと思う。ふるさと納税は本来ふるさとへの応援であることを再認識すべきで、納税者に気持ちよくお金を出してもらえるような仕組み作りに、自治体の知恵と姿勢が問われることになる。

○　ふるさと納税の現状と将来の方向性がしっかり示された番組だったが、ふるさと納税の仕組みをもっと分かりやすく説明してほしかった。奈半利町の例では、独自のアイデアでふるさと納税を集め、それを原資に水産物や農産物の加工施設を建設し、そこでの特産品を返礼品にする、という好循環が紹介されたが、何よりも雇用が生まれ、地域が活性化するのがよいことだと思う。ゲストの名前をスーパーで紹介するタイミングが遅く、名前が聞き取れなかった。室戸市の“おやまの学校を守りたい”という、返礼品目的ではなく、使い道を示して賛同者から寄付を募るという取り組みが紹介されたが、これが本来のふるさと納税だと思う。素朴な疑問だが、一般論として自治体の職員がふるさと納税をすることは禁止されているのか。続編を期待している。

（ＮＨＫ側）

総務省の通知を受け、ふるさと納税を巡って今自治体で何が起きているのかというところに焦点を当て番組を作った。一番悩んだのは、ふるさと納税の仕組みや制度、なぜ総務省がこういった通知を出したのかという背景について、視聴者の知識にも差がある中でどれぐらい丁寧に説明するかということだ。制度や背景について、もう少し詳しく説明すべきだったと思う。ご質問についてだが、街頭インタビューは東京での声を使った。ふるさと納税の主な利用者は大都市圏が多く、ふさわしいと考えた。また、ふるさと納税は公務員でも問題ない。どうなるではなく、どうあるべきかまで踏み込むべきという点と、視聴者目線で素朴な疑問に答える作りが望ましいというご意見は、そうありたいと思っている。限られた時間の中ですべてを伝えることはできないのが実情だが、今後の番組作りで意識したい。室戸市の教員住宅の改修についてだが、現在屋根の改修が終わったとのことで、伝えっぱなしではなく、その後の経過もしっかりと取材をしていきたい。

○　奈半利町はふるさと納税で２０億円を集め、それを雇用の創出など地域の活性化に役立てていることを知り驚いた。総務省から返礼品見直しの通知があり、この制度のあり方が問われるタイミングでこの話題を取り上げたのはタイムリーだった。スタジオが司会者とゲストの男性２人だけで、地味な印象だった。ふるさと納税に熱心な利用者、特に若い女性の意見をスタジオで聞けば、広がりや明るさが出たと思う。奈半利町は、今後を見据え通販サイトで商品を販売できるように対策するなど、地域の産業を考えており、応援したい気持ちになった。番組が示唆するように、地域への応援というふるさと納税の原点に向き合い、地域のブランド力を高め、共感を得る工夫が必要だということを、自治体や利用者に発信していくことが必要だ。ふるさと納税

が地域の課題解決につながるよう、四国だけではなく全国にこの話題を伝えてほしい。

○　ふるさと納税の知識はあまりなかったが、制度の原点を考えるきっかけになる番組であった。四国で最もふるさと納税額が多い奈半利町が舞台になっていたが、他の地域のふるさと納税額がどれくらいあるのか、また納税額全国１位の自治体の紹介があれば比較ができてよかったと思う。返礼品の紹介では、特産品や商品券などは知っていたものの、１日市長体験などユニークなものがあることは初めて知った。ふるさと納税の見直しにより、各自治体ではこれまでの機運が下がるが、さまざまな工夫で各自治体が結束力を持って取り組んでいることが伝わってきた。返礼品に頼らず使い道を明確化し、クラウドファンディングで寄付を募る仕組みの紹介では、ふるさとを守りたいという地域愛や、人とのつながりといった、制度の原点を考えさせられた。

○　総務省からふるさと納税の返礼品について通知があったが、ふるさと納税獲得のための競争激化が危惧されているため、今後この制度がどう変化していくのかという観点で視聴した。奈半利町が税収の７倍にあたる年間２０億円も集めていることには驚いたとともに、担当者がふるさと納税を契機と捉え、町の生き残りをかけて取り組む情熱が伝わってきた。室戸市が地元の学校存続に向け、移住者を誘致するための費用を、クラウドファンディングをヒントに集める取り組みは、工夫次第で何とかなるという新鮮な情報だった。この２例の紹介だけだったが、高知県に限らず四国４県の現状を取り上げてほしかった。さらに、成功例だけではなく、思うように成果が得られない地域の情報もあれば、ふるさと納税の現状がより浮かび上がったと思う。ゲストのコメントはありきたりで、説得力や重厚感が感じられなかった。

○　各自治体が競って豪華な返礼品を扱う現状に対して総務省から通知があり、それによって自治体が見直しに力を入れている様子がよく理解できた。ゲストが「お得度合戦から工夫合戦に変わる」と述べていたように、これからの自治体は地域のブランド力を高める工夫が求められることが分かった。昨年２０億円を集めた奈半利町の取り組みはしっかり取材できていた。これまでは返礼率の高さで申し込みが殺到していたものの、総務省の通知で危機感を持ち、次の戦略に悪戦苦闘する様子もしっかり伝わってきた。一方、過疎の町の活性化に大いに役立ったふるさと納税が変わることで、現状に水を差すような事態も想定される。引き続き取材してほしい。これからのふるさと納税の方向性を示唆した室戸市のクラウドファンディングの取り組みは、苦労しながらも目標額を達成できてよかったと思う反面、移住者の募集がどのように行われ、実際に成果があったのかまで知りたかった。また、自治体が行っているクラウドファンディングの情報をどうやったら入手できるのかも知りたかった。

（ＮＨＫ側）

クラウドファンディングを自治体が行う場合は公的なものと位置づけられ、ふるさと納税の仕組みの中で決済できるため、全国的に広がっており、自治体ごとにユニークな取り組みをしているとのことだ。地方交付税はその使い道がある程度決まってくるが、このガバメントクラウドファンディングは、それぞれの地域の多様な政策を実現できるということで、ユニークな町おこしや戦略的な取り組みに使えるのが魅力とのことだ。今回、ゲストからそういったことを教えていただいたが、スタジオ部分であまり時間がとれず、突っ込んだ提言まで引き出すことができなかった。ＶＴＲパートとともに、いかにスタジオを魅力的に見せるかも今後の課題だと思っている。今年度から「四国羅針盤」は、有識者に加えて一般の方をゲストに呼ぶなど、親しみを持てるよう工夫しているが、今回はゲスト１名でスタジオ部分での情報が希薄になってしまった。奈半利町はふるさと納税で約２０億円を集めているが、全国１位は宮崎の都城市で約７０億円を集めており、全国のふるさと納税額は約 2,800 億円である。また、四国全体だと 120 億円ほどで、取り組みとしては高知が突出している。今回の番組を制作するにあたり、奈半利町のように担当者の努力が税収を支えている一方で、ふるさと納税という少しゆがんだ制度の上で町の経済が成り立っているという、危ういバランスをどう伝えればいいのかとても悩んだ。獣害対策と地域興しを目的にしたラーメン店開業の資金をクラウドファンディングで募るといった自治体の取り組みも出てきており、ふるさと納税と地域の在り方を今後も取り上げていきたい。

＜放送番組一般について＞

○　９月１７日(日)のニュース「台風１８号 関連」をずっと見ていた。地元の情報を得るため、ＮＨＫのニュースを信頼し活用しているが、非常に残念だったのは、午後８時前に愛媛県の一部で国土交通省からの緊急速報メールが届いたにもかかわらずそのあと大河ドラマ「おんな城主　直虎」が始まったことだ。午後８時前は、愛媛県松前町などは浸水していて大変な状況だった。画面を小さくして台風情報は放送されていたが「直虎」を休止してでも台風のニュースを伝えてほしかった。地元のＣＡＴＶは具体的に堤防が決壊するおそれがある地域などを示しており、その情報で安心することができた。本来、その役割はＮＨＫに担ってほしかった。

○　９月１７日(日)のＮＨＫスペシャル「黒潮～世界最大　渦巻く不思議の海～」を視聴した。カツオが水中で捕食する様子など、圧倒的な映像がすばらしかった。黒潮というと栄養豊富と誤解されがちだが、実は違うという点にもしっかり触れられており、そんな黒潮になぜカツオやマグロがいるのかといった説明も分かりやすかった。水中の映像と上空からのカツオ船の様子は興味深く、映像技術の進歩を感じた。ＮＨＫならではの、クオリティの高い番組だったが、今後もさらに細部にまでこだわった番組を作ってほしい。

○　９月３０日(土)に再放送された阿波スペシャル「鳴門の第九～日独１００年 響きあう思い～」(総合 前 10:55～11:23 徳島県域)を視聴した。こういった形で何度も再放送してくれるのはありがたい。鳴門の第九はＮＨＫでよく紹介されているが、この番組はそういった知識がない人でも理解しやすく、歴史を丁寧に描きつつ凝縮して伝えていた。これからも歴史は積み重なっていくので、鳴門の第九について引き続き取り上げてほしい。

○　９月３０日(土)の「第７２回国民体育大会～愛顔（えがお）つなぐえひめ国体～県民参加創作プログラム　」（Ｅテレ 後 1:00～1:36 愛媛県域）および「第７２回国民体育大会～愛顔（えがお）つなぐえひめ国体～総合開会式」（Ｅテレ 後 1:45～2:50）を視聴したが、すばらしい出来栄えだった。愛媛県民として、他県に誇れるものがこれだけあるということを知れたし、県民参加創作プログラムの準備もよくできていた。愛顔(えがお)で参加者が行進する映像もよく撮れていた。司会の小西アナウンサーと庭木アナウンサーは開会式の流れを熟知しており、とても分かりやすく伝えていた。

　また、１０月１３日(金)の四国羅針盤シリーズ“人手不足”「人が足りない！今 職場では・・・」も視聴した。人口減少が進む四国において、人手不足の問題は番組のテーマとしてよかった。高知県の電車やバスの運転手不足の事例などから、それに伴って生じる過重労働の現状まで深く考えさせられる番組だった。外国では女性が運転手をしている例もあるし、外国人労働者の雇用といった対策も考えられる。そういった視点も今後取り上げてほしい。

○　１０月２日(月）のネコメンタリー 猫も、杓子（しゃくし）も。「吉田修一と金ちゃん銀ちゃん」（Ｅテレ 後 11:00～11:25)を視聴した。猫は自分勝手な動物で、それが映像でどう紹介されるかに興味があったが、とてもうまく描かれていて感心した。取材したディレクターの質問に吉田さんが答えるシーンでは、音楽や高度な映像を用いて、視聴者が飽きないよう日常を伝えていた。和久田アナウンサーの語りも、番組に親近感を与えていた。また、吉田さんのエッセイを大沢たかおさんが朗読していた

が、声が優しく番組に合っていた。吉田さんの作家としての暮らし方や猫との生活が作品に結びついていることが感じられ、楽しい番組であった。

○　１０月４日(水)の「空中散歩－四国・碧（あお）き海と山河を巡る－」（総合 前3:27～3:57)を視聴した。空撮した四国の風景を字幕と音楽のみで紹介する番組で興味深かったが、気になる点もあった。撮影経路が示されたが、吉野川の上空を飛んでいるにもかかわらず、経路図はかなり南を飛んだように示されているなど、あまり正確ではなかった。また、映像を撮影した年月日を示してほしかった。佐田岬半島や石鎚山など、広範囲の映像はかすんでいていて見づらく、残念だった。土地勘のある地域は快適に見ることができたが、それ以外の地域はもう少し細かい地名や地形などの説明がないとおもしろさが実感できない。細かな説明があるバージョンも制作してほしい。

○　１０月６日(金)の四国羅針盤「どうつなぐ？四国の遍路文化」を視聴した。後継者不足やライフスタイルの変化などで遍路宿が廃業していっていることや、遍路道の整備が基本的にボランティアで支えられていて荒れ放題になっている点など、しっかり取材されていた。「ヘンロ小屋プロジェクト」の取り組みも紹介されており、とてもよくできていた。“遍路道を世界遺産に”という動きが紹介されたが、四国遍路は広範なため世界遺産登録のルールには全く合わない。四国遍路はどこからスタートしても回ることができ、大変よくできているので、そういう視点でも番組で取り上げてほしい。

○　１０月８日(日)のうまいッ！「風味まろやか！木桶（おけ）仕込みしょうゆ～香川県小豆島～」を視聴した。小豆島の昔ながらの木桶でのしょうゆ作りが丁寧に描かれていた。たるに付着した独特の菌が美しく撮影されており、しょうゆはこの菌が作っているという本質が伝わってきた。スタジオでしょうゆの味比べをするシーンは、そのうまみが画面から伝わってきてとてもよかった。高松局の川﨑理加アナウンサーの出番が少なかったので、もう少し出演してほしかった。

○　「連続テレビ小説 わろてんか」を毎朝視聴している。ヒロインの葵わかなさん、松たか子さんの主題歌、小野文惠アナウンサーの語りなど、いずれもこのドラマにふさわしい。喜怒哀楽の変化が激しく、テンポもよくて楽しく見ている。近年、朝ドラにイケメン俳優が出演することが多いが、今後も楽しみにしている。

　また、１０月１１日(水)の「第７２回国民体育大会～愛顔（えがお）つなぐえひめ国体～ バドミントン 成年女子・決勝」（Ｅテレ 後 3:00～4:00)も視聴した。番組内でバドミントンの詳しいルール説明がなかったので、テロップなどで説明があればス

ポーツを知らない人にも分かりやすかったと思う。今月末に「第１７回全国障害者スポーツ大会 愛顔(えがお)つなぐえひめ大会」が開かれるが、健常者のスポーツを目にする機会は多いものの、障害者のスポーツを見る機会は少ないので、この機会に多くの方に見ていただけるよう、夕方のニュースなどで紹介してほしい。

ＮＨＫ松山放送局
番組審議会事務局

平成２９年９月ＮＨＫ四国地方放送番組審議会

９月のＮＨＫ四国地方放送番組審議会は、１１日(月)、ＮＨＫ松山放送局において、８人の委員が出席して開かれた。

会議では、まず、「平成２９年度後半期の国内放送番組の編成」についてＮＨＫから説明があり、その後「平成３０年度の番組改定」について、意見交換を行った。続いて、「コレマジ！？さぬきうどん伝説　２玉目」を含め、放送番組一般について活発に意見の交換を行った後、１０月の番組編成、放送番組モニター報告および視聴者意向についてそれぞれ説明があり、会議を終了した。

（出席委員）

委 員 長	髙橋　祐二	（三浦工業代表取締役会長）
副委員長	松島　裕彦	（四国旅客鉄道監査役）
委　　員	神田　優	（ＮＰＯ法人黒潮実感センター センター長）
	黒笹　慈幾	（南国生活技術研究所代表）
	柴田　智恵	（有限会社大豊陸送代表取締役社長）
	田坂　實	（愛媛県農業協同組合中央会会長）
	真弓　絵里子	（高松紺屋町クリニック健診センター センター長）
	村田　明広	（徳島大学大学院社会産業理工学研究部教授）

（主な発言）

＜平成２９年度後半期の国内放送番組の編成および、
平成３０年度の番組改定に向けた意見聴取について＞

○　夏の全国高校野球選手権大会について、１回戦から全試合中継で全国放送しているが、朝から夜中まで毎日はやりすぎではないかと毎年思う。放送時間を減らしてほしい。

○　大河ドラマ「おんな城主　直虎」について、ここのところメロドラマを見ているような気になる。大河ドラマに期待していることとは違うので改善を望む。

○　「ガッテン！」や「ＮＨＫスペシャル」のような番組は見ていて勉強になるし、自らのスキルアップにもつながる。新しい情報の紹介も含め、こういった番組を作り

続けてほしい。

○　健康問題は大きな関心事項で、関連する番組は興味深く見ている。今後も最新の情報を番組で取り上げてほしい。

○　平成２９年度後期改定で新設される「偉人たちの健康診断」はおもしろそうで、視聴したい。また、「アニメ ピングー ｉｎ ザ・シティ」はＣＧアニメということで楽しみにしている。

○　Ｊアラートについて、北朝鮮の情勢に変化がなければ今後しばらく最も重要な情報だと思う。その中で、ニュースでどの程度の時間伝えるか、またどういう報道や伝達の方法がよいかについて視聴者もＮＨＫも成熟していかなければならないと思う。

○　毎朝ＮＨＫの番組やニュースを見ているが、「おはよう日本」内の“まちかど情報室”などためになるコーナーが多いので、引き続き継続してもらいたい。

○　平成２９年度後期改定では、「ファミリーヒストリー」が再開されるということで、楽しみにしたい。

○　最近はおもしろい番組というと、必ずＥテレの番組が話題に上がる。Ｅテレは多様化した時代に、突っ込んだテーマを取り上げていて非常におもしろい。視聴率だけで考えるのではなく、こういった番組を作っている人たちをしっかり評価してほしい。

○　平成２９年度後期改定では、「超入門！落語 ＴＨＥ ＭＯＶＩＥ」がおもしろい取り組みだと思うので期待している。

○　Ｅテレの番組は非常に完成度が高く関心を持って見ている。昔は、学校でもテレビを見て学習する機会があったと思うが、最近はあまり聞かない。せっかく完成度の高い番組があるのに学校現場もあまり活用していないようで、もったいなく感じる。番組の活用をもっと考えてほしい。

○　四国のＮＨＫは“Ｄｉｓｃｏｖｅｒ四国”キャンペーンで、番組を中心に“人口減少”を取り上げている。四国は日本で最も人口減少が進んでいる地域だが、最近なかなか次の番組が放送されない。若い人が魅力ある地域でいろいろなことをやっているとか、そういったことにスポットを当てた番組を放送してもらいたい。

○　８月１９日(土)にＮＨＫスペシャル「９秒台へのカウントダウン　密着　日本男子スプリンター」が放送されたが、それから１か月もしないうちに桐生選手が１０秒を切り、とてもタイムリーだった。世の中には、こういうことが起こるのではないかということがたくさんあると思うので、こういったタイムリーになる番組に取り組んでほしい。「９秒台へのカウントダウン」では、サニブラウン選手が、海外のコーチに評価されているとのことだった。このように、若い人がこれから海外で挑戦していくような番組もお願いしたい。

＜ コレマジ！？さぬきうどん伝説　２玉目　（高松）
（総合　７月２８日(金)）について＞

○　キャイ～ンの天野ひろゆきさんとウド鈴木さん、篠原ともえさん、川﨑理加アナウンサーの軽妙なやりとりと、地元ならではのディープな内容に引き込まれ、うどんの奥深さに改めて驚いた。最近は若手店主のうどん店も台頭しているとのことで、うどん文化がしっかり継承されていると感じた。製麺所にできたての麺を買いに行く長尾康浩さんは、店主の仕事の邪魔にならないよう麺を買うという愛好家ならではの気配りとマナーを感じた。非常食にレトルトのうどんがあり、開発した製麺会社が苦労の末、製品化したことを初めて知った。不動産会社の物件案内で、お気に入りのうどん店から物件を紹介するというのはさすが“うどん県”と思ったが、このサービスでの成約がまだないというオチは愉快であった。昔は家の玄関先に旗を立てるとうどんが配達されていたということを初めて知り、勉強になった。

○　番組冒頭に紹介された人気うどん店の職人たちの哲学は、行列ができる秘密を描き出していて見応えがあったが、もう少し時間をかけて深く掘り下げてもよかった。うどんマニアの長尾さんの製麺所めぐりは、香川県のうどんの原風景の一つとしておもしろかった。ただ、麺を箸で持ち上げるシーンでは生じょうゆをかけたうどんが薄汚れているように見えてしまって残念だった。川﨑アナウンサーは頑張っているものの、番組後半から疲れが見えてきて、視聴していてつらかった。全体の印象としては、今回の第２弾より、第１弾のほうがおもしろかった。番組を制作する視点や切り口にもっと工夫が必要だったと思う。

○　さぬきうどんのディープな世界を感じてもらおうという第２弾、キャイ～ンの２人と篠原さん、川﨑アナウンサーを加えた進行は安定感があり、掛け合いも楽しく見ることができた。川﨑アナの少しとぼけた味も好感が持てた。冒頭で第１弾がどのような番組であったのかを少し回想すれば、より今回の番組の理解が進んだと思う。番

組最初に正統派人気店の紹介から入ったのがよく、それぞれの職人の哲学やこだわりが分かりやすく紹介されていた。うどんマニアの長尾さんは、よくこのような方を探せたと思う。紙芝居を使って、昔のうどん配達旗や小麦通帳が紹介されていたが、もう少し香川県のうどんの歴史に触れてもらいたかった。非常食としてのうどんの開発や、不動産会社のうどん県索(検索)、世界最長うどんへの挑戦など、うどん県香川のあれこれがよく取材されていた。

○　ＮＨＫ高松局が番組制作を通じて“うどん本場のきょうじ”を示した良質のバラエティーだった。番組のホームページでは“小型カメラなどを駆使し、職人のスゴ技や美味しさの秘密に迫る”とあったので、「ガッテン！」のような番組展開になるのかと期待していたが、それほどではなかった。うどんのおいしさの要素を番組の中で論理的に分析していたが、そのおいしさの神髄を映像で伝えるのは極めて難しいと思うので、番組がバラエティーテイストになったのは当然だろう。うどんマニアの長尾さんはおもしろく、「もらったら風のように去る」「香川はうどんも人もあたたかい」といったコメントがよかった。番組を見ていて、香川のうどん文化の構造的問題点にいくつか気づいた。うどん生地を足で踏むシーンは、清潔な環境下なのは分かるが、食べ物を足で踏むのは国際的にはＮＧだろう。また、ハウスや小屋でうどんを提供する店が多いが、衛生的に違和感がある。さらに、塩を多用するうどんと成人病との関係はどうしても気になる。うどん県香川として、炭水化物と塩分の塊であるうどんを“健康食品化”するような取り組みの情報がほしかった。

（ＮＨＫ側）

香川県で、ＮＨＫ高松局がうどんを取り上げるというのはかなりプレッシャーがある。うどん県の中のうどんという、文化の中心と言っても過言ではないものを、どう伝えればよいか。いくつか難しさはあるが、一つはどんな情報を提供するかということだ。香川県民はうどんについてほとんどの情報をすでに知っている。そんな中、どういう情報を出せば、喜んでもらえるかがすごく難しい。もう一つは、香川は小さな県だが、“やっぱりうどんは自分の地域が１番”という自負があり、県民の人たちすべてに、バランスよく見ていただく番組にするには配慮が必要だ。さらに香川県だけでなく四国４県で放送する番組ということで、知恵を絞った。視聴率は、番組を放送した時間帯の前４週平均値より高く、よく見ていただけたと思う。うどん文化の問題点は制作側も感じており、今回はバラエティー番組ということで、糖尿病などには

触れなかったが、香川の糖尿病率や肥満度の高さは見過ごすことができないので、ニュース番組などでしっかり伝えていきたい。川﨑アナに関しては、真面目に頑張るアナウンサーなので温かい目で、これからどう成長するかを見守っていただけたらと思う。

（ＮＨＫ側）

第１弾と同じ体制で番組制作に当たったが、２作目を作るというのはここまで難しいものかと痛感しながら制作した。１作目は、香川県民の習慣や、台湾で自分の店を持ちたい現地の方のドキュメンタリーといったものを織り交ぜて番組にしたが、そのときに過剰とも思えるうどん愛を持った県民の方がいることが面白いと感じ、今回大きく取り上げた。香川県の県民性みたいなものをもっと掘り下げて、バラエティー風に仕立ててみると、今までになかったうどんの番組ができるのではないかと感じたためだ。番組内で紹介したチョコレートうどんが、多くの人から受け入れられるかは分からないが、奇抜なメニューを紹介し、若い人たちの話題となり、そこからＮＨＫの番組を見てもらうきっかけにしてもらおうということも意識しており、ツイッターやインスタグラムで、番組のそういった画像がアップロードされ、話題になったりもしていたので、ある程度の結果を残せたのかなと思っている。

○　有名うどん店でも若手が育っているということで、次の世代に着実にうどん文化が継承されている印象を受けた。うどん職人たちの哲学については、こだわりを映像で紹介している点で、納得感を得られてよかった。さぬきうどんはコシの強さが大きな特徴だが、ウドさんのダイナミックな足踏みをあえて反面教師として見せ、生地は均一に優しく踏むことが大事だと紹介したのは分かりやすかった。うどんマニアの長尾さんの行動から、うどんの旨さを紹介する視点はおもしろかった。「のどが麺をギューッと押しても押し返してくる」といったコメントはマニアならではの表現法で、実感がこもっていた。以前香川県では家に旗を立ててうどんを配達してもらっていたことは初めて知り、まさに香川県の原風景だと感じ、それを紙芝居で紹介した手法もよかった。香川の人々とうどんとの深い関係にまで深掘りした今回の番組は、これまでの食リポ番組とは一線を画したすばらしい番組になっていたと思う。ここまでうどんにまつわる情報を盛り込んだ企画に感心した。

○　さぬきうどんのディープな世界を紹介した番組で、うどんのことがよく分かるお

もしろい番組に仕上がっていた。うどん店が３店紹介されていたが、それぞれの店のこだわりから、おいしいうどんが作られていることがよく表現されていた。香川県は糖尿病や人工透析の患者が多いので、番組でうどんのディープな世界を紹介するのもよいが、香川県民の健康も考えて、食べすぎずに済むような番組を作るのもよいと思う。変わり種うどんの紹介では、「チョコレートうどん」や「うどんかき氷」を食べたときのディレクターのコメントが分かりにくかった。キャイ～ンなどの芸人に食べてもらったほうがよいコメントがもらえたと思う。お気に入りのうどん店から、近くにある賃貸物件を検索できる「うどん県索」は、さすがは香川県の不動産会社の発想だと感心した。不動産会社の方の「遊びじゃなくて真剣に作っている」というコメントのあとに、いまだ契約がないというオチはよくできていた。

○　オープニングがおいしそうなうどんの映像で、番組への期待が高まった。テロップのタイミングが適切で、ナレーションもわかりやすく、テンポのよい進行で番組に引き込まれた。第１弾に続きキャイ～ンと篠原さんのキャスティングも安定した素朴さと面白さがあり、川﨑アナウンサーとの掛け合いも番組の重要な要素となっていた。小型カメラの使用やスローモーション、早送りなど、細かい演出が施され、映像や効果音にも工夫が感じられた。誰もが知っている番組のパロディーも盛り込まれ、飽きさせない演出も魅力的だった。紙芝居を使った演出で、うどん配達旗や小麦通帳など昔のさぬきのディープな部分をうまく表現できていたように思う。非常食用としてのうどんは防災の観点からとても興味深く、５年間保存できるというのは貴重な情報だった。うどんの長さでギネス世界記録に挑戦したコーナーでは、何メートルで切れてしまったのかを知りたかったし、挑戦した方々のインタビューを入れたほうがよかった。うどん一つでこんなにたくさんの引き出しがあるのかと感心させられたし、さぬき人としてうどん文化を改めて誇りに感じることができたこの番組に感謝したい。全国の視聴者にこのディープな世界を届けてほしいと思う。

○　今回の第２弾は話題が多すぎ、やや食傷気味なところがあった。特に、変わり種うどん店の紹介で、客のいない店でリポーターがチョコレートうどんを食べて感想につまるシーンは、さぬきうどんのイメージを下げると思う。また、民放のパロディーと思われるコーナーがあったが、ＮＨＫの独自色を出してほしかった。川﨑アナウンサーはゲストのキャイ～ンの２人に押され気味のところが見受けられたので、キャイ～ンとも渡り合えるようなアドリブのきく人を起用したほうが良かったと思う。キャイ～ンと篠原さんは、この手の娯楽的な番組にぴったりの人選でアドリブもさえていた。番組冒頭で香川県の人気うどん店３店を紹介したのは、視聴者にさぬきうどんを食べたいと思わせるよい構成だった。うどんマニアの長尾さんの謙虚な姿勢とおいしそうにうどんを食べる姿はとても絵になっていた。香川県のうどんにまつわるエピソ

ードを紙芝居で紹介したコーナーは、新しい知識を得ることができた。うどんの長さでギネス記録にチャレンジして失敗する場面はあっけなく、何度も挑戦して成功してほしかった。

（ＮＨＫ側）

全国で放送してほしいというご要望についてだが、先日、岡山県も実はうどんがキラーコンテンツだということを知った。香川と岡山はアクセスもよいので、この番組を岡山県域で放送できないかと検討をしている。こういった形で、作った番組を四国の中だけではなく全国放送にするなど、効果的に放送できるよう努力していきたいと思っている。

＜放送番組一般について＞

○　７月１４日(金)のドキュメントしこく「指先で感じるしあわせ」および７月２１日(金)のドキュメントしこく「タンデム自転車に挑む夏」を視聴した。この２つの番組では、視覚障害者にとって健常者のサポートが非常に重要で、それによって生きがいを得られることが伝わってきた。また、健常者も視覚障害者との交流の中で、日常の中での大切なことが見えてくるのだと感じた。タンデム自転車については多くの県で公道での走行が許可されていない中、愛媛県はすばらしい取り組みをしている。視覚障害者がこのような体験を契機に何ごとにも前向きに取り組めるようになるという示唆に富む番組なので、ぜひ全国放送してほしい。

○　７月１７日(月)の「海洋アドベンチャー　タラ号の大冒険　(再)」(総合 前 0:25～1:09)を興味深く視聴した。さんご礁は、海洋に占める面積は非常に小さいが、海の生き物のおよそ２５％が暮らしているとのことだ。こういったビジュアルを重視した番組で海への関心を広げつつ、現状や課題を分かりやすく伝える番組を今後も期待している。

９月３日(日)のサイエンスＺＥＲＯ「小さな大洋“日本海”からの警告」も視聴した。最近の研究では、深層海流の強さが日本海では以前より３割以上弱まり、深海の酸素濃度が減少し注目を集めているとのことで、日本海では近い将来生物が住めないような環境になりつつあるというデータは興味深かった。今後さらに議論や認識が広がるように、こういったＮＨＫならではの番組を作り続けていってほしい。

○　７月２８日(金)の新日本風土記「四国山地」を視聴した。四国山地の山間にある猿

飼集落は急斜面の高所にあり、この集落に住んでいるのはみな高齢者だという。急斜面の畑は雨などの影響で土が少しずつ流れ落ちるため、くわを使った“土上げ”という作業が必要で、それは大変な重労働であることがよく伝わってきた。また、買い物に行けなくなったお年寄りのために、代わりに買い物をするという協力関係が受け継がれており、良好な人間関係が築かれていることがしっかり伝わってきた。県西部の急しゅんな山間地での生活は知らないことが多く、興味深く視聴した。

○　８月９日(水)の「アフリカゾウの家族をつくる　２８年間の記録」(総合 後10:50～11:15)を視聴した。　　ゾウの家族の長男だけが多摩動物公園に移されたとのことだったが、その映像がなく、もう少し取り上げてほしかった。ゾウのかわいらしい仕草や、野生の本能、感情の動きなどが映像を通してよく伝わってきた。担当飼育員の椎名さんがゾウたちに深い愛情を注いでいることもしっかり伝わってきた。昨年、父親ゾウが死んだが、今は残った家族で穏やかな日常を取り戻しているとのことだった。今後もゾウの家族に変化があったときには、こういった形で番組を放送してほしい。

○　８月１５日(火)のイッピン「丈夫でしなやか！　手袋がバッグに！？～香川　革製品～」を視聴した。革が折り畳めるというのは驚きで、革のバッグがきれいに折り畳まれている映像はインパクトがあった。番組で紹介された革をなめす工程で、香川県名産のオリーブオイルを使用し、しっとり仕上げるということは驚きだった。香川県の特徴を生かした革製品のこだわりが丁寧に描かれていたと思う。ふだん見られない貴重なスロー映像が盛り込まれていた点もよかった。難しいかもしれないが、こういった革製品がどこで販売されているのかという情報も知りたかった。

○　８月１９日(土)の「おはよう四国」を視聴した。坂上キャスターが氷の彫刻に挑戦していたが、プロは簡単に彫刻を作っているように見えるものの、素人が氷を美しく削るのは本当に大変だということがよく伝わってきた。

　また、８月２９日(火)のニュース「北朝鮮ミサイル」関連(総合 前6:03.49～10:20)での情報の伝え方が気になった。当初出ていたＪアラートの画面が切り替わったあと、北海道の映像などが出ていた十数分はどこが対象地域か画面から分からなかったため、ミサイルが落ちないと分かっていても、この十数分はすごくモヤモヤした気持ちであった。情報の提供はＮＨＫだけの問題ではないと思うが、少しでも早く新しい情報が分かると、安心を得られる。「頑丈な建物に避難して下さい」と言われても難しいので、現実的な避難情報があればもっと安心できると思う。

○　８月２９日(火)のニュース「北朝鮮ミサイル」関連(総合 前 6:03.49～10:20)は、Ｊアラートの画面が気になった。対象地域の都道府県名が北海道からずらりと出てい

たが、一番最後に新潟県とあり、そこで画面が切れていた。その後しばらくすると画面がスクロールされ、新潟県のあとに長野県と出てきたため、対象地域に長野県があるという情報が伝わるまで時間がかかっていた。こういった緊急時は、必要な情報をすべて１枚の画面に入れるべきだと思う。ＮＨＫだけの問題ではないと思うが、画面の作り方について一考を要するように思う。

○　９月７日(木)のモーガン・フリーマン　時空を超えて「影の宇宙は存在するのか？」をタイトルにひかれて視聴した。ホームページの番組紹介文を読むと非常におもしろそうだったが、実際に番組を見ると難しすぎて全く分からなかった。ただ、地上波のテレビ番組でこれほど理解の難しい番組を堂々と出すのはすごい。一番おもしろかったのは、番組中に“ヒッグス粒子”など耳慣れないことばがたくさん出てきたことだ。分かりやすさ優先のテレビ番組が多い中、それを根本から覆す刺激に満ちた番組で、難しいながら癖になった。宇宙物理学者がさまざまな比喩を用いて仮説を説明する構成も非常によくできており、子どもたちの好奇心を刺激するのにも有効だと感じた。過去の別の番組もぜひ再放送してほしい。

ＮＨＫ松山放送局
番組審議会事務局

平成２９年７月ＮＨＫ四国地方放送番組審議会

７月のＮＨＫ四国地方放送番組審議会は、１０日(月)、ＮＨＫ松山放送局において、８人の委員が出席して開かれた。

会議では、まず事前に聴取してもらった、各局の夕方５時台のラジオ番組を含め、放送番組一般について活発に意見の交換を行った後、８月・９月の番組編成、放送番組モニター報告および視聴者意向についてそれぞれ説明があり、会議を終了した。

（出席委員）

委 員 長	髙橋　祐二	（三浦工業代表取締役会長）
副委員長	松島　裕彦	（四国旅客鉄道監査役）
委　　員	神田　優	（ＮＰＯ法人黒潮実感センター センター長）
	黒笹　慈幾	（南国生活技術研究所代表）
	柴田　智恵	（有限会社大豊陸送代表取締役社長）
	田坂　實	（愛媛県農業協同組合中央会会長）
	長井　基裕	（愛媛新聞社執行役員編集局長）
	村田　明広	（徳島大学大学院社会産業理工学研究部教授）

（主な発言）

＜とさらじお(高知)　(ラジオ第１　５月２９日(月))について＞

○　音声だけのメディア、放送時間帯、番組のねらいなどを勘案すると、この番組の想定リスナーは女性なのだろう。放送されている夕方の時間帯、女性は自宅で家事をしながら聴いていると想像できるので、この番組は「リスナー参加型」ではなく「聴き流し系」の番組だと感じた。出演者のトークについて、ラジオでは「ゆっくり」「はっきり」「聴き取りやすい」が基本だと思うが、「とさらじお」でパーソナリティーのしゃべりは少し速く感じたものの、はっきりと聴き取りやすかった。ラジオにこそしゃべりのベテランを起用すべきだと思うが、ＮＨＫの地方局はラジオとテレビの適性を考えてアナウンサーを配置しているのか気になった。ゲストで“す桁職人”の山本忠義さんについて、高齢の職人といえば頑固で言葉少ないイメージがあったが、山本さんはコミュニケーション能力に優れ、言葉も明瞭で、ちゃめっ気もあるキャラクターで良い人選だった。す桁は職人用の道具で、それがどのようなものか、例えば漢字でどう書くのかを伝えれば、もう少しリスナーの想像力が広がったのではないか。ま

た、山本さんの人生全般に関する話など、リスナーが聴きたい情報をもっと聴き出してほしかった。聴き取りにくい言葉が出た時に、その言葉を繰り返す、いわゆる「オウム返し」が少なかったのも気になった。「絵本もえいきに！」のコーナーで高知こどもの図書館の古川佳代子さんの電話インタビューの声が途切れて聴きにくかった。この時間帯のリスナーは聴き流しスタイルが中心なのだから、メモを取りながら聴きたい種類の防災情報や絵本に関する情報は適していないと思う。ラジオというメディアの役割や特性を常に考えて番組を制作していってほしい。番組で流す音楽については、リスナー好みの本数を増やしてもいいと感じた。番組最後の言葉「おいしいごはんを！」には好感が持てた。

○　人間の五感が占める割合について、視覚８７％、聴覚７％というデータがあるそうで、ラジオはいかにリスナーにわかりやすく伝えるか、パーソナリティーの手腕が問われるところだろう。また、リスナーの想像力も試されている。人が聴覚からものをイメージするには、自分が知っている事象をつなぎ合わせて組み立てる必要があり、そういう意味で脳が活性化する気がする。コーナー「土佐がいちばんじゃき！」について、パーソナリティーは、標準語で話しつつも高知出身ということもあり、ゲストで“す桁職人”の山本さんが話す土佐弁にうまく応対するところに好感を持った。また、山本さんの昔ながらの土佐弁は味があってローカル番組の良さがあった。山本さんが、緊張した様子もなくふだんどおりしゃべっていたのは、パーソナリティーのリードが光っていたからだろう。「土佐がいちばんじゃき！」のコーナーは、土佐の一番のモノやコトをピックアップしているが、それに関わる人の思いや成り立ち、日常生活、人となりにスポットを当てているので、人生劇場を聴いているかのように感じた。「防災かまえちょき！」のコーナーは、南海トラフ巨大地震に対して備えておくべき内容を、さまざまなシチュエーションごとに丁寧に紹介しているので、自分なりのシミュレーションができてよかった。コーナー「絵本もえいきに！」の電話中継は、音質の悪さが少し気になったが、絵本の紹介はとても良かった。

（ＮＨＫ側）

ＮＨＫラジオを聴く世代は５０代以上が中心だが、すそ野を広げたいと考え、４０代女性をメインターゲットにしている。パーソナリティーは、ターゲット層と同年代の女性２人、地元出身で経験豊富な方にお願いした。コーナー「絵本もえいきに！」での電話インタビューが聴きづらかったことについては今後改善していきたい。番組で取り上げる音楽を選曲する際、８０年代の楽曲を中心に、歌詞が聴き取りやすいものを選んでいる。トークのス

ピードについて、ゆっくり話すことを心がけていたが、速いのではないかという指摘を頂いた。番組内容をやや詰め込み過ぎなのかもしれず、今後、バランスを検討したい。

＜　あわ☆メロＲ（徳島）（ラジオ第１　６月２６日(月)）について＞

○　パーソナリティーの板東道生さんと三浦珠実さんによる、部活動に励む高校生や音楽活動をしている若者を応援する番組だった。若者向け番組のせいか、話しのスピードが速く、一回では聴き取れない部分がしばしばあった。「アフタースクール」のコーナーでは、徳島市立高校演劇部の活動が紹介されていた。演劇部の四国大会での発表の様子が紹介されていたが、録音状態が悪く数回聴き直しても断片的にしか聴き取ることができなかった。優勝するくらいなので秀逸な演技にちがいないと思うが、聴き取れなかったので不満が残った。

（ＮＨＫ側）

「あわ☆メロＲ」は今年１月にスタートした番組で、毎月最終月曜日に放送している。音楽情報番組にしたねらいは２つある。一つに､徳島県の若者向けとして 2004 年にスタートしたテレビ番組「あわ☆メロ」で 2009 年から司会を務めているのが徳島在住のシンガーソングライターの坂東さんで、テレビで積み重ねてきたものをラジオに生かしたいと考えた。もう一つは、阿波おどりをはじめ、阿波人形浄瑠璃、ベートーヴェン「第九」のアジア初演の地、さらにはジャズで地域を盛り上げようとする動きもあり、徳島は音楽と相性の良い土地柄ではないかという思いがあった。今回は専門学校生と高校の演劇部を取り上げたが、ふだんはＮＨＫラジオを聴いていない若い世代に出演してもらうことで、ＮＨＫへの親しみの向上を図りたいと考えて制作している。夕方は、高校生が聴きづらい時間帯かもしれないが、ＮＨＫインターネットラジオサービス「らじる★らじる」で期間限定ではあるが配信もしているので、そういう形でフォロー出来ればと考えている。

ラジオ番組は、狙った年代や性別といったターゲット層の枠を越えて、テーマや出演者への興味や関心から番組を聴くという年齢も性別もさまざまなリスナーが増えてきていると感じている。農作業中や車の運転中、あるいは職人の方など、作業をしながらラジオを聴いているリスナーが数多くいるが、聴取習慣がつくと

「この時間は情報が出るからメモを取ろう」「この時間は投稿してみよう」と番組に参加してもらえるようになるので、ラジオは定時性が一番大事だと思う。「あわ☆メロＲ」は、音楽や高校の部活動を中心にするなど、さまざまな模索をしている最中だが、認知度を上げて、徳島の多くの人たちに聞いてもらえるようにすることが一番大事だと考えている。ゲストを知らなくてもネットですぐに調べて質問メールを送ってくるなど、ラジオとインターネットは、非常に親和性が高いと感じている。

＜　まんで香川きっきょん！？(高松)
(ラジオ第１　５月２９日(月))について＞

○　ラジオはテレビと違い何かをしながら聴く場合が多いが、通勤の車の運転や家事をしながらという意味では一種、ラジオは応援歌みたいな機能を果たしているのかなと思う。香川の番組は「まんで香川きっきょん」という讃岐弁のタイトルで地元に徹していて、聴いていてまったくストレスを感じさせない内容だった。香川の食文化を紹介していたが、例えば家族団らんの食事時にその食材が使われていて会話に花が咲くというのは、ラジオの非常に良いところだと思う。即時性という意味では、子どもの頃に停電でテレビが見られず、ラジオで自分の住んでいる地域に台風が迫っていることを知ったときの緊張感というかリアリティーは今でも記憶に残っている。そういう意味でラジオはテレビと違う独特なメディアだと感じた。今回の番組ではメッセージを寄せたリスナーの紹介が、居住地と匿名のみだった。昔は名前が出ることは、すごく快感だった。個人情報の問題だと思われるが、紹介のしかたなどの考え方があったら教えてほしい。

（ＮＨＫ側）

香川の「まんば」は高菜のことで、「まんばのけんちゃん」というものは、高菜を豆腐などと一緒に炒めて煮たもの。香川でこの料理を詳しく説明するのは、天ぷらがどのような料理かを説明するのと同じくらい違和感があるので、詳細な説明をしなかった。ただ他県から香川県に来る人もいるので、今回の意見を参考にさせていただきたい。ラジオは途中で聴き損なっても、もう１回聴いた時に話についてこられる構成にすることが大切だと思う。災害時に警戒や避難を呼びかける時にはやはり遠く離れた東京のスタジオより、近くの放送局から呼びかけるほうが訴える力が強いと思うので、そういう点でも地域の放送局の力を養っていきたい。投稿したリスナーの

情報については、ホームページの投稿欄に本名を書く人が少なく、手紙の場合でも紹介する場合は匿名で紹介してほしいと書かれていて、私たちの若い頃とは違うのだなと感じている。

＜　ラジオまどんな(松山)　(ラジオ第１　５月３０日(火))について＞

○　ゲストの津賀薫さんは、視覚障害者も楽しめる２人乗りのタンデム自転車の普及活動､イベントを企画するグループ｢ＮＯＮちゃん倶楽部｣の代表をされている方で、非常に気さくでよかった。キャスターからの説明が多かったので、もう少し津賀さん自身から話を聴きたかった。タンデム自転車のイベントに参加している鬼北町の渡辺純江さんが電話出演したが、参加者の体験や思いを聴くことができ、会の活動の厚みが感じられた。アラスカで活動している松山出身の写真家・松本紀生さんのインタビューでは、実際にアラスカで録音したクジラの寝息やリスの鳴き声など、ふだんは聴くことができない大自然の神秘に感動した。委員から視覚８７％、聴覚７％という話があったが､私はどちらかというと､聴覚が優位だと感じている｡特に災害時などは、ラジオは本当に大切だと思う。

　高松局の「まんで香川きっきょん」では、アナウンサーが話した「まんばのけんちゃん」という料理がどんなものなのか気になった。

○　キャスターが「ＮＯＮちゃん倶楽部」を立ち上げたきっかけ、活動内容や課題などを聴き出し、倶楽部の全体像や代表を務める津賀さんの情熱を分かりやすく浮かびあがらせていた。津賀さんの明るい声と、心のバリアフリーに向けて前向きに取り組もうとする姿勢はリスナーを元気づけたのではないか。タンデム自転車の走行については、１６県だけが許可しているというが、許可を得るためには何が必要なのか示してほしかった。ラジオを聴くだけでは、津賀さんの名前が聴き取りづらい部分があったので、発音は明確にしてほしいと思った。松本さんがなぜアラスカ大に進学したのか分からなかったので、アラスカの環境についての説明もほしかった。トドの群れと言われていたが、何頭ぐらい生息しているのか気になった。出演者の年齢が紹介されなかったが、そのようなルールがあるのか教えてほしい。

○　「ＮＯＮちゃん倶楽部」の代表・津賀さんの「今でも主人に背中を押されながら活動を続けている」という言葉からも、亡くなった夫の意志を継いだ夫婦での共同活動との思いがよく伝わった。ただ楽しんでもらうだけでなく、愛媛県警察本部の協力を得ての講習会開催などタンデム自転車に安全に乗ることへの理解を促進する取り組みに力を入れているのはすばらしいことだと思う。現在タンデム自転車で公道を走ることができるのは、四国では愛媛県だけとのことだが、一日も早く全国展開できる

ようしてほしいと思う。実際にタンデム自転車に乗っている渡辺さんとの電話対談では楽しさが伝わってきた。松山市出身の写真家・松本さんのインタビューは、アラスカや自然、動物が好きであることがよく伝わった。人にはそれぞれ生きがいや楽しみがあるが、マネのできない活動だと思う。クジラの呼吸音やリスの鳴き声など収録した音を紹介していたが、写真家としての活動や実績についてもう少し触れてほしかった。

○　キャスターが事前にタンデム自転車を体験していたこともあり、「ＮＯＮちゃん倶楽部」の活動内容をとても分かりやすく伝えていた。愛媛県警察本部の協力を得てタンデム自転車の安全講習会を年に一回実施するなど、とても良い取り組みだと思う。イベントに参加した渡辺さんへの電話インタビューからは、自転車に乗れる喜びや、タンデム自転車の前席に乗る人との楽しい会話などのすべてが「生きがい」になっていることがよく伝わってきた。松本さんのインタビューでは、アラスカの誰もいないところで一年の約半分、キャンプをしながらオーロラや野生動物の写真を撮って過ごしていることに驚いた。現地で取材したトドの群れの鳴き声の録音を交えながらの活動紹介は映像がないラジオならではの難しさがあったが、良かったと思う。しかし、臨場感を伝えるためにも、ぜひテレビで放送してほしい。夏目漱石生誕 150 年記念企画の南海放送・ＮＨＫ松山両局アナウンサーによるリレー朗読「こころ」のコーナーは、今回はＮＨＫのアナウンサーの朗読だったが、さすがプロフェッショナルだなと感じさせるもので、このような共同企画はとてもおもしろいと思う。

（ＮＨＫ側）

昨年までは毎週月曜日の週１回の放送だったが、今年度から月曜日から木曜日の週４回の放送になった。キャスターはテレビ世代ということで、ラジオの表現についてはまだまだ勉強中で、温かく見守ってほしい。今年度は、南海放送と共同で夏目漱石の生誕 150 年を記念して朗読リレーをしているが、リスナーから、朗読をするアナウンサーについてのお問い合わせをたくさん頂いている。「ＮＯＮちゃん倶楽部」の代表・津賀さんは非常に話上手で、キャスターが事前取材の際に１、２時間ぐらい話を聴いたが、どうしたら３０分のコーナー内でおさめられるかという感じだった。キャスターの説明がちょっと長いという指摘については、津賀さんの声を聴いたうえで、キャスターの説明が入ってくるような展開にすればよかったかなと思った。ラジオの構成は独特でテレビとは違うものがある。ラジオの良さは、いい話が出てきた瞬間に、後ろに予定していた話を１つ２つ自分の中で計算して落とし、話

を膨らますことができるところだと思う。出演者の年齢のことについては、基本的にルールはないが、出演者から避けてほしいと言われることがある。年齢や家族構成などリスナーは興味があると思うので、ラジオの中でどう紹介していくかは今後の課題だと思う。

＜放送番組一般について＞

○　６月２３日(金)の四国羅針盤「食卓から魚が消える！？～養殖王国に迫る危機～」を視聴した。愛媛県はブリについては全国の約６割、マダイは約８割のシェアを誇っていて、そのほとんどが豊後水道近辺で養殖されているというのは面白かった。この問題には、生産過剰による値崩れで養殖のブリやマダイが生産されなくなったという経緯がある。次に、餌にかんきつ類を使うなどのブランド化が行われ、最近は、マグロが売れ筋の中心になってきている、ということだ。一番の問題は消費者の嗜好(しこう)で、食物連鎖のピラミッドの上位にいるマグロなど、数が少ない魚を消費者が一番欲しがるのでバランスが崩れてくる。その矛盾に消費者自身が気付いていないことも大きな問題だ。もっと消費者の意識を変えるべきだと思う。現在、柏島でもマグロの養殖を盛んに行なっているが、あの餌の量は半端ではない。いずれイワシやアジやサバが餌になってしまい、人間の口に入ってこなくなるという危機感も持っている。さらに拍車をかけているのが、アジア各国でも養殖が盛んになっていることで、世界中で餌の奪い合いが起きている。解決策は、番組でも紹介されたが、餌の無駄をなくすことや、代替飼料の開発だ。ただ、番組のように餌としてミールワームを紹介すると、それを食べている魚のイメージが悪くなると思う。スタジオに置かれた水槽のタイはヒレがボロボロで、養殖のイメージを悪くしているように感じた。

○　四国羅針盤「食卓から魚が消える！？」を視聴した。　現在、回転ずしの盛況ぶりから、さぞ各地の養殖業者も潤っているものだと思っていたが、番組を見ていろいろなひずみがあることが理解できた。宇和島地域の養殖業者の数は３分の１まで減っており、今残っている業者も自分の代でやめてしまう人が多いとのことだった。中国などアジア諸国での養殖が増え、餌の原料となる魚粉の価格が高騰していることも見逃せない。生産現場の経営努力が収入アップにつながらず、さらなる産地間競争に拍車をかけていることが番組で示唆されていた。日本の養殖魚輸入の実態や予測について、どうなっているのか知りたかった。

○　四国羅針盤「食卓から魚が消える！？」を視聴した。養殖魚危機の原因を餌代の高

騰と流通システムに問題があるというところに置き、問題提起をして、解決策は餌やりの効率化や飼料改革であるという論理で番組を作っていた。しかし、この危機の根本的な解決にはならないと思った。代替飼料のミールワームではサバの代わりになるわけはなく、本質に全く迫れていなかった。もっとしっかり問題を把握して番組作らなければならないと思った。番組のタイトルが「食卓から魚が消える！？～養殖王国に迫る危機～」ということで期待して見たが、タイ、ブリ、マグロは食卓の話ではなく回転ずしの話で、期待外れだった。食卓の主な魚はアジやサバであるので、このタイトルは違うと思った。視聴者の関心を引こうとして、タイトルが大風呂敷になっていると思う。養殖魚の問題については、消費者も意識を変えなければならないと思うが、そこをもう少ししっかり突っ込んで、未来への示唆となるような内容にして欲しかった。

○　７月２日(日)の「東京都議会議員選挙　開票速報」(総合 後 7:58～8:15、9:00～10:05、10:30～３日(月)前 0:00) では、ＮＨＫが総力を挙げて取り組んだということがよくわかり、新しいデータの分析もされていてよかった。当日午後８時の当確もまさに当たっており、非常に高い視聴率を取ったということも評価したい。これから小池都知事の“都民ファースト”をしっかり見続けて、ＮＨＫなりに評価をきっちりしてほしいと思う。

○　６月３０日(金)の「新時代を切りひらけ～逆境を力に・ジョンマン･スピリット～」（総合 後 7:30～8:13 四国ﾌﾞﾛｯｸ）を視聴した。ナビゲーターのビビる大木さんのリポートや再現ドラマ、アニメーションなどを駆使してジョン万次郎の足跡をたどっており見やすい構成ではあったが、日米の懸け橋や人材育成などの功績を詳しく説明してほしかった。登場する地元の方々がジョン万次郎はすばらしい、精神を受け継ぎたいと語っていたが、その中身を知らない視聴者にとっては感情移入しにくかったのではないか。高知、沖縄、アメリカまで出向いて取材するなどコンテンツは盛りだくさんで放送時間に限りがあるのは理解するが、ジョン万次郎に対する思いをもっと聴きたかった。ジョン万次郎は仲間４人とともに漁に出て漂流、無人島で過酷な生活を送り、アメリカの捕鯨船に助けられた。船上の暮らしで訪れたであろう言語の壁はどう乗り越えたのか。万次郎の物語は語られるが、仲間はどうなったのか取り上げて欲しかった。ジョン万次郎の中濱家と捕鯨船船長のホイットフィールド家が 177 年も交流を続けていることに驚いた。こういう点も含めてＮＨＫの情報収集能力は高いと思う。

○　「新時代を切りひらけ～逆境を力に・ジョンマン・スピリット～」を視聴した。ジョン万次郎の生い立ちから活躍までドラマ仕立てで紹介されており、とてもわかりやすくておもしろかった。一方で、この作りであれば「歴史秘話ヒストリア」で取り上

げればいいのかな、とも思った。地元の方にも取材されていたが、活動はまだこれからということで、今後に注目していきたい。もう少し地元の方のお話を聴きたかった。ビビる大木さんがジョン万次郎資料館にはるばる来たと言っていたが、マイナス表現のように感じた。改めてジョン万次郎の生い立ちがよくわかったが、日米の懸け橋となったとことをもう少し詳しく伝えてもらえれば、さらに話が広がるのではと思った。

○　７月７日（金)のドキュメントしこく「自分らしく前へ～ビーチバレーの新星・村上礼華～」を視聴した。村上礼華さんは競技歴が浅いにもかかわらずすばらしい成績を上げているが、その説明がナレーションとテロップのみで簡単な紹介となっていた。映像で見ていると、授業に遅刻するシーンなどネガティブな場面が多く、それはそれでほほえましい部分はあったが、もう少し競技成績を説明してほしかった。オリンピックに向けての思いや悩みなど、いろいろな感情があると思う。本人の心情の中に入って本音を聴くという意味では、玄関先の立ち話で終わってしまった感じがあり、少し残念だと思った。近くＵ－２１の世界選手権があり、今年秋には愛媛国体もある。国体への出場はどういった過程で決定するのか。そういう情報も欲しかった。

○　５月２９日(月)のプロフェッショナル　仕事の流儀「猫を知れば、世界が変わる動物写真家・岩合光昭」を視聴した。動物写真家として有名な岩合さんがネコに粘り強く話しかけ、見られていないときに距離を縮めるなど、苦労して撮影されていることがよく分かった。「世界ネコ歩き」を何回も見ていたが、光線の具合まで考慮して、ネコが丸みのある形になるよう撮影されていたことを初めて知った。また、非常に多くの動物の撮影を命懸けで続けてこられた経験が、ネコの撮影にも生かされていることが伝わってきた。

　また、６月３０日(金)のドラマ１０　ブランケット・キャッツ（２）「我が家の夢のブランケット・キャット」も視聴した。空前のネコブームで、ネコが中心かと思ったが、人間や家族関係に焦点を当てていて、そこにネコが関わる位置づけだった。どのネコもおとなしすぎて違和感を覚え、視聴者の誤解を招くように感じた。

ＮＨＫ松山放送局
番組審議会事務局

平成２９年６月ＮＨＫ四国地方放送番組審議会

６月のＮＨＫ四国地方放送番組審議会は、１９日(月)、ＮＨＫ松山放送局において、９人の委員が出席して開かれた。

会議では、まず事前に視聴してもらった、ＪＡＰＡ－ＮＡＶＩ「徳島・三好市」（「あさイチ」内コーナー）を含め、放送番組一般について活発に意見の交換を行った後、７月の番組編成、放送番組モニター報告および視聴者意向についてそれぞれ説明があり、会議を終了した。

（出席委員）

委 員 長	髙橋　祐二	（三浦工業代表取締役会長）
副委員長	松島　裕彦	（四国旅客鉄道代表取締役専務 総合企画本部長）
委　　員	神田　優	（ＮＰＯ法人黒潮実感センター センター長）
	黒笹　慈幾	（南国生活技術研究所代表）
	坂田　千代子	（(株) あわわ会長）
	柴田　智恵	（有限会社大豊陸送代表取締役社長）
	田坂　實	（愛媛県農業協同組合中央会会長）
	長井　基裕	（愛媛新聞社執行役員編集局長）
	村田　明広	（徳島大学大学院社会産業理工学研究部教授）

（主な発言）

＜ＪＡＰＡ－ＮＡＶＩ「徳島・三好市」（「あさイチ」内コーナー）（徳島）
（総合 ５月２５日(木)）について＞

○　徳島県三好市の田舎暮らしと、昔からの伝統や文化を見に来る外国人観光客が増えていることを紹介する良い番組だった。大歩危峡にある観光施設の大平昌代さんの外国人観光客をもてなす努力には感心した。特に、台湾の大学とインターンシップ協定を結び、台湾の大学生を受け入れているのには頭が下がる思いだ。台湾の大学の学長が大歩危を訪れて感激したことがきっかけだったそうで、よほど印象がよかったのだろう。パックンは機転の利いた話ができ、日本人以上に日本のことに詳しそうでよい人選だった。落合集落が紹介された時に、展望スポットから全景を見せて、比高が 350 メートルあることや、この場所が地すべり地だからこそ畑作が可能で、平家の落人がこんな山奥でも隠れて住むことができたといった詳しい紹介もあるとよかったと思う。

○　徳島県民として、徳島の魅力をたっぷりと詳しく見ることができて満足だった。三好市が外国人観光客でにぎわっていると紹介されたが、人口よりも多い数の外国人が訪れていると知り驚かされた。この番組を見た日本人が、外国人観光客に続けと、徳島を訪れてくれることが期待できるだけに、取り上げたスポットの詳しい情報をもっと伝えてほしかった。また、今年１０月には日本で初めてラフティング世界選手権が三好市の吉野川で開催されることもあり、ラフティングが盛んな地域であることも紹介してほしかった。パックンとＮＨＫ徳島放送局の庭木櫻子アンウンサーは、今回の取材にぴったりの人選で好印象だった。

○　全体を通して楽しい番組だった。香川県多度津駅と徳島県大歩危駅を結ぶ観光列車「四国まんなか千年ものがたり」の紹介パートでは、地元を盛り上げようと奮闘する沿線の人たちを取り上げていて、彼らの大きな後押しになったと思う。庭木アナウンサーは少しとぼけたキャラクターでおもしろく、パックンとの掛け合いもよかった。非常に良い組み合わせだったと思う。三好市の位置を紹介した時に「徳島市内から車で２時間以上かかる」とコメントしていた。一般道を使えば確かに２時間程度かかると思うが、高速道路なら１時間程度で行けるところだ。「秘境」という印象を出そうとしたのかもしれないが、誤解を招きかねないと思う。東京の人などからすれば、四国がまず遠く、さらに徳島から車で２時間となれば非常に遠く感じて行く気もうせてしまうのではないかと感じた。

○　四国の山村に数多くの外国人観光客が訪れていることを知り、とてもうれしく思った。ヨーロッパや台湾の方々が、四国在住者もなかなか訪れない祖谷の山奥で日本の文化を体験して楽しんでいる様子は、見ている側も楽しい気分になった。四国で生まれ育った者として、人口減少に歯止めがかからないなど、四国のマイナス要素ばかりが最近目立っていることに心を痛めていたが、四国で育った人より外国人のほうが四国の良さに気づいているのではないかとこの番組を見て感じた。また、観光資源の良さだけではなく「おもてなし」があってこそ、その土地の魅力が大いに発信できていることがよく分かった。外国人観光客を全力で迎え、おもてなしをしている大歩危峡の大平さんのような方がいればこそ、インパクトや楽しい思い出とともに、訪れた場所が記憶に鮮明に残るのだと思う。外国人旅行者の増加が見込まれる中、日本の魅力の発信に大いに役立つ内容の番組だった。

○　全体を通して、観光客を呼び込むためのヒントがあり、内容盛りだくさんの番組だった。祖谷にこれだけの観光資源があることは知らず、ふるさとをもっと知らねばと思った。また、山あいの三好市にこれだけの外国人が訪れていることに驚いた。５年ほど前から観光客が増加した要因として、海外の旅行雑誌で取り上げられた点を紹介

していたが、旅行会社とのタイアップなど他にも独自の方策があるのではないかと思った。大歩危峡の大平さんは、外国のことばを独学で習得するなど、外国人観光客と情熱的に接する全力の姿が心に残った。彼女が語っていた通り、その土地に行きたいと思う背景には人と人とのつながりがあると改めて認識した。東祖谷にある人口２９人の集落に、かかしが約 180 体もあることを紹介したパートでは、知恵を絞れば独自の地域づくりができるのだと気づかされた。山城町に妖怪伝説が生まれた話では、その背景もしっかり示され、気配りのある作りだった。パックンのコメントは深みや説得力があり良い人選だったと思う。

（ＮＨＫ側）

「あさイチ」は４０、５０代の女性をメインターゲットにしている番組で、毎週木曜日の「ＪＡＰＡ－ＮＡＶＩ」は、一言で言えば地域発お役立ち情報コーナーだ。観光情報番組ではないので、旅行雑誌に載らないような取材の深さを大事にしながら制作している。徳島県西部の三好市は徳島県で最もインバウンドで成功した地域で、今回はその要因と魅力を地元の人にフォーカスして紹介した。三好市は、アジアの人が香川県の高松空港で降りて、愛媛県の道後温泉や高知県に抜けていくルートの通過地点になっているため、もっと足を止めて宿泊してもらう人を増やそうと、現在も試行錯誤中だ。また三好市では、今年はラフティング、来年はウェイクボードの世界選手権があるので、徳島局としても引き続き継続取材をして番組で発信していきたいと考えている。若手の地方局ディレクターが身に付けなければいけないスキルとして「ＶＴＲ構成」「生中継」「スタジオワーク」という３つがあるが、「ＪＡＰＡ－ＮＡＶＩ」はその３つ目のスタジオワークを学ぶいい機会になっている。

外国人観光客が増えているエリアに注目したいと考え、三好市を特集した。外国人観光客が増えている理由の一つは、行政の動きを待つだけではなく、地域の担当者が台湾や他のアジアの国を訪れ、直接旅行会社と交渉するという積極的な動きや、「祖谷は秘境」というイメージ戦略が大きいと思う。一方で外国人観光客の意識も変わってきていて、東京や京都以外の日本を見たいという要望が強くなっている。また、四国遍路に対する関心の高まりなど、そうした外国人旅行者の意識変化に加えて、大きなきっかけになったのは海外の旅行雑誌に取り上げられたことだと言われて

いる。そうしたことが新しい日本の観光として外国人観光客の興味関心を集めている点だと感じ、その点をうまく伝えたいと考えながら番組を制作した。

○　大歩危峡にある観光施設で外国人観光客を熱烈歓迎する大平さんのバイタリティーには敬服した。そば打ち体験塾を経営している都築麗子さんも、そば打ち体験だけでなく琴を披露したり、手作りの籠に乗せてあげたりするなど、さまざまな工夫で地域の活性化に大きな役割を担っていることが伝わってきた。東祖谷にある人口２９人の集落で約 180 体のかかしを１５年前から作っている綾野月見さんが、他の住民とも協力して、各かかしの特徴やエピソードが書かれた「基本台帳」も整備しているという紹介には大変驚かされた。地域活性化の成功には、巻き込み役のリーダーが必要だし、巻き込まれ役になる周りの協力も欠かせないということがよく出ていたと思う。三好市の魅力を最初に発見した、東洋文化の研究者であるアメリカ人のアレックス・カーさんについても取り上げていて良かった。案内役のパックンと庭木アナウンサーのコンビは、ユーモアを交えながら、楽しくわかりやすく伝えていて好印象だった。全体を通して、人の魅力があふれている番組だと感じた。

○　地方局ならではの超ローカルな話題の掘り起こしができていて、ふだんの情報集積がしっかりできているＮＨＫの強みが感じられた大変に出来が良い番組だった。「地方の過疎の町に外国人がなぜ来るのか」というわかりやすい課題設定で、多様な取材先を見つけてその解答を示していた。番組で登場するゲストハウスのオーナーや大歩危峡の大平さん、かかし制作の綾野さんなど、取材対象に密着しすぎず、それでいて人柄や人となりをコンパクトに伝える工夫が感じられた。案内役のパックンはコメントのクオリティーが高く、教養の高さとお笑い芸人ならではのエンタメ精神で「番組の艶」をうまく出せていた。また、庭木アナウンサーもパックンと絶妙な掛け合いで、人選の妙が感じられた。マンネリ化した観光情報番組が氾濫している中で、ＮＨＫらしい手堅い番組で、国境を越えた普遍的・本質的な「観光とはなにか」というテーマを追及する番組姿勢が垣間見えた。「外国人が求めているものが何か」の気づきがインバウンド観光では肝である。日本人観光客の求めがちなグルメや絶景スポット、行列のできる店などではない、ローカルな文化や生活、日常食などに反応する外国人の視線に学ばなければいけないと感じた。各エピソードが徳島県人の商売における「心得」「気づき」「こまめさ、まじめさ」がいかに優れているかを見せつけられるシーンばかりで、観光資源にそれほどの違いはないはずなのに、四国各県のインバウンド観光の対応に大きなクオリティーの差があることを突き付けられた感じがした。そういった意味でも大変に刺激的で、しかも非常に良質な番組だったと思う。

○　大歩危峡にある観光施設の大平さんの紹介パートについて、大規模な観光施設を存続させるためにアジアからの団体客をターゲットにしたのは正解で、大平さんのようなキャラが立った「人の魅力」で人を呼んでいるのが印象的だった。妖怪伝説で地域を盛り上げようとしている村の取り組みが紹介されていたが、単なる妖怪をおもしろがるのではなく、妖怪が生まれた背景をきっちり説明してくれた村長の話こそが肝だと思う。今後三好市は「外国からも人が来る場所」ということで、日本人観光客も増えてくるのではないかと感じた。この番組を通して、これからの観光は単に景色を楽しむだけでなく、体験や地元住民との交流、そして物語性が重要で、その鍵を握っているのはやっぱり「人」であることに気づかされた。また、誰もが知っている観光地ではなく「私だけが知っている」と感じられるような隠れた秘境でゆっくり滞在して楽しむ欧米人を主体とした客層と、有名な観光名所を団体で回って楽しむアジア人を主体とした客層という、外国人観光客の二極性が浮き彫りになったように感じた。

○　三好市のゲストハウスに大勢の外国人が押し寄せるのは、日本の原風景や素朴な人々の「静」の部分と、阿波おどりの「動」の部分とのギャップがうけているからだと思う。大歩危峡の観光施設の元気な名物オバサマ・大平さんは、お客さんを見送るバスの中での歌のパフォーマンスや外国語を交えたトークに大爆笑がおきていて、大人気な理由がよくわかった。そば打ち体験塾の都築さんは「外国語ではなく祖谷弁でしゃべるけど、みんなに通じる」とあっけらかんとした様子でお客さんと一緒にそばを打ち、自分で採った山菜の天ぷらでおもてなしをする姿が魅力的だった。町おこしや島おこしのヒントになるという視聴者からのメッセージが紹介されていたが、まさに少子高齢化や田舎暮らしを逆手にとり、元気なおばさんやおじさんたちが知恵を出しインバウンドにつなげている姿は、他の地域でも参考になると思う。案内役のパックンと庭木アナウンサーは､息もぴったりで山里の魅力をテンポよく紹介していたが､パックンはアドリブが利いていて感心した。徳島県の過疎地域の元気と温かさを感じるすばらしい番組だった。

（ＮＨＫ側）

去年８月に放送したＤｉｓｃｏｖｅｒ四国「徳島・阿波おどり２０１６～進化する熱狂の踊り～」のゲストにパックンを起用したが、人柄や機転の利いたアドリブ、そして切れ味鋭いコメントが非常に魅力的だった。また、外国人観光客をテーマにしているので、阿波踊りを体験したパックンにこそ、ほかの徳島の魅力を伝えて欲しいと考えて今回も出演をお願いした。パックンと庭木アナウンサーはこの阿波おどりの番組で共演し今回が２回目だったので、よいコンビネーションが生まれたのではないかと思って

いる。旅番組は民放も含めて数多く放送されているが、今回はそれらとは一線を画するインパクトや普遍的なテーマを伝えることを目指して制作した。また、今回紹介した内容は、メディアでよく取り上げられる話題が結構入っているが、それを少し違った切り口で見せるように工夫した。なお、三好市は四国の市町村で面積が一番広いところ。今回取材させていただいた場所は、高速を使っても徳島市内から車で２時間ほどかかる場所もあり、1時間で着くと誤解されないよう悩んだ末、２時間と紹介した。今後も視聴者の期待に応えるような取材を続けていきたい。

＜放送番組一般について＞

○　「ハートネットＴＶ」など、発達障害を取り上げた番組が最近多く、関心を持って見ている。昔から発達障害の子どもはいたが、「障害」という診断がされることはなく、落ち着きがない子と考えられて育ってきた。しかし、実は脳の障害が引き起こしていて、必ずしも子ども自身に問題があるわけではないという。現在、子どもだけではなく、大人にもそうした人が結構見かけられる。こうした現状を視聴者が理解して助け合うきっかけとなる非常に良い番組で、今後も関心を持って見ていきたい。

○　「鶴瓶の家族に乾杯」は７３分の長尺番組だが、いつも飽きることなく視聴している。どの回もぶっつけ本番のストーリー展開に引き込まれ、地元の人達との出会いや会話、視聴者が知りたい情報を上手に聞き出す鶴瓶さんやゲスト、すばらしいカメラの撮影技術や上手な編集で、感心しながら視聴している。また、ゲストの人柄や人間性がよく出ていてるので親しみを感じることができ、訪ねた先の有名なスポットや人々のありのままの暮らしも紹介されている。番組テーマ曲のさだまさしの「Ｂｉｒｔｈｄａｙ」も良く、今後も長く続いてほしい番組の一つだ。

○　４月１９日(水)の「ニュースウオッチ９」について。国政選挙の一票の格差に関するニュースで「格差を１倍以上、２倍未満にする」という表現があった。最も少ない選挙区を「１」にして他の選挙区がいくらになるかで格差を示すので「１倍以上」は不要で、「格差を２倍未満にする」とすればよかったと思う。

○　「美の壺」は時々見る番組だが、５月７日(日)の美の壺・選「いい感じの“石ころ”」では、何千年もの歴史を持つ石のエネルギーを形にするため、石を立てた造形物「石花」を制作する石花師という職人がいることを初めて知ることができ、興味深く視聴

した。

○　５月８日(月)の「逆・転・人・生」（総合 後 10:25～11:15）を視聴した。７年前に埼玉県の両神山で起こった山岳遭難事故で、足の骨折をしながら２週間後に救出された多田純一さん取り上げた番組だった。骨が皮膚から突き出るほどの骨折をしながら、焼いたナイフを傷口に押し当てて止血したり、ミミズやアリを食べたという話があり、ドラマではない現実の話に驚きをもって視聴した。本人はもとより家族も決して諦めなかったことや、捜索に当たった関係者の努力が報われたことがよく分かる内容だった。番組最後、多田さんは９回の手術とリハビリを経て歩けるようになり、結婚して二人の子どもに恵まれたとの紹介があり、安心して見終えることができた。スタジオゲストに山岳救助の専門家や国際山岳医、昆虫食専門家などを招き、どこでミスがあったのか、手当に関すること、救出が遅れた原因、虫を食べる際の注意などとても重要なコメントをしていた。山登りをする方々にぜひ紹介したい番組だった。

○　５月１３日(土)に再放送されたドキュメントしこく「ＡＩで地域を救え～ふるさとの課題に挑む技術者たち～」をタイトルにひかれて視聴したが、やや誇張した表現だと感じた。「ＡＩで介護満足度を測定する」という手法が介護予防の質の向上に結び付くのか、結論は出なかったものの可能性を感じさせる内容だった。しかし、人の感情を数値化することの難しさは歴然としてあり、時間はかかるのだろう。また、ＩＴ環境の整備により田舎でもクリエーティブな仕事ができるという、今後のＵターン・Ｉターンの在り方を示していた。ＡＩという最先端技術に携わる主人公・松本貴也さんが認知症の祖母に温かく接している姿が人としての温もりを感じさせた。デジタル化が進んでも、人間世界はやはり人と人との触れ合いこそが生きる上でのよすがだという点を印象付けた。松本さんは、祖父母が病気になったため東京での生活を捨てて故郷である高知県に帰ろうと思ったという。その動機をもう少し深堀りして伝えてほしかった。

○　５月１９日(金)のドキュメントしこく「ふたりの花畑～香川・志々島～」について。
６月１８日(日)の「ＮＨＫニュース　おはよう日本」の中で、この番組が再構成された企画が特集として放送されていた。全国放送という形で生かされて非常によかったと感じた。

６月２日(金)に再放送されたドキュメントしこく「“ゴミの島”再生の日～豊島・産廃と闘った４２年～」を視聴した。豊島は産業廃棄物によって「ゴミの島」と言われていたが、今年になりやっと搬出されて、搬出された廃棄物の再処理にもめどがついたという。行政の不作為のために解決まで非常に長い時間かかったという歴史を上手く取り扱っていた番組だった。

６月４日(日)の小さな旅「瀬戸の桃源郷　青々と～香川県　豊島～」でも豊島を題材にしていた。この番組では豊島を「ゴミの島」ではなく「瀬戸の桃源郷」として取り上げていた。アナウンサーの山本哲也さんが非常に美しい風景を訪ねて行くが、画面構成がきれいで、本当にすばらしい番組だと感じた。また、山本アナウンサーの実直な性格や語り口は、この番組の雰囲気に合っていたと思う。

○　テレビや新聞で今話題になっている豊島について取り上げた、ドキュメントしこく「“ゴミの島”再生の日～豊島・産廃と闘った４２年～」を視聴した。豊島が「ゴミの島」と呼ばれる背景をこの番組で初めて知った。行政の「間違いを認めない、責任を取らない」というエゴの結果、長い間住民に苦痛を与えた歴史を伝えていて、自然豊かな島を傷つけた背景がよく理解できた。「この問題を風化させて欲しくない」という思いが伝わって来る本当に良い内容で、ぜひ行政の人たちに見て欲しい番組だと感じた。今後も継続して報道していってほしい。

○　６月２日(金)の阿波スペシャル「鳴門の第九　～日独１００年　響きあう思い～」（総合 後 7:30～7:58 徳島県域）を視聴した。ドイツ兵捕虜によって「第九」がアジアで初めて鳴門で演奏されてから来年で 100 周年を迎える節目に、日本とドイツとの交流の歴史をひもとく内容の番組だった。徳島ではイベントで「第九」が歌われることが多いが、その背景を詳しく知る機会はこれまであまりなかったので、ドイツ兵と地域とのふれあいを聞いて非常に感動した。来年で 100 周年を迎えるので、引き続き取材を続けて全国放送につなげていってほしい。

○　６月２日(金)の「阿波スペシャル」を視聴した。日本での「第九」の初演が板東俘虜収容所のドイツ兵捕虜たちによるものだと知っていたが、「第九」の演奏や合唱を通じた捕虜の子孫と鳴門の人たちとの交流が今なお続いていることを初めて知った。「捕虜は犯罪者ではない」という松江豊寿収容所長の考えで捕虜の人道的な扱いでは他に例を見ないような話がたくさんあり、生きて帰ったドイツ兵捕虜たちも結果的にはよい体験として心に残っていたことが番組を通じてよく分かった。気になったのは、板東にドイツ兵１１人の墓があり、それを守っている鳴門の人も紹介されていたが、何が原因で死亡したのかを伝えてほしかった。タイトルについて、俘虜収容所の開設から 100 年、「第九」の初演から９９年というタイミングの放送だったことで、微妙なものになったのかと思った。よい番組だと思うで、全国放送されるとともに、日独友好のためにドイツでも放送されることを願っている。

○　６月１０日(土)に再放送された四国羅針盤「四国の食をイスラムに！　広がる“ハラールビジネス”」を関心のあるテーマだったので興味深く視聴した。「ハラール」は

イスラム教で「許されたもの」という意味で、イスラム教の戒律に反しない食品のことをいう。ハラールと認められるための「ハラール認証」が必要で、日本にも認証団体があることを初めて知った。番組は、このハラールメニューを提供する大阪の飲食店だけでなく、養殖魚をイスラム圏に輸出するためにいち早く認証を取得した愛媛の養殖業者や徳島の菓子メーカー、漬物業者の取り組みを取材し、四国でも対応が始まっている現状を紹介していて大変興味深く、これは最先端の情報だと思った。最も興味深かったのは、スタジオゲストのサヘル・ローズさんがコメントしていた「ハラール認証を取得した食事を提供するカラオケボックスが増えてる」という話題だ。カラオケをしているイスラムの人達がたくさんいるということで、そこを掘り下げてもおもしろい番組ができそうだと感じた。最終的に、ハラール認証はあくまでもビジネスのスタートであり、本当に成功するためにはマーケティングやイスラム文化の真の理解が必須であることを番組の中で強調していた。また、ビジネスのことだけ考えたハラール化に警鐘を鳴らす結びにしていたところがＮＨＫならではの編集だと思った。食文化を通じて、日本とイスラムがお互いの理解を深める関係になることこそがハラールビジネスの理想的な展開ではないか。そうした話題まで突っ込んだコメントがあればさらに深みのある番組になったと思う。

○　６月１０日(土)に再放送された「四国羅針盤」は、新しい知識が得られる、とても印象的な番組だった。日本の食材の海外発信はまだまだこれからだと思っていたが、積極的に各地でハラール認証が取られている動きが進んでることを知って驚いた。漬物のハラール認証取得に挑戦する徳島の企業を紹介していた。日本の食文化を海外発信していくのに、漬物は身近でとても日本的だと思うので、目の付け所が良いと思った。四国とイスラムはなかなか結び付きにくいイメージがあるが、こうした食のつながりで理解し合える可能性を感じた。また、四国の人たちがハラール認証取得に取り組み、イスラム圏に四国の食文化を発信していることが分かり、元気づけられる話題だった。

ＮＨＫ松山放送局
番組審議会事務局

平成２９年５月ＮＨＫ四国地方放送番組審議会

５月のＮＨＫ四国地方放送番組審議会は、１５日(月)、ＮＨＫ松山放送局において、１１人の委員が出席して開かれた。

会議では、まず、「平成２８年度四国地方向け放送番組の種別ごとの放送時間」について報告があった。続いて、事前に視聴してもらった、Ｄｉｓｃｏｖｅｒ四国「四国が消える！？」を含め、放送番組一般について活発に意見の交換を行った後、６月の番組編成、放送番組モニター報告および視聴者意向についてそれぞれ説明があり、会議を終了した。

（出席委員）

委員長	松井　忍	（ＮＰＯ法人ＧＣＭ庚申庵倶楽部理事長）
副委員長	髙橋　祐二	（三浦工業代表取締役会長）
委　員	神田　優	（ＮＰＯ法人黒潮実感センター センター長）
	黒笹　慈幾	（南国生活技術研究所代表）
	佐伯　美香	（松山東雲女子大学・短期大学バレー部コーチ）
	坂田　千代子	（（株）あわわ会長）
	田坂　實	（愛媛県農業協同組合中央会会長）
	長井　基裕	（愛媛新聞社執行役員編集局長）
	松島　裕彦	（四国旅客鉄道代表取締役専務 総合企画本部長）
	真弓　絵里子	（高松紺屋町クリニック健診センター センター長）
	村田　明広	（徳島大学大学院社会産業理工学研究部教授）

（主な発言）

＜Ｄｉｓｃｏｖｅｒ四国「四国が消える！？」（松山）

（総合　４月２８日(金)）について＞

○　番組冒頭「四国が消える！？」というショッキングなタイトルの直後、2040 年のニュースという設定で老人メークのアナウンサーが「町が消滅する」といった四国の人口減少をパロディーで伝える演出に驚かされた。しかし最後まで見ると、四国の人口流出や「集落の崩壊」について、現状分析から今後の対策まで多岐にわたり取り上げた内容に感心した。番組では四国で人口流出が進む理由として、高学歴化が進む中、学生の高い能力を生かせる職場が少なく、就活サイトで検索しても四国の企業がヒッ

トしない、といった問題点が指摘されていた。そもそも今の四国では、クリエーティブな仕事や満足する給料など、希望通りの就職先を見つけるのは困難だろう。そうした状況にあって、スタジオゲストの高知大学の受田浩之教授が話していた「イノベーターを核にしてその周りにクリエイターが集まる」ことを目指す「イノベーター人材誘致」は大変効果的だと思う。よくある工場誘致のように一度に大量の雇用は生まないものの、多種多様な人材が入ってくることで職種が豊かになり、就職の選択肢も増えていくだろう。また受田教授は人口減少への提言として、長さが異なる板を縦に並べて作る「ドベネックの桶」のモデルを使い、さまざまな対策を総合的に底上げしていくことが大切だと話していた。例えば「ある地域で人口減少の最大の原因が仕事不足にあるなら、これまでの働き方とは違う新しい仕事を作ればいい」という提案は非常に有効だと感じた。今回スタジオには四国在住者と四国を離れて東京に暮らす若者を招き「どのくらい当事者意識を持っているか」「なぜ若者が四国から流出するのか」などのテーマで意見を戦わせていた。ただ彼らは人口減少について問題意識を抱えていながら、どのように話せばいいのか戸惑っている印象を受けた。そこをゲストの博報堂ブランドデザイン若者研究所の原田曜平さんや受田教授が、要所要所で考え方を整理したりアドバイスしたりしてくれていたのは、大変よかったと思う。

○　気になった点を述べる。四国からの流出人口について、スタジオで年齢を１０歳ごとに区分したグラフを示し、１０代２０代の若い世代の流出が多いと伝えた後で、ゲストの受田教授から、5歳ごとに見ると大学卒業と就職を契機とした２０から２４歳の流出が多いという発言があった。最初のグラフも5歳ごとに区分したものを使うべきだった。四国四県には大学が少ないので、この年齢の若者が関西や首都圏に出て行くのは当然だと思う。また香川県と高知県では、大学進学時の県外流出率が高く８割を超えていると紹介していたが、徳島県と愛媛県の流出率がなぜそれより低いのか予想がつかないので説明してほしかった。また、就活中の若者が使う検索サイトで四国の会社が出てくるか、番組スタッフが実際に検証する場面があった。検索条件を東京都と愛媛県の２か所にして検索していたが、愛媛の会社がなかなか出てこないのは当然だ。東京と愛媛で別々に検索して件数を比較すべきだった。番組全体を通してカタカナ言葉が多いのも気になった。「イノベーター」や「コンテンツ力」は、普段使わない人にはわかりにくかったと思う。

○　四国のＮＨＫで継続的に番組を制作している人口減少について、今回は「仕事」をテーマにその課題を浮き彫りにして、対策も考えていく番組だった。ただこれを見て「四国で仕事を見つけよう」と思った若者は少ないのではないか。若い世代は特にテレビの影響を受けやすい。人口減少について番組を作る時は「やっぱり四国で暮らそう」と思える内容にしてほしい。スタジオの一般人出演者について、四国在住者から

出る意見は説得力に欠け、四国で暮らす魅力が伝わってこなかった。ＶＴＲに登場した高知県の嶺北地域に移住した矢野大地さんや、徳島県の神山町で起業した若者のように「四国で働くことを本当に魅力に感じている人」をスタジオに呼んでほしかった。地元で暮らす魅力をきちんと伝えることで、人口確保に貢献できる番組を制作していってほしい。番組後半、四国の広大な自然を生かした最先端事業の例として「ドローンを飛ばしやすい」ことを売りに企業や研究機関を招致しようとしている、徳島県那賀町の試みを取り上げていた。現地の映像がなく簡単な紹介だけだったので、しっかり取材してほしかった。

○　番組冒頭にスタジオゲストのタレントの松本明子さんが「四国の人口ってそんなに減っているの？」と話していた。私の暮らす地域でも小学校のクラスが増えたり、マンションもすぐ完売したりするので、住民が減っているという実感に乏しい。同じように感じている視聴者は多いと思う。それに対しこの番組では、四国の人口は 2015 年から年間およそ３万人ずつ減少し、2040 年までには自治体の６５％が立ち行かなくなる可能性があると説明していた。深刻な現実を視聴者がしっかりと把握し、課題解決に欠かせないリアルな危機感を持つ、いいきっかけになったと思う。スタジオでは、受田教授が要所要所で人口減少を食い止めるポイントを整理していて、番組に深みを与えていた。構成について、番組でははじめ、人口減少の危機的な現状を、四国の人口の推移や消滅可能性都市の数などデータを示しながら、その理由や背景をわかりやすく説明していた。冒頭からそうした厳しい実態の紹介が続く一方、対策について説明がなかったので「それならば四国から移住した方がいいのでは？」と感じた視聴者は多かったと思う。ところがそのあとすぐ、そうした視聴者の意識をくみ取るように、移住のメリットとデメリットを、名古屋に移り住んだもののなじめず四国に戻った人に取材して、きちんと提示していたのは大変よかった。また番組後半では、高知県大豊町で日本一のシャクヤク園を作ろうというプロジェクトや徳島県神山町での起業支援など、四国に移住してきた若者の取り組みやその支援について、丁寧な取材で紹介していた。人口減少という大きな課題について、明るい兆しを感じることができたのはうれしかった。四国に限らず全国に発信するべき問題・テーマとして、この番組をぜひ全国放送してほしい。

○　同じく人口減少がテーマの去年４月の番組、Ｄｉｓｃｏｖｅｒ四国「田舎で見つけた希望の芽」に比べて、四国からの進学先・就職先の問題に焦点を絞って、よく作り込まれた番組だった。スタジオには四国在住者と四国出身の東京在住者を招き、それぞれの意見を聞く構成となっていた。東京在住者のグループにはタレントの松本明子さんが入っていた。発言回数が多い分、東京在住者に比重がかかった印象になり、討論も低調に感じられ不満が残った。彼ら一般人の出演者をどういう基準で選んだのか

も教えてほしかった。番組中盤「四国以外で暮らす四国出身者に徹底調査」というナレーションに合わせて、番組スタッフが一斉に電話取材を始めるシーンがあった。膨大な数の取材相手をどのように見つけたのか気になった。「四国がもし 100 人の村だったら」という番組オリジナルの紙芝居では、人口減少の結果、100 人が５０年後に５６人になり、100 年後には０になって村は「消滅」する、と説明していた。こうした数字の根拠をもう少し具体的に紹介していれば、人口減少の恐ろしさがより実感を持って伝わったのに、と惜しい気がした。

○　人口減少はこれまでもさまざまな番組で取り上げてきたテーマだ。それをこの番組ではオープニングから「四国が消える！？」というタイトル、実際に「消滅」した集落や「松山がなくなる日」と書かれた松山市発行のパンフレットなど、衝撃的なワードや映像を重ねることで強い危機感を抱かされ一気に引き込まれた。2040 年のパロディーニュースにはやや違和感を覚えたが、番組を見続けていくと、若い世代をターゲットに新しい演出にチャレンジしていることが伝わってきた。番組の最後も冒頭と同様「2040 年のニュース」で締めくくっており、全体構成を考えると納得の行く演出だった。スタジオで四国在住者と四国出身の東京在住者が意見をぶつけ合う演出はおもしろく、東京在住者の意見に四国在住者が「四国にはこんな魅力がある」と応戦することで、四国の多彩な魅力を知ることができた。他県に移住したものの故郷に帰ってきた高齢者を紹介する場面では、移住の難しさとふるさとの良さを再認識できた。紙芝居「四国がもし 100 人の村だったら」は非常に味のある絵で、内容も頭に入りやすかった。また四国に移住して頑張る若者や、若者の起業支援を紹介するパートでは「新たな仕事を創りやすい」といった、四国の可能性が伝わってきた。国際市場のニッチ分野で高いシェアを確保している「グローバル・ニッチ・トップ」企業が四国に数多くあることにも驚かされた。スタジオゲストの発言には印象に残るものが多かった。受田教授の「ドベネックの桶」を使った、人口減少克服への提言は大変理解しやすかった。原田さんの「四国で解決できたらアジア全体を救うきっかけになる」という発言は、番組を前向きな深みのあるものにしていた。黄色を基調にした明るいスタジオセットも、若い世代向けに合っていたと思う。気になったのは、カタカナの専門用語が多かったことだ。意味をスーパーで示すなど配慮してほしかった。四国からの転出者にスタッフが一斉に電話するシーンは、あえて映像で示す必要性を感じなかった。

（ＮＨＫ側）

四国ＮＨＫの年間キャンペーン「Ｄｉｓｃｏｖｅｒ四国」は、さまざまな番組やニュースで、人口減少など地域の課題に焦点を当て解決策を発見しようというものだ。去年４月の番組「四国で見つけ

た希望の芽」では、人口減少が進む中、移住者が増えている町もある、といった各地の明るい兆しを取材して紹介した。ただ放送後に視聴者から「人口減少の行く末は楽観できるものではない」という意見を複数頂き、この問題は一筋縄で行かないとも感じていた。そこで今回は「厳しい現実をしっかりと直視して伝える」というコンセプトのもと制作を始めた。人口動態や出生率といったデータを、一つ一つより丁寧に分析することで、同じテーマを扱ったこれまでの番組との既視感がないよう努めた。実は四国の多くの地域では、若い世代の流出はあっても、高齢者の寿命が伸びて人口は激減とまで行かずなんとか持ちこたえている現状だ。そのため当事者意識がない住民も多く、視聴者に危機感を抱いてもらうのにふさわしい取材先を探すのに、大変苦労した。番組に関わったディレクター３人は全員２０代で、彼らの意見や感性を大事にしながら、少しでも多くの若い世代に見てもらえるようさまざまな演出にも挑戦した。流出が続いている四国の若者に、自分の問題として見てもらえる番組になっていればうれしい。

今回番組制作に当たっては、人口動態や高齢化率、出生率といった、人口減少に関するデータを徹底的に分析した。その結果、四国の人口減少は全国平均の２５年先を進んでいて、近い将来極めて深刻な事態に陥りかねないことがわかってきた。問題が顕在化してから対応しても手遅れで、若い世代やその次の世代が本当に危機感を持って取り組むべき課題と感じた。解決に向けては、流出が多い２０代から４０代の人たちに当事者意識を持ってもらうことが何より大事と考え、彼らをいかに引きつけるかという観点から、演出やセット、番組タイトルを決定していった。明るい話題や今後の対策についてもっと取り上げてほしかったという指摘を頂いた。今回取材を通して痛感したのは「四国には魅力的な仕事がない」という若者たちの先入観が、大きな転出要因になってしまっていることだ。それが少しでも変わるきっかけになればと「四国には若者が新たな仕事を創り出しやすい環境がある」といった、四国で頑張ろうと思える選択肢をしっかり提示することに努めたつもりだ。スタジオの一般人出演者は「ＮＨＫネットクラブ」でアンケートに答えてくれた人や、高松市を拠点に四国の活性化に取り組む社団法人「四国若者会議」を通じて知り合った人に、取材をした上で決定した。こうした経緯をもう少し丁寧に紹介すればよかったと思う。

○　四国は日本一、大げさにいえば世界一の人口減少先進エリアだ。これをなんとか食い止めようという狙いの番組で、７３分という長い放送時間と相まって、制作者のなみなみならぬ意欲を感じさせる内容になっていた。番組冒頭と最後の 2040 年のニュースのパロディーや、実際に四国を去った若者に取材した再現ＶＴＲなど、この問題をわかりやすく伝えようという意欲と工夫も見てとることができた。また四国在住者と東京在住者による討論番組として進行したことで、流出の当事者である若者の本音がうかがえたのもよかった。人口減少問題は「集落の消滅」、生活のインフラ廃止など、ショッキングな事態が身近に起きないかぎり、危機感や当事者意識を持つことが難しいと思う。しかしさまざまなデータが示すとおり、事態は待ったなしの状況で、行政が多彩なアイデアに真剣にチャレンジしていくことが必須と感じた。消滅可能性の高い地域を活力ある場所に変えていくには、若い人にとって魅力あるまち作りに取り組む必要がある。徳島県神山町のように、地域のリーダーや高齢者が若者を支援しながら行政を巻き込み、地道に種をまいていくことが大切だと思う。司会について、水道橋博士と安部みちこアナウンサーのコンビはよかったが、男性芸能人には四国出身者を起用してほしかった。スタジオゲストの原田さんと受田教授の解説はわかりやすく、問題解決の主役となる若者に理解が深いのにも好感が持てた。番組終盤、年間キャンペーン「Ｄｉｓｃｏｖｅｒ四国」では人口減少問題に今後もとことん向き合っていく、という宣言があった。次回は行政を巻き込んだ、さらに突っ込んだ内容を期待している。

○　人口減少という重いテーマを扱うのにもかかわらず、番組はニュースのパロディーでスタートした。視聴者に受け入れられたのか疑問に思う。スタジオでの議論にも斬新な内容はなく深みも感じられなかった。事前準備をもっと入念にすべきではなかったか。一方、人口減少について受田教授が語った言葉「静かなる有事」はまさにそのとおりで心に残った。若者を単に四国に留めるのではなく、地域力を高めることでＵターン・Ｉターンにつなげることこそ重要だと感じた。受田教授が紹介した、島根県海士町長の「若い世代には、子どもの時からの教育で地元への愛情をしっかり根づかせ、町を出ていく時には思い切り送り出す」姿勢は、Ｕターンの実績がある町だけに説得力があった。番組全体では、転入者を増やすという観点から若者に焦点を当てたのは理解できるが、それが行き過ぎて高齢者を軽視している印象を受けた。また前半にナレーションで「人口減少というピンチをチャンスに変えるモデルを模索する」とうたっていたのに、見終わった時そのモデルが何なのかよくわからなかった。それが、後半に紹介した徳島県でのドローンを使った最新研究なのか、高知県での人口知能を使った介護予防の満足度測定なのか、それとも「ドベネックの桶」による気付きの手法だったのか。フリをしたのなら受けを明確にしてほしかった。

○　人口減少と高齢化はまさに四国の切実な問題で「100 人の村の紙芝居」は端的にそれを伝えていたと思う。2040 年のニュースのパロディー「四国が消える！？」はインパクト満点だった。ただどうせやるならニュースキャスターだけでなく、町の消滅を記者会見で宣言する町長役や取材する記者役も老人のメークをして、ニュースタジオも未来風にするなどやりきって欲しかった。番組のスタジオトークでは、出演者が語る人口減少の現状とその原因に予想外のものがなく引きつけられなかった。むしろ安部アナウンサーがサラッと紹介した、松山市の人口減少対策推進条例や、市民に危機感を持ってもらおうと工夫されたパンフレットに興味を引かれた。四国を離れた若者たちを描いた再現ドラマは不要な演出が多く、時間も長すぎたと思う。番組全体でも、この内容なら７３分という長時間にする必要はなかったのではないか。また番組中、ＮＨＫが四国の人口減少について行ったアンケートから「都会に移住するような政策をとるべき」「消滅を前提とした議論が必要」といった意見が紹介されていた。いったいどのような人を対象に行われたアンケートなのか。過疎地で暮らす多くのお年寄りを知る身として非常に不愉快だった。高齢者を集める「コンパクトシティー構想」の布石のようにも感じた。一方、スタジオで受田教授が語った「人口減少は静かなる有事で国の危機である」という言葉は心に響いた。教授の発言には「若者は思い切り送り出すとまた地元に戻ってくる」という「ブーメラン効果」や「ドベネックの桶」など、刺激に富んで共感できる内容が多く、番組に厚みを持たせていたと思う。後半には、高知県の嶺北地域への若者移住や、徳島県神山町で地域ぐるみで若者の起業を応援する取り組みを紹介していた。こうしたポジティブな事例をもっと多く取り上げてほしかった。

○　今年度の四国ＮＨＫの年間キャンペーン「Ｄｉｓｃｏｖｅｒ四国」のキックオフ番組ということで、７３分の長時間ながら見ごたえのある構成で、今後のキャンペーンに期待できる内容だった。ただ冒頭のパロディーニュースは不要だったと思う。お年寄りのイメージを誇張したメークやジェスチャーからは、高齢者を思いやる配慮が感じられなかった。これを見てチャンネルを変えた視聴者もいたのではないか。タイトルの「四国が消える！？」もあおりすぎで、もっと具体的なものにすべきだった。またスタジオの一般人出演者が大卒者らしい人ばかりで、高卒者の意見が入ってないように思えたのも気になった。ただ高知県大豊町の矢野さんのように「都会に出て組織の駒になるより、自分の役割のあるところにいたい」という意識の高い若者の登場には、彼らこそ人口減少問題のキーパーソンであり、希望の光だと感じさせてくれた。若者たちの意見が予想以上に新鮮で、実際に使えそうなアイデアが数多く出てきたのもうれしかった。こうした若者の声を反映させた続編の制作をぜひお願いしたい。また人口減少は若者だけでなく、シニアの生きがいにも関わる問題だと思う。徳島県神

山町で若者の起業支援をしている大南信也さんや地方で人生を全うしようと移住してくるシニアなど、高齢者の力を借りた地域活性化も大事ではないか。そうした視点の番組もぜひ制作していってほしい。

○　四国の抱える深刻な問題である人口減少に焦点を絞った番組だった。将来的には自治体の「消滅」もありえるという厳しい問題提起にもかかわらず、番組全体が明るく未来への希望が持てる内容だったのはよかった。司会の安部アナウンサーは積極的に若者の意見を引き出し、発言しやすい雰囲気を作り出していた。ゲストの博報堂の原田さん、高知大学の受田教授の発言は的確だったし、司会の水道橋博士さんが全体を大きくまとめる進行もスムーズで、７３分という放送時間をあまり長く感じずに視聴できた。地元の若者への提言として、島根県海士町長の「思いっきり出て行け」というブーメラン効果を狙った姿勢や、何事にも「やったらええんちゃうん」と前向きな徳島県神山町の「神山塾」の取り組みなど、若者の意志や行動をポジティブに受け止める大切さも教えられた。「四国にやりたい仕事がない」という問題も、デザインやＩＴなど若者に人気の仕事は、実は地方でこそ必要とされているはずで、お互いのミスマッチを見直せば雇用を生み出せる可能性はあると感じた。その一方で、若者が四国から出て行くさらに深い理由が、ほかにもあるのではないかとも感じた。スタジオの若者が人口減少克服への提言として「この番組を全国に放送してもらえたら」とコメントしていた。人口減少は四国のみならず地方に共通する課題であり、ぜひ全国放送してほしい。

（ＮＨＫ側）

人口減少に関連するシニアや高卒の若者の問題は、それぞれ３０分程度の番組になるテーマで、今後キャンペーンの別の番組で取り上げていきたい。番組冒頭のニュースのパロディーは、人口減少の影響が映像で端的に伝わる現場が少ない中、若者を含む視聴者をどうやってひきつけるか悩んだ結果、トライしてみた。指摘を受け止め、今後は別の演出も考えていきたい。人口減少は四国の普遍的課題だけにこれまでにも取り上げた番組は数多く、制作者もその既視感に悩むことが多い。それでも伝え続けることが問題解決のきっかけになるかもしれない。このテーマには今後も引き続き取り組んでいきたい。

四国の各地で伝統の祭りが行えなくなったり「消滅する集落」が増えたりしていることについて「ＮＨＫネットクラブ」で全国の会員に意見を聞いてみた。すると「四国は人が減っているんですか」

「人が減ると何が問題なんですか」といった声が数多く寄せられた。この問題への危機感がいかに共有されていないかを痛感した。全国の統計調査を見ると、四国では「消滅集落」の問題がより深刻であることが分かる。こうした部分をさらに掘り下げ演出もより工夫して伝えれば、番組の既視感をさらに解消できたのではないか。タイトルやニュースのパロディーは、流出の主体である若者向けにあえてチャレンジした。意見は今後の番組に生かしていきたい。

＜放送番組一般について＞

○　５月９日(火)のハートネットＴＶ「亜由未が教えてくれたこと」を視聴した。この番組は去年７月に神奈川県相模原市で起きた障害者殺傷事件に衝撃を受けた番組ディレクターが、東京都の実家に戻り、脳性まひと重い知的障害のある妹・亜由未さんを世話し介助していく過程を記録したものだ。まず、ディレクターみずからが自身と家族の日々を記録していく、という番組のつくり自体に大変興味をひかれた。ディレクターは妹の笑顔を見たいと、体位の交換や食事の介助で悪戦苦闘する。それに対して母親が、笑顔でない妹の存在自体を認めるべきだと諭す場面がある。一番の見どころで心に響くシーンだった。構成や完成度に未熟なところもあったが、妹のことをもっと知りたいというディレクターの強い意思によって、番組の尊厳が一貫して保たれていたと思う。まさにＮＨＫにしか作れない内容で、もっと評価され、多くの人に知ってもらうべき番組だと感じた。

○　新番組「人名探究バラエティー 日本人のおなまえっ！」に違和感を覚えることが多く、非常に残念だ。「さいとう」や「高橋」など名字をテーマに回を重ねてきたが、出演者がギャグを繰り返したり過剰に驚くなど、民放のバラエティー番組と同じような演出に期待外れと感じる。名字というテーマそのものは大変興味深い題材なので、わざとらしい演出に走るのではなく、名字が生まれた背景にある歴史や暮らし、日本人の考え方がしっかりと見えてくる切り口・演出で制作していってほしい。

ＮＨＫ松山放送局
番組審議会事務局

平成２９年４月ＮＨＫ四国地方放送番組審議会

４月のＮＨＫ四国地方放送番組審議会は、１７日(月)、ＮＨＫ松山放送局において、９人の委員が出席して開かれた。

会議では、まず事前に視聴してもらった、にっぽんカメラアイ「この島で暮らしたい瀬戸内海巡回診療船」を含め、放送番組一般について活発に意見の交換を行った後、５月の番組編成、放送番組モニター報告および視聴者意向についてそれぞれ説明があり、会議を終了した。

（出席委員）

委員長	松井　忍	（ＮＰＯ法人ＧＣＭ庚申庵倶楽部理事長）
委　員	神田　優	（ＮＰＯ法人黒潮実感センター センター長）
	黒笹　慈幾	（南国生活技術研究所代表）
	佐伯　美香	（松山東雲女子大学・短期大学バレー部コーチ）
	田坂　實	（愛媛県農業協同組合中央会会長）
	長井　基裕	（愛媛新聞社執行役員編集局長）
	松島　裕彦	（四国旅客鉄道代表取締役専務 総合企画本部長）
	真弓　絵里子	（高松紺屋町クリニック健診センター センター長）
	村田　明広	（徳島大学大学院社会産業理工学研究部教授）

（主な発言）

＜にっぽんカメラアイ「この島で暮らしたい　瀬戸内海巡回診療船」（松山）
（ＢＳプレミアム ３月１８日(土)）について＞

○　番組タイトルから、瀬戸内海の島々を巡回する診療船・済生丸が主役の番組を想像していた。ところが実際は、年に一度の診療を待つ島のお年寄りたちのことばを、一つ一つ積み上げる構成だったのが新鮮だった。愛媛県の釣島に暮らす８８歳の山内要子さんが化粧をするシーンは、特に印象に残った。化粧をしたのは診療船が来るから、という文脈で描かれていたが、本当はテレビに出るからだと思う。このように、お年寄りが暮らす小さな島に、一瞬だが非日常のハレの時間が生じたことを、テレビの大事な役割のひとつとして評価したい。すてきな言葉もたくさん散りばめられていた。愛媛県の安居島の女性の「人が少ないから診療船に来ていただくのが気の毒なぐらいです」ということばからは、済生丸への感謝の気持ちがしみじみと伝わってきた。取

材相手がリラックスしているからこその発言で、ことばを引き出す取材者の力量にも感心した。この番組にはナレーションがなく、必要な説明はテロップでなされていた。ナレーションのない良さはあったと思うが、テロップがやや多いと感じた。

○　番組冒頭、お年寄りが健康診断を受ける映像を見た時「ここは病院？」と思ったが、それが済生丸船内の映像とわかり驚いた。印象的だったのは、島のお年寄りたちがカメラマンのインタビューにうれしそうに答えていたことだ。釣島の山内さんは島の外から来た人と話すのが楽しみで、その時は必ず化粧をするという。「島民はすべて顔見知り」という「日常」とは違う、「島民以外の人との出会い」という「非日常」を楽しみにしているのだろう。番組中何回か登場する猫も心に残った。島には猫がよく似合う。のんびりマイペースに暮らす猫と島の人の姿が重なって見えた。離島の抱えるさまざまな問題そのものに焦点を当てるのではなく、年一度の診療船の訪問を切り口に、島民との会話からその心情をくみ取ることができる番組になっていて、大いに好感を持った。

○　巡回診療船の存在をこの番組で初めて知った。済生丸は昭和３７年に運航を始めて以来、航行距離は８１万キロメートル、地球２０周分になるという。その割に船が新しそうに見えたので調べたところ、現在の船は４代目だそうだ。誤解を招かないよう説明すべきだったと思う。釣島で唯一の商店を営む８９歳の山内清さんは、済生丸の医師のことを「医者のひよこが来る」と話していた。「ひよこ」とは若い研修医のことだろう。その研修医の話も聞きたかったし、山内さんとのやりとりが撮影できれば興味深いシーンになったのではないか。釣島の８４歳のみかん農家・小池禮子さんは「死ぬる」「いぬる」という、今はあまり使われないことばで話していた。そうしたことばで普通に話していることに驚いたし、彼女の「もうちょっと生きたい」ということばは特に心に残った。気になった点だが、済生丸の運営には国や自治体から補助金が出ているのか、診療に自己負担が必要なのかは教えてほしかった。１５分の番組で何でも紹介するのは難しい。もう少し長い時間の番組にしてほしかった。

○　１５年前に研修医として済生丸に乗り、診療にあたった経験がある。とても懐かしく番組を視聴した。美しい映像とテロップに、ナレーションなしで音楽だけという演出が、心にグッとしみわたる番組だった。音楽の使い方は背景や状況に応じて、よく工夫されていたと思う。１５分という限られた時間で、島民のキラキラした表情をたくさん見せてくれたのもよかった。巧みな編集で、済生丸がかけがえのない存在であることが伝わってきた。釣島の小池さん夫婦のみかん畑でのかけあいは、愛情とユーモアたっぷりで、島で暮らしてきたからこその強さとやさしさを感じた。それを支えるひとつがこの診療船であり、自分も関われたことに改めて感銘を受けた。島の人か

らお菓子や野菜を白衣のポケットに入れてもらうなど、私にも研修医時代の楽しい思い出がいっぱいある。そうした島の方と医師との交流にも触れてほしかった。補助金や自己負担について、また研修医や看護師など医療従事者や乗組員についても、教えてほしかった。番組のテロップは、方言などを聞き逃すこともあるので、親切だと感じた。

○　タイトルに「カメラアイ」とあるだけあって、映像の高い鮮明度が印象的だった。天日干しのイカは本当においしそうだったし、ひなたぼっこをする猫は毛並みの描写が見事で、自分も猫になりたいと思うほどだった。この番組にはナレーションがなく、聞こえてくる人の声はカメラマンの問いかけを含めて登場人物の会話だけだ。そのことが番組に独特の雰囲気を醸し出していた。その分、テロップの役割は非常に大きくなる。会話が方言なのにテロップが標準語なのは気になったが、よく聞き取れない時テロップに助けられたこともあった。みかん畑での小池さん夫婦のやりとりからは夫婦の仲の良さが伝わってきたし、化粧をする山内さんは元気で美しく、長生きされるのだろうと感じた。この２つの場面は番組中最高のシーンだろう。その一方で、診療船で働く人々の素顔や暮らしはよくわからなかった。切り口を変えれば、別の「にっぽんカメラアイ」ができるのではないかと感じた。

（ＮＨＫ側）

「にっぽんカメラアイ」は平成２８年度で５年目を迎える、カメラマンの提案による番組だ。ナレーションやテロップは最小限にとどめ、できるだけ現場の映像と音声だけで表現することを目指している。「映像で物語る」というカメラマンの原点を大切に制作している。今回は去年始まったスーパーハイビジョンの試験放送も視野に入れ、全編４Ｋによる撮影で制作した。

この番組の撮影をはじめ、取材から編集まですべてを担当した。番組で取材した釣島と安居島は、どちらも船の便が大変少なく、それぞれ２日間しか滞在できなかった。限られた時間にできるだけ多くの方と会い、いろいろな話をした。その積み重ねが飾らない自然な会話につながったのではないか。猫を撮ったのは、やはり島には猫がよく似合うからだ。番組で最初に登場した猫は、近づいて撮影できるまで２時間ほどかかった。取材で行ったどの島にも猫がいたので、島の風景や通り過ぎる船といっしょにどうしても撮影したいと思い、ねばり強くチャンスを待った。視聴者の印象に残ってくれたのならうれしい。

○　番組にナレーションがないことで映像に集中でき、瀬戸内海の美しい自然を堪能することができた。何度か登場する無邪気な猫たちは心を癒してくれた。カメラが回っているにもかかわらず、釣島の山内さんは化粧をしたり、みかん畑で働く小池さん夫婦はプチ夫婦げんかをしたりと、何気ないありのままの姿が見事に映し出されていた。カメラマンが島の人としっかりコミュニケーションをとっていたからだろう。一方で島民が口々に「島はいい」「息がある限り島にいたい」と言うほど、島の何がいいのか、どんな魅力があるのかは、きちんとわからせてほしかった。また済生丸ではどんな診療をしているのかも教えてほしかった。四国には多くの美しい自然があり、まだ知られていないこともたくさんあると思う。美しい映像でどんどん紹介していってほしい。

○　ナレーションがない映像と音声のみでの構成が、島民の思いをくっきりと浮かび上がらせていた。１５分という短い時間だが余計な演出がない分、より深く心に残る番組だった。島の人が語った「死ぬまで息のある限りここにいたい」ということばは胸に響いた。島民どうしの触れ合いや島の気候などから、都会とは異なる時間の流れが伝わってきたし、島の暮らしのぬくもりも感じることができた。「いぬる」など、最近地元で耳にしないことばも自然に使われていた。愛媛県民のアイデンティティーを再確認できた思いだった。またみかん農家の小池さん夫婦の、飾り気のないやりとりは印象的だった。その一方で、診療船スタッフの声はほとんどなかった。人々の島での暮らしを番組の中心に据えるなら、診療船を切り口にする必要はなかったのではないか。気になったのは、釣島の山内清さんが済生丸の研修医のことを「医者のボロ」と呼んでいたことだ。これを聞いて本人がどう思うか心配になった。また診療船が瀬戸内のどこをどう回るのか、大まかでいいので地図で示してほしかった。

○　島民の飾らない日常が上手に映像化されており、猫の姿からも、ゆっくりゆったり流れる島の時間を感じることができた。釣島の山内さん夫婦と小池さん夫婦の話は、ユーモアがあり楽しく聞くことができた。このように気持ちが明るく健康でなければ、高齢者の方の島暮らしは難しいのではないか。済生丸の運航開始は今から５５年前の昭和３７年だという。当時は山内さんも小池さんもほぼ３０代前半で、家族もたくさんいて島は活気づいていただろう。人口３７人の釣島の空からの映像では多くの家並みが見えていた。そのことからも人口減少が急速に進んでいるのだろうと想像できた。島というと、最近は高齢化や過疎化など暗い話題が多くなりがちだ。それがこの番組では、元気なお年寄りが島を愛し生活を楽しむ様子を上手に伝えていて、ほのぼのと心温まる内容になっていたのが何よりよかった。また機会をとらえて、島の姿や情報を伝えてほしいと思う。

○　ゆったりほっこりとしたぬくもりを感じることができる番組だった。番組にはナレーションがなく、島の老人とカメラマンの会話だけで進行していく。カメラマンが方言で話しかけ、老人たちは気取りも緊張もなく答える。それが島の時間の流れをそのまま映し出しているように感じた。標準語の異質な要素が混じらないからこそ、生み出された空気感なのだろう。また老人たちの言葉ひとつひとつが味わい深く、心に響いた。化粧しておめかしした山内要子さんが「ぺっぴんさんになったろう。化けもんよ」と笑い飛ばす元気さ。その一方で「島がええなあ」としみじみつぶやく横顔の美しさ。取材を通して築き上げられた信頼関係が、見事に映し出されていた。瀬戸内海の島々を年一度診療船が巡回して、医療が行われていることには感動した。この検診のおかげで早期治療が実現できていることも初めて知った。その一方で、今は自力で動ける老人たちが、動けなくなった時どうなるのか不安になった。釣島３７人、安居島１０人の島民は、互いに助け合いながら生活している。それが１人でも減ったらと考えると、健康の大切さ、ひとりひとりの存在の重さを思い知らされた気がした。特別な解説をはさむことなく、島の時間そのままを淡々と映し出すことで、考えさせられることが数多くあった。これこそがテレビだから伝えられるもので、このような番組が今後も作られていくことを願う。

（ＮＨＫ側）

この番組は、カメラマン自身が提案、取材、撮影から編集まで行う数少ない番組だ。そのカメラマンの思いがストレートに出た１５分だと思う。いただいた貴重な意見をぜひ次につなげていきたいと思う。

済生丸は社会福祉法人の済生会病院が運営している診療船だ。それぞれの島には年一度しか訪れないが、島の人全員が済生丸に来るかどうかは当日にならないとわからない。病気が見つかったら怖いと船を避ける人もいるようだ。誰が来るかわからない中での一発勝負の撮影で、診療船のシーンは島にいる２時間でのやり取りがすべてだった。今回４Ｋという新しい技術で撮影を行った。ただ島の人との触れ合いや会話を積み上げて番組ができるのは、これまでと全く変わらない。カメラマンやディレクターが制作現場でやるべきことの普遍性を改めて確認できた、貴重な機会になった。

○　「カメラマンによるドキュメンタリー番組」というカメラマンの意欲と力が試される番組だからこそ、地域の特徴がリアルに映し出されていたと思う。ただ、温暖で平

和な瀬戸内の暮らしに引き込まれていったさなかに番組は終わってしまい、もっと見ていたい気持ちになった。島で生きるお年寄りにとって、年に一度の済生丸での診療日は、また来年まで元気でいようと思える、一年の大事な節目なのだろう。お年寄りの動きや猫の姿から、島のゆったりとした時間の流れを感じることができた。これこそカメラマンが表現したかったものではないか。番組のラスト「私はもう死ぬまでここにおりたい。島がええ。島がええなあ」と話す山内さんの表情と顔のしわはまぶしく、心に残るものがあった。

○　済生丸の活動を、瀬戸内海の島の人々の生活を通して、わかりやすく紹介していた。昼寝をしている猫の表情が、穏やかな瀬戸内の海と気候にマッチしていたのは印象的だった。安居島の女性が、人口１０人の小さな島に済生丸が来てくれるのを「気の毒なくらい」と話していた。人口減少や高齢化が進む過疎の島の人にとって、済生丸は命をつなぐ大切な船なのだろう。コストは小さくないだろうが、瀬戸内海に面した４県の協力と工夫で、ぜひ継続していってほしい。釣島の山内さん夫婦はコミュニケーションにたけ、カメラマンとの会話もおもしろかった。夫の清さんは済生丸の医師や看護師に会えることを「医者のひよこがやってくる」と、清さんなりの言葉でうれしさを表現していた。今回は受診者側の取材だったが、医師や看護師から船内泊の診療船ならではの苦労話を聞ければさらによかったと思う。

＜放送番組一般について＞

○　３月３日(金)のドキュメントしこく「“小さなことば”をみつめて」（総合 後8:15～8:43 四国ﾌﾞﾛｯｸ）を視聴した。愛媛県西条市の西条栄光幼稚園では、子どもひとりひとりを深く理解しようと、何気ない発言や行動を記録し見守る取り組みを続けている。言葉でのコミュニケーションが上手にできず、すぐ友達を叩いてしまう子が、先生の言葉を受け止め友達にアドバイスできるまで成長していく姿には、大変驚くと同時に感動した。人から言われてやるのではなく、自ら考え経験した結果の進歩はすばらしいと感じた。非常に興味深く有意義な番組だった。

○　３月１７日(金)のドキュメントしこく「今日も“希望の朝”が来る」は、徳島市の徳島中央公園で毎朝行われているラジオ体操に集う人たちの人間模様を、２か月間追った番組だった。昭和４年にラジオ体操が始まった当時や、その直後昭和初期の徳島中央公園でのラジオ体操の貴重な映像から、歴史の深さを知ることができた。ラジオ体操を通して地元の人が、健康を保ち参加者同士の無事を確かめるだけでなく、互いを思いやり励まし合う姿には心打たれた。人とのつながりが希薄な現代社会で、必要

なコミュニティーなのだろう。気が向いた時に誰でも参加して健康を維持でき、人の輪も広げられるラジオ体操はすばらしい。また歌詞が番組タイトルにもなった「ラジオ体操の歌」は、体操の前にピッタリの曲だと改めて感じた。

○　３月１８日(土)の「おはよう四国」では、スポーツクライミングが東京オリンピックの追加種目になったことに関連して、高松放送局の松下悠里キャスターが、香川県の五色台でロッククライミングに挑戦する様子を伝えていた。少し難しそうに見えたが、女性キャスターがチャレンジしたことで、男性だけでなく女性や年配者、子どもにも身近に感じられたのではないか。ヘルメットに小型カメラを付け挑んだリポートも、臨場感があってよかった。ただ命綱等の安全確保について、詳しい説明はなかった。丁寧に紹介すべきだったと思う。ボルダリングとの違いにも言及してほしかった。

○　３月２３日(木)の「阿修羅　１３００年の新事実」（総合 後 10:00～11:15）は、九州国立博物館が奈良県興福寺の国宝・阿修羅像をＣＴスキャンで分析した結果、さまざまな発見があったことを伝えていた。戦う仏である阿修羅は普通、手を合わせて祈る合掌の姿をとることは少ないという。今に残る明治時代の興福寺阿修羅像の写真でも、右腕は失われているが合掌していたようには見えない。それをＣＴスキャンなどの分析をもとに制作当初の阿修羅像をＣＧで再現していたが、その阿修羅は体の正面で厳かに手を合わせていた。阿修羅像を作らせた光明皇后は、この合掌する姿で、飢饉や外国の脅威に苦しむ人々を励まそうとした可能性があるという。当時の政治理念が浮かび上がり、大変おもしろかった。ぜひ奈良に行き阿修羅像を実際に見てみたい。

○　３月２６日(日)の大相撲春場所「千秋楽」で稀勢の里が逆転優勝した。優勝決定戦になり想定したスケジュールではなかったのかもしれないが、優勝のインタビューが放送されなかったのは残念だった。

○　３月２６日(日)の第８９回選抜高校野球大会「第７日」について、第２試合「福岡大大濠」対「滋賀学園」と第３試合「健大高崎」対「福井工大福井」は、大会史上初の２試合連続引き分け再試合となった。この２試合は監督インタビューが放送されなかった。歴史的試合で、監督の話が聞けなかったことを残念に感じた。

○　大河ドラマ「おんな城主　直虎」について、井伊直虎が男性だという資料が新たに見つかったという。番組への影響はあるのか教えてほしい。

（ＮＨＫ側）

高校野球について、この日テレビの放送終了は１７時と発表していた。しかし２試合連続の延長引き分け再試合となり、放送時間を大幅に延伸して１８時３０分まで伝えた。試合後の監督インタビューを放送するかどうかは、試合内容や後続番組への影響を総合的に判断した上でそのつど決めており、今回はインタビューを放送しなかった。

「おんな城主　直虎」について、ドラマはフィクションであり、直虎が男性だという新たな資料も諸説あるうちの一つと考えており、番組への影響はない。

○　古舘伊知郎さんが司会の新番組「人名探究バラエティー　日本人のおなまえっ！」がスタートした。名前から日本語の成り立ちを考えるという視点が非常に興味深く、これからも楽しみにしている。ただ内容がおもしろいだけに、古舘さんにはもう少し静かにしてほしいと感じた。４月４日(月)に再放送された回では、石川県能美市の下開発町で「東」「西」「南」「北」という名字の人たちがその方角どおりの場所で暮らし、さらにその中央には「中」さんが住んでいることを紹介していた。方角どおりの名字によって地域の一員としての自覚が強まり結束力も高まった、という解説にはうなずかされた。また番組中、沖縄では「東」のことを「あがり」、「西」のことを「いり」と読むと説明していた。西表島（いりおもてじま）やイリオモテヤマネコの名前から広く知られていることだと思っていたので、出演者の大げさな驚きように違和感を覚えた。

○　昨年度まで毎週木曜日に放送していた「ファミリーヒストリー」は、３月１６日放送の名場面集が最終回だった。好きな番組の１つだったのでぜひ再開してほしい。

○　愛媛県域向け番組のいくつかが新年度リニューアルされ、キャスターやアナウンサー、気象予報士の顔ぶれも変わった。新しい予報士は当初ぎこちない様子で心配していたが、日々よくなっており応援している。

○　４月３日(月)にスタートした「連続テレビ小説　ひよっこ」は、東京オリンピックが開催された 1964 年に時代を設定していた。当時のテレビ番組やヒット曲など、昔を思い出させてくれる内容が満載で楽しんで見ている。

○　新年度、ニュース番組のキャスターやアナウンサーが変わり期待して見ている。「ニュースウオッチ９」のスタジオセットは大幅にリニューアルされた。ＮＨＫのニュース番組にはとても見えず、まるで民放のようだ。「セットではなくニュースの中

身で勝負」ということかもしれないが、民放の中にＮＨＫが埋没していくようで残念に思う。また最近、キャスターやアナウンサーの首から上を大きく映し出す、証明写真のような映像が多いと感じる。ここまでのアップが必要なのか疑問に思う。

○　「ニュースウオッチ９」のスタジオセットは、背景がごちゃごちゃした印象で気になっている。

○　４月７日(金)の四国羅針盤「“外国人富裕層”がやってくる！？四国観光の新戦略」について。番組冒頭に「外国人富裕層とは１週間で 100 万円以上消費する人」という定義づけをしていた。明快でわかりやすかったが、そうした観光客がいることにまず驚いた。彼らがどんなビジネスモデルの下、四国を巡っているのか大変興味深く視聴した。お遍路ブームを取り上げた番組が数多く放送されている影響なのか、四国の外国人観光客は増えていると思う。外国人観光客に今日本が人気なのは、独自の歴史や文化に加え、テロが相次ぐヨーロッパより治安がよいからだという。しかし地域別の外国人宿泊者数の割合を示すデータで、四国はわずか０．９パーセントだった。現状がよく認識できた。そんな中、外国人を四国に呼び込むため、四国独自の文化である遍路や、山岳信仰の聖地・石鎚山など、神秘的なイメージを生かした富裕層向けツアーの開発が行われているそうだ。富裕層専門の旅行プランを提供する「プライベート・トラベル・デザイナー」という職業も、この番組で初めて知った。高額の旅行は一般的ではないと思うが、地元の魅力を改めて知るきっかけになりおもしろかった。

○　４月７日(金)の「四国羅針盤」を視聴した。現在インバウンドは「量より質」の段階に入っていて、富裕層がターゲットになることは間違いないと思う。「プライベート・トラベル・デザイナー」という仕事をで初めて知ったが、日本でも大いにニーズがあると思う。また日本は治安のよさが外国人から好評で、「安全」も観光資源になることがよくわかった。外国人富裕層は日本人の観光客と違って、「自分だけの特別な体験」を求めているそうだ。奈良県では相撲や居合切り体験、オーダーメイドの日本刀制作、春日大社の夜間貸し切り等、多彩な観光プランを提示していて感心した。スタジオゲストでタレントのパトリック・ハーランさんと元観光庁長官の本保芳明さんは「外国人富裕層を引きつける四国の観光資源は、遍路や石鎚山の山岳信仰など“神秘体験”ではないか」「彼らが欲しがるのはクリック１つで買えないもの。オンラインで買えないものだ」と話していた。教養や好奇心あふれる外国人が日本の観光地に求めるものに注目することで、日本人の視点だけではとらえにくい、地域の魅力が見えてくるのではないか。その意味でも四国は観光資源の宝庫だと思う。インバウンド対策は高知県でも喫緊の課題で、外国人富裕層にどうやってお金を落としてもらうかは現実的テーマだ。彼らの消費行動を正確に把握できているとは言い難く、観光関係

者は頭を悩ませている。その現状を的確にとらえた秀逸な番組だった。

○　４月９日(日)のＮＨＫスペシャル「大地震・あなたの家はどうなる？～見えてきた“地盤リスク”～」を視聴した。震度７を観測した益城町では、家屋が軒並み倒壊した地域がある一方、そこから少し離れた場所では大きな被害が出ていなかった。家が建つ地盤の粘土層の厚さが、揺れに大きく影響していたという。番組によれば、戸建ての建築は、軟らかい粘土層がある一定の厚さの土地で揺れが非常に大きくなり、粘土層がそれより薄くても厚くても、揺れは大きくならないそうだ。これまでは「地盤表層部の柔らかい地層が厚いほど、揺れは増幅して大きくなる」と考えられており、今回の結果は大変意外なものだった。

○　４月９日(日)の「ＮＨＫスペシャル」を興味深く見た。一般的に軟らかい地層は地震で揺れやすいと考えられていて、そうした土地は評価額も低い傾向にある。今回、それを覆す研究結果が出たことに大変驚かされた。また家やマンションを建てる時に地中に打つくいは建物の重さを支えるためのもので、くいを打ってあるから揺れに強い訳ではない、という説明にはうなずかされた。比較的安価な対応策として、２階建て木造住宅なら１階の壁を合板材で強化することが大切だ、という指摘には説得力があった。番組全体を通して感じたのは、近年地震の話題がクローズアップされているにもかかわらず、この分野の研究はまだまだ途上だということだ。必要なデータが地震発生時にしか取れないからだろう。こうした分野の研究がもっともっと進んでほしいと思う。

○　４月１７日(月)の「おはよう日本」のコーナー「けさのクローズアップ」では、松山市のＮＰＯが運営する、学校に通えない子どもたちの学びの場「翼教室」を紹介していた。運営は主に寄付金によるというが、受け入れを望む子どもは増え続けており、このままでは経済的に破たんしかねないという。こうした課題への対応策として、行政が支援する川崎市のフリースクールも取り上げていた。「けさのクローズアップ」は出勤前の時間にさまざまな知識を得られる貴重なコーナーだ。ぜひ今後も続けていってほしい。

ＮＨＫ松山放送局
番組審議会事務局